学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

令和7(2025)年度 九州栄養福祉大学・大学院 教員情報

【食物栄養学部 食物栄養学科】・【健康科学研究科 健康栄養学専攻】

杉元（スギモト） 康志（ヤスシ） SUGIMOTO Yasushi

学長補佐（食物栄養学部担当）、食物栄養学部長、
大学院 健康科学研究科長・教授

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・栄養福祉論 ・食品加工学 ・食品加工学実習 ・基礎生物学 ・食品機能論 ・食品学実験Ⅰ ・栄養福祉論 ・専門ゼミナール ・卒業論文 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ 〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕 ・健康科学特別講義Ⅰ、健康科学特別講義Ⅱ ・健康科学研究法特論Ⅱ、健康科学研究法特論演習 ・食品学特論Ⅰ、食品学特論Ⅱ ・特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ
専門分野	■ タンパク質科学 ■ 分子生物学 ■ 食品化学
最終学歴	鹿児島大学大学院 農学研究科 修了
学位	農学博士（九州大学）
職歴	西南女学院短期大学 食物栄養科 講師 (昭和50(1975)年4月～昭和56(1981)年3月) 西南女学院短期大学 食物栄養科 助教授 (昭和56(1981)年4月～平成8(1996)年3月) カナダ・カルガリー大学医学部 客員研究員 (昭和60(1985)年10月～昭和61(1986)年9月) 鹿児島大学 農学部 助教授 (平成8(1996)年4月～平成13(2001)年2月) 鹿児島大学 農学部 教授 (平成13(2001)年3月～平成13(2001)年3月) 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 教授 (平成13(2001)年4月～平成28(2016)年3月) 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 副研究科長 (平成24(2012)年4月～平成25(2013)年3月) 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 研究科長 (平成25(2013)年3月～平成28(2016)年3月) 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授 (平成28(2016)年4月1日～現在に至る) 鹿児島大学 名誉教授 (平成28(2016)年4月～現在に至る) 九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科長 (平成30(2018)年4月～現在に至る) 九州栄養福祉大学学長補佐（食物栄養学部担当） (令和2(2020)年4月～現在に至る) 九州栄養福祉大学食物栄養学部長 (令和2(2020)年4月～令和6(2024)年3月) 学校法人東筑紫学園 評議員 (令和2(2020)年4月～現在に至る) 学校法人東筑紫学園 理事 (令和2(2020)年4月～現在に至る) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学地域連兼センター長 (令和5(2023)年7月～現在に至る)
教育上の業績	○西南女学院短期大学で栄養士養成の教育に携わった。 ○鹿児島大学農学部生物資源化学科および大学院にて多くの学士、修士を輩出した。 ○鹿児島大学大学院連合農学研究科にて博士課程の運営・管理に携わりながら教育システムの構築し、多くの博士を輩出した。

主な研究活動	【 論 文 】 タンパク質の構造と機能の研究を中心に生化学、分子生物学、発生生物学アプローチを行った。主な発表論文は以下の通りである。
	1. **Egg-yolk trypsin inhibitor identical to albumen ovomucoid.** （共著） Biochimica et Biophysica Acta788:117-123(1984)
	2. **Purification and characterization of benzoyl-L-tyrosine ethyl ester hydrolase from the yolk sac membrane of chicken egg.**（共著） Biochemistry and Cell Biology 64: 543-547(1986)
	3. **Flow of egg white ovalbumin into the yolk sac during embryogenesis.**（共著） Biochimica et Biophysica Acta 992: 400-403(1989)
	4. **Comparison of egg and embryo proteins and a trial to detect proteolytic activitiesin eggs of Bombyx mori.**（共著） Comparative Biochemistry and Physiology 96B: 253-256（1990）
	5. **Gene structure and multiple mRNA species of Drosophila melanogaster aldolase generating three isozymes with different enzymatic properties.**（共著） Journal of Biochemistry 12:677-688(1992)
	6. **Isolation and characterization of cDNA and genomic promoter region for a heat shock protein 30 from Aspergillus nidulans.**（共著） Biochimica et Biophysica Acta 1219: 555-558（1994）
	7. **Analysis of the in vitro translation product of a novel-type Drosophila nelanoga-ster aldolase mRNA in which two carboxyl-terminal exons remain unsliced. (共著)** Archives of Biochemistry and Biophysics 323:361-366.(1994)
	8. **A proteinase inhibitor from egg yolk of hen is an ovoinhibitor analog. (共著)** Biochimica et Biophysica Acta 1295:96-102.(1996)
	9. **Ovalbumin in developing chicken eggs migrates from egg white to embryonic organs while changing its conformation and thermal stability. (共著)** Journal of Biological Chemistry 274:11030-11037.(1999)
	10. **Ovotransferrin antimicrobial peptide(OTAP-92) kills bacteria through a membrane damage mechanism.**（共著） Biochimica et Biophysica Acta 1523:196-205.(2000)
	11. **Occurrence of ovalbumin in ovarian yolk of the chicken during oogenesis.**（共著） Biochimica et Biophysica Acta 1526:1-4.（2001）
	12. **Oviductin, the oviductal protease that mediates gamete interaction by affecting the vitelline coat in Bufo japonicus: its molecular cloning and analyses of expression and posttranslational activation.**（共著） Developmental Biology 243:176-184.（2002）
	13. **Perchloric acid-soluble protein regulates cell proliferation and differentiation in the spinal cord of chick embryo.**（共著） FEBS letters 579: 2416-2420.(2005)
	14. **Thermostabilized ovalbumin that occurs naturally during development accumulates in embryonic tissues.**（共著） Biochimica et Biophysica Acta 1723:106-113.（2005）
	15. **Transition of ovalbumin to thermostable structure entails conformational changes involving the reactive center loop.**（共著） Biochimica et Biophysica Acta 1770:5-11.（2007）
	16. **Aggregates with lysozyme and ovalbumin show features of amyloid-like fibrils.** （共著） Biochemistry and Cell Biology 89: 533-544.（2011）
	17. **Analysis of core region from egg white lysozyme forming amyloid fibrils.** （共著） International Journal of Biological Science 9: 219-227.（2013）
	18. **Amyloid fibril formation in vitro from halophilic metal binding protein: its high solubility and**

	reversibility minimized formation of amorphous protein aggregations.（共著） Protein Science 22: 1582-1591.（2013）
	19. **Amyloidogenic lysozymes accumulate in the endoplasmic reticulum accompanied by the augmentation of ER stress signals. (共著)** Biochimica et Biophysica Acta 1850:1107-1119.（2015）
	20. **Amyloid fibril formation from a 9 amino acid peptide, 55th-63rd residues of human lysozyme. (共著)** International Journal of Biological Macromolecule 80:208-216.（2015）
	21. **Lysozyme Mutants Accumulate in Cells while Associated at their N-terminal Alpha-domain with the Endoplasmic Reticulum Chaperone GRP78/BiP. (共著)** International Journal of Biological Science 12: 184-197.（2016）
	22. **Insoluble expression of highly soluble halophilic metal binding protein for metal ion biosorption: Application of aggregateon-prone from hen egg white lysozyme. (共著)** Protein Expression & Purification 156:50-57.(2019)
	23. **Repression effects of hydrolysates from hen-egg proteins on amyloid fibril formation.**（共著） Journal of Poultry Science 59: 384-391. (2022)
	24. **Stability of hen egg-white lysozyme during embryonic development(共著) Bioscience,** Biotechnology, and Biochemistry 86: 353–361. (2022)
	【 学 術 報 告 】
	1. 鶏卵タンパク質由来ペプチドの新規機能の探索と有効利用 「旗影会学術報告 2016 年報告」 （平成 29(2017)年 5 月 http://www.nakashima-foundation.org/kieikai/pdf/28/2016T015.pdf）
	【 学 会 講 演 】
	1. 分泌タンパク質の不良化によるアミロイド線維形成と小胞体ストレス （第 160 回日本獣医学会学術集会シンポジウム「機能性食品の新たな研究展望」平成 29(2017)年 9 月）
所 属 学 会	日本生化学会 (昭和 50(1975)年 9 月～現在に至る) 同 評議員 (平成 14(2002)年～現在に至る) 同 代議員 (平成 28(2016)年～現在に至る) 日本生化学会九州支部（評議員） (平成 14(2002)年～現在に至る) 日本農芸化学会 (昭和 48(1973)年 9 月～現在に至る) 同 評議員 (平成 22(2010)年～平成 23(2011)年) 同 代議員 (平成 24(2012)年～平成 25(2013)年) 日本農芸化学会西日本支部参与 (平成 18(2006)年～現在に至る) 日本分子生物学会 (昭和 63(1988)年 12 月～現在に至る)

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

安倍（アベ） ちか（チカ）　ABE　Chika　　食物栄養学科長・教授

所　　属	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部　　食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・児童・生徒の栄養指導Ⅰ、児童・生徒の栄養指導Ⅱ ・栄養教育論実習Ⅰ ・栄養教育実習事前・事後指導 ・栄養教育実習 ・教職実践演習（栄養教諭） ・食健康センター活動 ・専門ゼミナール ・管理栄養士演習ⅠA、ⅠB
専門分野	■教員養成専門分野（栄養教諭）
最終学歴	山口女子大学（現：山口県立大学）　家政学部　食物栄養学科　卒業
学　　位	学士（家政学）
職　　歴	田川郡糸田町立糸田小学校 技師　1986年4月～1995年3月 田川郡赤池町立市場小学校 主任技師　1995年4月～2004年3月 福岡県教育庁筑豊教育事務所 主任技師　2004年4月～2005年3月 福岡県教育庁 教育振興部 スポーツ健康課 技術主査　2005年4月～2007年3月 福岡県教育庁 教育振興部 体育スポーツ健康課（課名変更）指導主事　2007年4月～2011年3月 田川郡糸田町立糸田小学校 栄養教諭　2011年4月～2016年3月 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授　2016年4月～2022年3月 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科長 教授　2022年4月～現在に至る
教育上の業績	○　作成した教科書 「よくわかる栄養教諭―食育の基礎知識―　第二版」（共著）　同文書院　2016年4月 編著　藤澤良知・芦川修貳・古畑公・田中弘之・田中延子 著　土谷政代・太田裕美子・白尾美佳・亀田明美・守田真里子・登坂三紀夫 山口蒼生子・梅垣敬三・小河原佳子・堤ちはる・原ゆみ・安倍ちか 12章3節　学校給食で伝えたい食文化　p267～270 「栄養教諭のための教育実践演習・栄養教育実習ノート」（共著）学建書院 2021年2月 監修　芦川修貳　編集代表　田中延子　編集　守田真里子・高田尚美 著　秋葉佳子・芦川修貳・安倍ちか・岩田雪子・内田良子・太田裕美子・岸根美絵・後藤純子 島村幸代・高田尚美・高橋和子・竹内佳代子・田中延子・田中広美・土谷政代・飛松佳子 中津井貴子・西内恵子・水島眞由美・守田真里子・山際昌枝　p23・24　p70～72
主な研究活動	【学術論文】 1．小学校高学年時の朝食時の食環境がストレス対処能力に及ぼす影響（共同研究） 日本食育学会誌　第13巻　第3号　201-210　2019年7月 （概要）太田雅規・梅木陽子・安倍ちか・江副貴子・浜谷小百合・沖田千代 小学校高学年時の朝食における欠食や孤食、共食といった食環境が、成人してからの SOC の形成に及ぼす影響等を調査分析することで、小児期における朝食時の家族の食事の重要性について検証した。 2.　児童の食行動・食意識と心身の健康状態との関連性（共同研究） 九州栄養福祉大学研究紀要第17号　2020年12月 （概要）安倍ちか・沖田千代・梅木陽子・浜谷小百合・太田雅規 学校給食をはじめとする食に対する意識や家庭における食環境等が子供の心身の健康状態に及ぼす影響について究明し、今後の子供への食育に役立てることを目的とした。 3.　コロナウイルス感染症拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響： その1～生活面に着目して～　（共同研究）

九州栄養福祉大学研究紀要第18号　p71 ～ p83　　2021年12月

（概要）樋口綾子・安倍ちか

コロナ禍で学生がどのような生活を送り、不安を抱えているかなど、「研究その1」として生活面に着目して調査分析を行った。全体の約6割の学生が、「大学の学び」や「就職活動」に不安を感じていることが明らかとなった。

4. コロナウイルス感染症拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響：
その2～心身の健康状態に着目して～　（共同研究）

九州栄養福祉大学研究紀要第18号　p85 ～ p97　　2021年12月

（概要）安倍ちか・樋口綾子

コロナ禍における学生の生活が心身の健康にどう影響を与えているのかを「研究その2」として、心身の健康状態に着目して分析を行った。

【学会発表】

1．福岡食育推進事業が終わった後の食育の指標とした児童のＳＯＣ（首尾一貫感覚）の推移

〈主　　催〉第7回日本食育学会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2019年6月

（概要）沖田千代　梅木陽子　安倍ちか　太田雅規

平成28年度文部科学省の事業「スーパー食育スクール事業（SSS）」で、児童の「意識化」「行動化」「習慣化」を促した食生活改善プログラムに取り組むことにより、SOC（首尾一貫感覚）は、「意識化」で有意な上昇を見せ、「意識化」が上昇した児童は行動化の改善が見られ一定の成果が認められた。さらに、 SSS終了後から次年度の「つながる食育事業」の食育開始前のデータについてSOCを中心に解析した。

2．食の自立をめざす生徒の育成～みんなでつなげる「ちっご食育プログラム」

〈主　　催〉第45回　福岡県栄養改善学会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2019年10月

（概要）丸山優子　梅木陽子　沖田千代　安倍ちか

学校を中心とし、関係職員、家庭、関係機関と連携した「ちっご（筑後）食育プログラム」を実施し、望ましい食生活の意識を高め、食の自立をめざす生徒を育成する方策を検討した。

3. 学校給食における衛生管理手法の周知と食中毒発生の減少との関連性の検証
～各種マニュアルの活用を中心に～

〈主　　催〉第15回日本給食経営管理学科学術総会　（示説発表）
〈開 催 場 所〉愛知県
〈開催年月日〉2019年11月

（概要）守田真里子　安倍ちか　太田裕美子　髙田尚美　土谷政代　田中延子

学校給食における食中毒の件数は、平成9年度から激減しており、この背景には、文部科学省策定の「学校給食衛生管理の基準」や、科学的根拠に基づいた各種マニュアルにより衛生管理の向上を図ってきたことが影響していると考えられることから、本研究では各種マニュアルの活用や指導状況を検証するとともに、衛生管理における今後の課題について検討した。

4. 児童の食行動・食意識と心身の健康状態との関連性

〈主　　催〉第8回日本食育学会総会・学術大会
〈開 催 場 所〉誌上発表
〈開催年月日〉2020年5月

（概要）安倍ちか　浜谷小百合　梅木陽子　沖田千代　太田雅規

子供たちの心身の不調については、児童の食行動や食意識等が不定愁訴の背景にあることが考えられることから、本研究では、学校給食に対する意識（好き・苦手）や家庭における食に関する会話の頻度等について心身の不調との関連性を中心に解析し、検討した。概要）

	5. 学校給食における衛生管理手法の周知と食中毒発生の減少との関連性の検証～調理場運営（形態）方式等の相違から～ 〈主　　催〉第67回日本栄養改善学会学術総会 〈開 催 場 所〉誌上発表 〈開催年月日〉2020年9月 （概要）太田裕美子　安倍ちか　髙田尚美　土谷政代　守田真里子　田中延子 学校給食における食中毒防止の方策を探るため、調理場方式の相違から考えられる課題等について検討した。
	6. 教員の食育に関する研修体制等の現状と課題についての調査研究～教員の食育に関する研修の実施状況と食育推進との関連性について 〈主　　催〉第9回日本食育学会学術大会 〈開 催 場 所〉誌上発表 〈開催年月日〉2021年6月 （概要）安倍ちか　内田良子　西内恵子　飛松佳子 都道府県及び政令指定都市の教育委員会において、教員に対する食育の必要性や指導の在り方について学ぶ機会がどの程度設定されているのかを把握するとともに、学校における食育の推進に及ぼす影響等を検証した。
主な社会活動	・北九州市立年長者研修大学校周望学舎の研修会講師　(2019年 8月) ・平成31年度宗像市栄養教諭・食育担当者等研修会講師　(2019年 9月) ・「学校給食ハンドブック-管理運営編-作成アドバイザー　(2019年 9月) ・福岡県若年教員研修（栄養教諭）1年目 講師　(2020年 1月) ・福岡県重点課題「学校における食育の推進」専門委員　(2020年 7月) ・北九州市学校給食調理等業務委託業者選考委員　(2121年 1月)
	・福岡県若年教員研修（栄養教諭）1年目 講師　(2022年 6月)
	・久留米市学校給食費改定検討委員会委員　(2022年 7月)
	・那珂川市食生活改善推進会定例会の講師　(2023年 3月)
	・令和4年度福岡県若年教員研修（栄養教諭）1年目講師　(2023年 6月)
	・令和4年度 市場みらい塾料理教室」講師　(2023年8・9月)
	・嘉麻市立上山田小学校　食育研究発表会　講師　(2023年 9月)
	・令和5年度 鞍手高校 PTA厚生委員会研修会　講師　(2023年12月)
	・久留米市学校給食運営審議会 委員　(2024年 2月)
	・久留米市中央学校給食共同調理場維持管理運営包括 委託事業プロポーザル審査委員会　委員　(2024年 3月)
	・みやま市学校安全調査委員会委員　(2024年4月～12月)
	・福岡県若年教員研修（栄養教諭）1年目 講師　(2024年5月)
	・市場みらい塾子ども料理教室　講師　(2024年8月・9月)
	・大任小学校学校給食研究発表会講師　(2024年9月)
	・令和6年度食に関する指導研修会講師（南筑後教育事務所）　(2024年10月)
	・栄養教諭・学校栄養職員等研修会講師（北筑後教育事務所）　(2024年11月)
所 属 学 会	日本栄養士会　1987年4月～現在に至る 日本栄養改善学会　2017年4月～現在に至る 一般社団法人日本家政学会　2017年9月～現在に至る 日本食育学会　2019年5月～現在に至る
受　賞　歴	平成27年度 福岡県公立学校優秀教職員表彰 福岡県教育委員会　2016年1月 平成27年度 文部科学大臣 優秀教職員表彰　2016年1月

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

沖 勉（オキ ツトム） OKI Tsutomu 教授

所　　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・病態生理学 ・臨床栄養学Ⅰ ・疾病の成り立ちと病態 ・細菌性食中毒学 ・管理栄養士演習ⅠA、1B、Ⅱ 〔東筑紫短期大学 食物栄養学科〕 ・解剖生理学Ⅰ、解剖生理学Ⅱ
専 門 分 野	■ 臨床栄養学 ■ 公衆衛生学
最 終 学 歴	東京大学　農学部農芸化学科　1968年4月～1972年4月
	九州大学　医学部医学科　1975年4月～1981年3月
学　　位	学士（農学）、学士（医学）
職　　歴	日本専売公社　1972年4月～1975年3月 九州大学附属病院耳鼻咽喉科　1981年6月～1982年5月 北九州市立小倉病院耳鼻咽喉科　1982年6月～1984年12月 北九州市役所衛生局　1985年1月～1996年9月 北九州市保健所長　1996年10月～2012年3月 北九州市保健福祉局 保健医療行政担当理事　2012年4月～2015年3月 北九州市保健福祉局 参与　2015年4月～2019年3月 北九州市総務局人事部給与課 産業医　2015年4月～2020年3月 西南女学院大学保健福祉学部看護科非常勤講師「健康政策論」担当　2015年7月～2021年3月 九州栄養福祉大学リハビリテーション学部非常勤講師「地域保健学」担当　2015年7月～2020年3月 産業医科大学産業保健学部非常勤講師「保健医療福祉行政論Ⅰ」担当　2017年10月～～2025年3月 ○九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 教授　2020年4月～現在に至る ○東筑紫短期大学 食物栄養学科 兼任講師　2020年4月～現在に至る
教育上の業績	
主な研究活動	【著書】※研究協力等
	平成12年度北九州市地域保健推進事業 「今後の指定都市型保健所と地域保健のあり方に関する研究」報告書（2001.3） 事業者：中原 俊隆（京都大学医学部公衆衛生学教室教授）
	（概要） 厚生省の委託事業に研究協力者として北九州市保健所として参画。 京都大学の中原教授が主宰される検討会に数回参加し、北九州市保健所を1か所に集約した経緯やメリットなどの意見を述べた。報告書は中原教授がまとめられた。
主な社会活動	・令和3年度北九州市民カレッジ【大学連携リレー講座　コロナ禍での暮らし方】での講師　（2022年1月）
所 属 学 会	
受　賞　歴	

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

吉田（ヨシダ） 正史（マサフミ） YOSHIDA Masafumi 教授

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・食と哲学、倫理学 〔リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科〕 ・医療人のための哲学 〔東筑紫短期大学 保育学科〕 ・哲学
専門分野	■ 哲学
最終学歴	九州大学大学院　文学研究科　哲学専攻（博士後期課程単位取得退学）
学位	修士（文学）
職歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 ○「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」、○「心と脳の哲学Ⅰ・Ⅱ」担当 （平成13(2001)年4月～平成19(2007)年3月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 ○「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」、○「心と脳の哲学Ⅰ・Ⅱ」、 ○「食と哲学Ⅰ・Ⅱ」、○「哲学」担当　（平成19(2007)年4月～平成25(2013)年3月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 ○「食と哲学Ⅰ・Ⅱ」（平成29年度まで）、 ○「哲学」（平成26年度まで）、 ○「食と哲学」（平成28年度から）、 ○「倫理学」（平成30年度から） ○「医療人のための哲学」（令和2年度から）担当　（平成25(2013)年4月～現在に至る） 九州栄養福祉大学 学生部 学生指導課指導主事　（平成13(2001)年4月～平成21(2009)年3月） 学校法人東筑紫学園 学園史編纂室 編集主事　（平成21(2009)年4月～現在に至る）
教育上の業績	講義中、哲学者や思想家の考えを紹介する場合、肝心な箇所については出来るだけ原典を示し解説するよう心掛けた。
主な研究活動	【翻訳】 ジェイムズ『信じる意志』（訳、その6） （九州栄養福祉大学研究紀要第12号、平成27(2015)年12月） （概要） 実証的証拠を有さぬことを以て宗教的信仰を拒否する自然科学者たちに対し、人間には宗教的仮説を信じる態度をとる権利があることを主張し、かれらの不条理を論難した本書の翻訳「その6」。 ジェイムズ『信じる意志』（訳、その7） （九州栄養福祉大学研究紀要第18号、令和3(2021)年12月） （概要） 実証的証拠を有さぬことを以て宗教的信仰を拒否する自然科学者たちに対し、人間には宗教的仮説を信じる態度をとる権利があることを主張し、かれらの不条理を論難した本書の翻訳「その7」。
所属学会	九州大学哲学会員　（昭和59(1984)年9月～現在に至る） 日本哲学会員　（平成3(1991)年6月～現在に至る） 中世哲学会員　（平成4(1992)年11月～現在に至る） 西日本哲学会員　（平成4(1992)年11月～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

楠瀬（クスノセ） 千春（チハル）　KUSUNOSE Chiharu　教授

所　　属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・調理学 ・応用栄養学Ⅱ、応用栄養学Ⅲ ・食健康センター活動 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ
専 門 分 野	■　調理学 ■　応用栄養学
最 終 学 歴	神戸女子大学大学院 食物栄養学専攻 博士前期課程　　修了
学　　位	博士（食物栄養学）
職　　歴	神戸女子大学家政学部　助手　（平成 5(1993)年 4 月～平成 13(2001)年 3 月） 九州栄養福祉大学食物栄養学部　講師　（平成 13(2001)年 4 月～平成 19(2007)年 3 月） 九州栄養福祉大学食物栄養学部　准教授　（平成 19(2007)年 4 月～平成 25(2013)年 3 月） 九州栄養福祉大学食物栄養学部　教授　（平成 25(2013)年 4 月～現在に至る） 九州栄養福祉大学食物栄養学部　食物栄養学科長　（平成 30(2018)年 4 月～令和 4(2022)年 3 月）
教育上の業績	○緩和ケア病棟における食事に関する研究を、病院と協力して行った。 ○小麦粉のベーカリー食品の特徴について農研機構 九州沖縄農業研究センターと協定研究を行った。 ○学生による美化委員会の組織を立ち上げ、運営の指導を行った。 ○管理栄養士演習科目担当者として、学生の資格修得のための対策を援助している。
主な研究活動	【 論 文 】 「Effect of Capsicum Powder on Breadmaking Properties」 Cereal.chem 2009 86 (6) 633-636　（共著） （概要） Blending dried fruit of Capsicum species such as paprika, tomapi, pimento, and cayenne to wheat flour enhances breadmaking properties of bread height and specific volume. However, due to protease, immature green fruit did not cause this improvement of breadmaking properties. Heat-stable and LMW materials in red paprika promote the breadmaking properties. 「Effects of Size of Celllose Granules on Dough Rheology, Microscopy, and Breadmaking Properties」 Journal of Food Science　2007　72(2)　79-84　（共著） （概要） Breadmaking was performed with cellulose-blended wheat flour. Cellulose granules (7 types) of various sizes (diameter) were prepared by kneading. With increase of the blend percent of the cellulose samples from 10% to 20%, breadmaking properties such as bread height and specific volume (SV) gradually decreased in every sample; however, the decreasing levels of the properties in 7 types of various sizes varied. The decrease of bread height and SV was associated with the size of the cellulose granule. 包丁操作の運動解析：初学者と習熟者の特徴（特集 手持ち操作の習熟） （バイオメカニズム学会誌 44(4), 229-235, 2020） （概要） 包丁の柄の前後に 6 軸モーションセンサー（加速度・角速度）を取り付けた装置を作成し、キュウリの小口スライス中の動作を記録し、熟練者と初心者の動きを比較した。習熟者では、接触による抵抗を受けてもぶれが少なく、状態回復を行っている、また習熟者では初学者に比較してピッチ軸の回転運動が大きく、包丁を前方に送り出すことが明らかとなった。（JSPS 科研費 JP17K19942）

「包丁操作時の学習者と熟練者の包丁運動データの比較」
（食生活研究 2019 39(6), 338-357）（共著）

（概要）
包丁の柄の前後に6軸モーションセンサー（加速度・角速度）を取り付けた装置を作成し、キュウリの小口スライス中の動作を記録し、熟練者と初心者の動きを比較した。その結果一定の傾向が認められ、本装置を用いて得られるロール・ヨーの傾向及び、FFTの雑音成分から、熟練度を測ることができる可能性が示された。（JSPS科研費 JP17K19942）

「大学における調理実習教育の現状と担当教員の把握する学生の実態」
（日本調理科学会誌　2012　45　255 - 264）（共著）

（概要）
大学における調理実習教育に関する現状と担当教員の把握する学生の実態について、九州に所在する大学において調理実習科目を担当している教員を対象として、アンケート調査を実施した。調理実習科目の開講状況は、栄養士養成系および家政・教員養成系において、平均開講総単位数は2.8単位、平均必修単位数は2.2単位および0.6単位であった。
調理実習の時間割上の時間は、栄養士養成系では約2コマ180分を設定している大学が70.0%、家政・教員養成系では1.5コマと2コマが共に40.0%であった。
調理に関する学生の知識および技術に関しては、両系統ともに低下しているという回答が多かった。調理実習を時間内に終わらせるために、種々の工夫が行われ、具体的な内容としては特に「料理の組み合わせ工夫する」が両系統とも半数を超えていた。学生のスキルは今後もますます低下する傾向にあり、具体的な対策が必要とされる。

「米粉とデンプンの調理性」
（日本調理科学会誌　2009　42　(5)　361-365）

（概要）
現在の学生の米粉に対する意識調査と、学生実験への米粉導入方法を検討した。学生実験で実施しているスポンジケーキの材料として米粉を導入するための試みの1例を報告した。従来の米粉と異なり、パンやケーキに用いることが可能となった新しい米粉の調理性を理解することを目的としている。（クッキングルーム）

「新しい米粉とデンプンの調理性」
（New Food　Industry　2009　51 (12)　65-77）

（概要）
新しい製法の米粉と従来の方法で製造された米粉について、ベーカリー食品に関するこれまでの研究をまとめた。我々がこれまで行ってきたでんぷんを用いたベーカリー食品の調理性とも関連付けて考察した。

「スポンジ組織のレオロジー特性ー澱粉粒と気泡の相互作用（総説）」
（日本バイオレオロジー学会誌 2006 20 (2) 20-31）

（概要）
スポンジケーキに特徴的な食感をもたらすスポンジ組織のレオロジー的特性と、その組織の気孔構造が形成されるメカニズムの解明のために行ってきた研究の総説。

「レオメータを用いた国産小麦のスポンジケーキのくち溶け食感の比較」
（九州栄養福祉大学紀要 (14), 31-37, 2017）（共著）

（概要）
国産小麦のスポンジケーキについて、新しく開発されたソフトによって解析し、輸入小麦と異なる国産小麦粉特有の性質を明らかとした。

「緩和ケア病棟の患者に適した食事の開発：ちらし寿司」
（九州栄養福祉大学研究紀要 (13), 37-48, 2016）

（概要）
食事量の減少が、患者様のQOLの低下に直結する緩和ケア病棟の食事について、調理科学的アプローチを行っている。本研究では、柔らかく飲み込みやすいソフト食の調製を、高齢者に好まれるメニューであると同時に行事食にも多用される「ちらし寿司」について検討した。

「管理栄養士課程におけるリメディアル教育への取り組み」
（九州栄養福祉大学紀要 (10), 257-270, 2013）（共著）

（概要）
新入生を対象に管理栄養士に必要とされる計算問題について、補講を実施し、その効果を検討した。

	「食材を用いる生物教育―小学校６年生を対象としたスルメイカの体の構造学習と調理の合同実習―」 （九州栄養福祉大学紀要 (5), 29-39, 2008）（共著）
	（概要） 小学校で「からだのつくりとはたらき」を学習した後の児童を対象とし、スルメイカを用いた「からだの構造学習」と「調理」の合同実習を考案した。解剖実習は理科の教諭が行い、調理は家庭科の教諭或いは栄養教諭が受け持つ想定とした。
	「女子学生の味覚感受性と料理の味付けにおける嗜好濃度との関連性 （九州栄養福祉大学紀要 (5), 29-39, 2008）（共著）
	（概要） 本研究では本学女子学生を対象に味覚閾値検査を実施し、その調査結果から高、中および低味覚感受性に相当する被験者を抽出した。各群の被験者が好みの味付けをした調理品について、塩分および糖分濃度を測定したこれらの結果から、女子学生の味覚感受性と基本料理の味付け嗜好濃度との関連性について検討した。
作成した教科書	「食べ物と健康　調理学」　（共同執筆）　（医歯薬出版）
	「調理を学ぶ」　（共同執筆）　（八千代出版）
	「調理科学実験［第二版］」　（共同執筆）　（医歯薬出版）
	「食品加工学実験書」　（共同執筆）　（化学同人）
	「新版 総合調理科学辞典」　（共同執筆）　（光成館）
	「カラーアトラス スルメイカの解剖」（共同執筆）
	「食品学入門」　（共同執筆）　（建帛社）
	「調理科学［第３版］」　（共同執筆）　（建帛社）
出　版　物	伝え継ぐ日本の家庭料理　野菜のおかず　春から夏　（農山漁村文化協会） 日本調理科学会 企画・編集（共同執筆）
主な社会活動	・一般企業の男性料理教室講師　（平成 27(2015)年～現在に至る）
	TOTO 株式会社人材開発部ダイバーシティ―推進部と連携し、「女性の活躍推進」のための男性の家事参加促進を狙いとして、料理の基本（準備から片付けまで）を学ぶ料理教室を開催している。
	・シニアを対象とした運動および食育教室の講師
	財団法人健康・体力づくり事業財団、体力つくり道府県民会議主催、後援：福岡県、北九州市、（財）北九州市体育協会　（平成 21～22 年） 平成 23(2011)年よりスポーツクラブが引き継ぎ開催（平成 23(2011)年～現在に至る） 北九州市民を対象としたスポーツと食育を組み合わせた教室の食育担当講師として、調理実習および講義を実施。
	・北九州市葛原小学校　家庭教育学級　講師　平成 24(2012)年 10 月）
	「胆瞬」をテーマとした食育教会と調理実習を担当。葛原小学校 PTA 主催
	・平成 21 年度　八幡東アカデミー事業　「イカの不思議発見塾」 調理実習担当 八幡アカデミー主催
	八幡東生涯学習センターにて開催。「イカの不思議発見塾」では、30～70 歳代の男女 16 名の市民を対象に、イカの構造を学んだのち、そのイカを調理して食べ、イカを通して生物の構造を理解するための講座を実施。
	・親子で楽しく健康･体力づくり教室 (親子クッキング教室　講師)　（平成 20(2008)年）
	北九州市こどもの健康・体力づくり推進事業を受託したスポーツクラブと協力。親子食育教室「たべものはかせになろう」を３回実施。
	・財団法人山口県ひとづくり財団社会福祉研修部主催 児童・障害者（児）福祉施設等調理担当職員研修会　講師
	講義および調理実習（平成 20(2008)年）、講義を担当（平成 23(2011)年）。
	・北九州市シニアカレッジ（講義及び調理実習）　（平成 26(2014)年～27(2015)年、30(2018)年）
	主催：北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 本学学生と参加者の交流を主体とし、高齢者に有益な栄養学の講義と調理実習を実施。

	・東筑紫学園　子育て支援事業「子育ち・親育ちの会」（講師及び調理実習）（平成 30(2018)年） 主催：九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園
	親子食育教室を実施。こども自らが料理をしてワンプレートのランチを 1 食つくるよう支援。調理前にはには、保護者様へのお話を実施。子供たちには、食育クイズを実施して、楽しく栄養の勉強が理解できる場を設けた。
所　属　学　会	日本調理科学会　（平成 4(1992)年 4 月～現在に至る） 日本栄養改善学会　（平成 10(1998)年 1 月～現在に至る） 日本穀物科学研究会　（平成 3(1991)年 3 月～現在に至る） (公社) 福岡県栄養士会　理事（研究教育）　（平成 30(2018)年 6 月～令和 2(2020)年 5 月） 日本穀物科学研究会　理事　（平成 30(2018)年 2 月～2025 年 3 月） 日本栄養改善学会　評議員　（令和 2(2020)年 11 月～現在に至る）
受　賞　歴	日本調理科学会　奨励賞　（平成 15(2003)年 9 月 4 日） (公社) 福岡県栄養士会会長表彰　（平成 30(2018)年 10 月 7 日） 食生活研究会　最優秀論文賞　（令和 2(2020)年 7 月 14 日） 福岡県知事表彰（栄養士養成功労）　（令和 4(2022)年 10 月 23 日）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

大村（オオムラ） 美智子（ミチコ） OOMURA Michiko 教授

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・公衆栄養学Ⅰ、公衆栄養学Ⅱ ・公衆栄養学実習（学内） ・臨地実習Ⅱ（保健所・保健センター） ・臨地実習指導（演習）、食環境地域連携演習 ・キャリアデザイン ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ、専門ゼミナール
専門分野	■ 公衆栄養学
最終学歴	山口県立大学 家政学部 食物栄養学科管理栄養士専攻
学位	学士（家政学）
職歴	北九州市役所 民生福祉部総務課（昭和57年5月～昭和61年3月） 小倉北保健所 保健予防課（昭和61年4月～平成2年3月） 若松保健所 保健予防課（平成2年4月～平成5年3月） 北九州市立八幡病院 栄養管理科（平成5年4月～平成7年3月） 北九州市立若松病院 栄養管理科（平成7年4月～平成10年3月） 北九州市教育委員会 学務部 学校保健課（平成10年4月～平成12年3月） 八幡西区役所 生活支援課（平成12年4月～平成16年3月） 戸畑区役所 生活支援課（平成16年4月～平成18年3月） 北九州市子ども家庭局 子ども家庭部保育課栄養指導担当係長（平成18年4月～平成21年3月） 北九州市子ども家庭局 子ども家庭部子育て支援課栄養指導担当係長（保育課兼務栄養指導担当係長）（平成21年4月～平成22年3月） 北九州市保健福祉局 地域支援部健康推進課栄養改善担当係長（平成22年4月～平成27年3月） 北九州市子ども家庭局 子ども家庭部栄養指導担当課長 子育て支援課母子栄養指導担当課長兼務（平成27年4月～平成28年3月） 北九州市保健福祉局 健康医療部食育・栄養改善担当課長（平成28年4月～平成30年3月） 北九州市子ども家庭局 母子栄養指導担当課長兼務（子ども食堂担当）（平成28年10月～平成30年3月） 北九州市保健福祉局 認知症支援・介護予防センター地域活動推進担当課長兼務（平成29年4月～平成30年3月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 特任教授（平成30年4月～平成31年3月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授（平成31年4月～現在に至る）
教育上の業績	福岡県栄養士会研究教育事業部企画運営委員（令和4年～令和6年）
主な研究活動	【学術論文】 1. 特集「高齢期の栄養問題と介護予防～理論から実践へ」 （臨床栄養　平成18年10月　P630~634）

	【研究発表】
	1. 「区と医師会との連携による栄養相談の実施について」 〈主催〉福岡県公衆衛生学会 〈開催年月〉平成 17 年 4 月
	(概要) 区と医師会との話し合いの場を設け、医療機関から区役所への紹介による栄養相談を受け、栄養指導結果を医療機関に戻す方策を構築した経緯についての発表
	【学会発表】
	1. 「乳児の哺乳量、離乳食摂取状況と身体発育状況の関連性について」 〈主催〉日本栄養改善学会 〈開催年月〉昭和 61 年
	2. 「区と医師会との連携による栄養相談の実施について」 〈主催〉福岡県公衆衛生学会 〈開催年月〉平成 17 年 4 月
	3. 「北九州市高齢者食生活改善事業『おいしく食べて元気もりもり教室』参加者の食品摂取状況調査から推察される栄養指導の効果判定」 〈主催〉福岡県栄養改善学会 〈開催年月〉平成 27 年 9 月
	4. 「『食生活改善推進訪問事業』による食生活改善効果について」 〈主催〉福岡県栄養改善学会 〈開催年月〉平成 28 年 9 月
	【事例報告】於「全国食事サービス活動セミナー」
	1. 「介護予防に関する食事サービス～低栄養予防教室の実践～」について 〈主催〉全国老人給食協力会 〈開催年月〉平成 18 年 7 月
	【事例報告】於「北九州市食生活改善大会」
	2. 「低栄養予防教室の実践」について 〈開催年月〉平成 18 年 10 月
主な社会活動	・「東日本大震災被災地での栄養・食生活支援について」 (被災地での栄養士活動について 50 回ほど講演活動を行う) (平成 23 年 4 月～現在に至る)
	【講演】 「明るい生活はバランスのとれた食事から」〈若松区地域ケア研究会〉 (平成 24 年 11 月)
	【特別講演】 「食を通した健康づくり」〈第 165 回福岡県鍼灸治療学会〉 (平成 26 年 9 月)
	【基調講演、グループワーク、事例発表、講評】 「調理員は今後保育とどう関わるか」〈全国夜間保育園経験交流研究会〉 (平成 29 年 2 月)
	【パネリスト】 「食品安全シンポジウム～食物アレルギー」 〈平成 29 年度 北九州市食品安全シンポジウム〉 (平成 29 年 11 月)
	【講演】 「食生活改善推進員に期待すること」〈八幡東区、若松区、八幡西区食生活改善推進員協議会〉 (平成 30 年 4 月、31 年 4 月の 3 回)
	【講演】 「食育計画の作成と活用、食物アレルギーについて」 〈社会福祉研修所 保育士等キャリアアップ研修 食育・アレルギー研修〉 (平成 30 年、令和元(年、令和 2 年、3 年、4 年、5 年、6 年)
	【講演】 「乳幼児期の食事について」〈光沢寺保育園など 家庭教育学級〉 (平成 30 年 6 月、平成 31 年 2 月)

	【講演】 「食中毒予防について」〈年長者の里 施設職員対象研修〉 (平成 30(2018)年６月)
	【講演】 「保育園児に対する食物アレルギー対策」(あだちのもり保育園など職員) (平成 30(2018)年７月)
	【講演】 「乳幼児期の食事について」〈若松区子育てサポーター養成講座〉 (平成 30(2018)年９月)
	【講演】 「大切な人を災害から守るために!!・・『災害への備え』(八幡東区 〉 (平成 30(2018)年９月)
	【講演】 「子どもの食育」(ほっと子育てキャリアアップ研修) (令和２年７月)
	【講演】 「健康寿命の延伸を目指して」 (生涯学習指導者育成ネットワーク研修) (令和２年 10 月)
	【講演・調理実習】 「やさしい在宅介護食」(北九州市食生活改善推進員協議会) (令和３年７月)
	【講演】 令和３年度男女共同参画地域フォーラム「災害と食」(八幡東区女性団体連絡会議) (令和３年 11 月)
	【講演】 「食生活改善推進員に期待すること」〈戸畑区食生活改善推進員協議会〉 (令和４年４月)
	【講演】 「社会福祉施設栄養士研修　栄養マネジメントについて」(北九州市社会福研修所) (令和４年 10 月)
	【講演】 「保育所調理員研修」(北九州市社会福研修所) (令和５年１月)
	【講演】 「食は健康の源～食を通じた健康づくりを担うヘルスメイトの 50 年の歩みと今後の役割～」 〈八幡東区食生活改善推進員協議会〉 (令和５年４月)
	【講演】 「健康の源はおいしく楽しい食事から～ヘルスメイトの果たす役割～」 〈若松区食生活改善推進員協議会〉 (令和５年４月)
	【講演】 「低栄養と認知症との繋がり」 (北九州市年長者研修大学校穴生学舎研修会) (令和５年６月)
	【講演・調理実習】 「親子の食育教室」(北九州市食生活改善推進員協議会) (令和５年７月)
	【講演】 「生き生きとした高齢期を送るための食生活」 (北九州市年長者研修大学校周防学舎シニアカレッジ) (令和５年 10 月)
	【講演】 「美味しく食べて元気もりもり！冷凍食品の活用法」 (視聴覚障害者生活教室) (令和５年 12 月)
	【講演・調理実習】 「郷土・伝統料理教室」(北九州市食生活改善推進員協議会) (令和６年７月)
	【講演】 「安全・安心な食品の選び方、食べ方」(北九州市婦人教育研究会) (令和６年８月)
	【講演】 「健康寿命の延伸に向けてヘルスメイトに期待すること」 〈小倉南区区食生活改善推進員協議会〉 (令和７年４月)
	・西部ガスキッチン情報誌　製鉄八幡記念病院　土橋院長との対談「減塩について」 (平成 27(2015)年４月)
	・糖尿病療養指導士として地域の糖尿病フェスタ等で栄養指導を実施 (平成 10(1998)年～平成 26(2014)年)

	・西部ガス親子クッキング審査員	（平成 30(2018)年、令和元(2019)年 10 月）
	・北九州市口腔保健推進会議 構成員	（令和 2 年）
	・「食でつながるフェスタ in 福岡 」実行委員長	（令和元年 12 月）
	・子ども食堂ネットワーク北九州代表	（令和 2 年～現在に至る）
	・北九州市立保育所給食調理業務受託候補者選定検討会座長	（令和元年～現在に至る）
	・「北九州技の達人」検討会構成員	(令和 3 年～現在に至る)
	・北九州市児童福祉施設等第三者評価委員	(令和 4 年～現在に至る)
	・北九州市食品衛生懇話会会員	（令和 4 年～現在に至る）
	・子ども食堂開設促進事業業務委託審査委員	（令和 4 年）
	・北九州市公営競技局子ども食堂運営等業務委託審査委員	（ 令和 4 年～現在に至る ）
	・北九州市からの委託事業「若い世代の食育推進事業」請負	（令和 3 年～現在に至る ）
	・北九州市社会福祉協議会総合企画委員会委員	（令和 5 年～現在に至る）
所 属 学 会	日本栄養士会 栄養改善学会	(昭和 58(1983)年～現在に至る) （令和 2(2020)年～現在に至る）
受 賞 歴	福岡県食生活改善協会感謝状 福岡県栄養士会長表彰 日本栄養士会長表彰 福岡県知事感謝状 公衆衛生事業功労者福岡公衆衛生推進機構理事長表彰	（平成元(1989)年 2 月） （平成 11(1999)年 9 月） （平成 14(2002)年 6 月） （平成 26(2014)年 9 月） （令和 2(2020)年 12 月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

倉﨑（クラサキ） 信子（ノブコ） KURASAKI Nobuko 教授

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	**〔食物栄養学部 食物栄養学科〕** ・健康スポーツ科学Ⅰ、健康スポーツ科学Ⅱ ・運動生理学 ・運動処方論 ・専門ゼミナール ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ ・卒業論文 ・食健康センター活動（演習） **〔東筑紫短期大学 食物栄養学科〕** ・運動生理学
専門分野	■ 健康科学 ■ 健康心理学
最終学歴	日本体育大学大学院　体育学研究科　健康科学専攻
学位	博士（医学） 修士（体育学、文学）
職歴	久留米大学医学部薬理学教室　助手　（1994年4月～2007年3月） 九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科 講師　（2007年4月～2016年3月） 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 就職指導課指導主事　（2014年4月～現在に至る） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授　（2016年4月～2021年3月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授　（2021年4月～現在に至る）
教育上の業績	○文部科学省新体力テストを継続的に実施し、健康や体力に関する情報の管理活用能力および専門職への意識を高める健康教育を行っている。 ○株式会社UHA味覚糖や株式会社ユーザーライフサイエンスと連携のもと食品の機能性（健康に対する有用性）について検証し卒業論文指導にあたっている。 ○就職指導主事として学部との連携を図り、きめ細かな就職支援を行い専門性の高い就職実績を得ている。
主な研究活動	【著書】 「泣くとストレスが緩和するか　なぜ泣くの；涙と泣きの大研究」（朝日新聞社発行62-77）共著 （概要） 日本と韓国の大学生を対象に実施した『涙と泣き』に関する現象の調査結果について述べるとともに、ストレスを緩和する要因としての泣く事の意義について考察した。また心因性の涙を促す場面を実験的に設定し、カオスアトラクターを用いて自律神経系の変化を調べた。 「不安研究における動物モデルの役割」（心理学評論36(1):50-63.1993）共著 （概要） 防御性覆い隠し反応モデルを利用して、役割ストレスによる不安の形成と発現の生物学的基礎過程を解明する行動神経科学的研究を介し、不安の動物モデルの目的と役割などについて考察した。さらに不安の発現と関連する脳内 NA 神経系の神経科学的変化について明らかにし行動学的変化の対応について検証した。 「ストレスーコーピングの心理・生物的相関」（脳と精神の医学　5(2):149-157）共著 （概要） ストレスのトランスアクショナルな理論によるストレスーコーピング過程のメカニズムを解明するために、動物の問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングと相関する心理・生物的ストレス反応を分析し明らかにした。

	「ストレスの神経科学的および神経薬理学的研究」（ストレス科学 10（1）70－75 1995）共著
	（概要） ストレスが中枢神経系にどのような影響を及ぼすかを神経科学的にとらえていくための方法論 について述べた。
【学術論文】	
	1.「月経周期に伴うメンタル・ストレス反応の変化」（久留米医学会雑誌 69：14-23　2006）
	（概要） 各月経周期にメンタルテストを負荷し、唾液中 MHPG、コルチゾール、HVA 濃度を測定するとともに精神的健康度や POMS との関連について検証した。
	2.「新体力テストからみた本学学生の体力と生活習慣について」 （九州栄養福祉大学研究紀要 第 4 号 平成 19 年 12 月）
	（概要） 本学学生における新体力テストの横断的資料を用いて身体的特徴および体力レベルを把握するとともに、運動習慣との関連について検証した。
	3.「一般アスリートのコンディションにおける分岐鎖アミノ酸」 （九州栄養福祉大学研究紀要 第 6 号 平成 21 年 12 月）
	（概要） 大学一般運動部学生のコンディションにおける BCAA 摂取の影響を検討するために、唾液中コルチゾール濃度、ｓ-IgA 濃度の変化および主観的な気分の変化について明らかにした。
	4.「女子大学生における健康行動と健康リスク意識」 （九州栄養福祉大学研究紀要 第 7 号 平成 22 年 12 月）
	（概要） 青年期における望ましい健康行動の確立を検証するために、本学学生の健康行動と健康リスク意識について調査した。
	5.「大学生におけるヤマブシタケの睡眠改善効果」 （九州栄養福祉大学研究紀要 第 10 号 平成 25 年 12 月）
	（概要） 睡眠問題を経験している大学生を対象に抗ストレス作用のあるヤマブシタケ摂取が睡眠に及ぼす影響について NA 代謝産物である MHPG 含量および質問紙を用いて検証した。

	6.「カテキン・還元型コエンザイムQ10含有飲料摂取が運動時代謝に及ぼす影響」 （九州栄養福祉大学研究紀要 第11号 平成26年12月）
	（概要） 生活習慣病予防としての健康教育の一助となる機能性食品の活用が運動時のエネルギー代謝に及ぼす影響について検証した。
	7. The effects of Hericium erinaceus (Amyroban3399)on sleep quality and subjective well-being among female undergraduate students:A pilot study （Personalized Medicine Universe 4(7) 76-78.2015）共著
	（概要） This pilot study assessed the effects of 4weeks of administration of Amyloban 3399 on subjective well-being and sleep quality in female undergraduate students.
	8.「コロナ禍における「岡大プログラム」の有効性」 （大学体育スポーツ学研究18. 049-055 令和3年4月）共著
	（概要） コロナ禍における大学生の身体活動量を検証するため、「岡大プログラム」を活用し「岡大プログラム」の有効性について検証した.
	9.「SOYLAX®（大豆タンパク質酵素分解物）配合タンパク質食摂取がアスリートのストレス反応と主観的健康観に与える影響ーランダム化プラセボ対照二重盲検並行群間比較試験」 （薬理と治療49（7）2021 1157-1164 共著
	（概要） SDPを配合したタンパク質食の経口摂取がアスリートのストレスと主観的健康度に与える効果を検証した。
主な社会活動	・北九州市スポーツ推進審議会委員 （2017年～現在に至る） ・北九州市スポーツ協会理事 （2018年～現在に至る） ・北九州市社会教育委員 （2023年11月～現在に至る） ・東筑紫学園のキャンパスで学ぶ周望学舎シニアカレッジ （平成19年、20年、27年） 北九州市内在住の60歳以上の方 約60名の受講者を対象として「健康いきいきー食事と運動ーパート2」、「楽しい筋力トレーニングのすすめ」をテーマに健康維持、増進を目的としたレジスタンス運動や柔軟体操を実施し、安全でより高い効果が得られるよう指導を行った。 ・福岡県立戸畑高等学校家庭クラブ研修会 （2008年、2009年9月） 福岡県立戸畑高等学校1、2学年生徒（514名）を対象に「スポーツと栄養」についての研修会において講師を務めた。 ・北九州市立大学野球部栄養サポート （2007年～2008年） ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行った。また20年にはコンディショニングにおけるBCAA摂取の影響を調査し検証した。 ・福岡県立戸畑高等学校野球部栄養サポート （2009年5月～12月） ゼミ活動の一環として生徒の栄養サポートおよび保護者会における栄養教育を行った。 ・折尾愛真高等学校女子新体操部栄養サポート （2010年5月～2月） ゼミ活動の一環として新体操部員の栄養サポートを行い、またウエイトコントロール期におけるコラーゲンペプチド飲料摂取のストレス緩和効果を調査し検証した。 ・豊国学園高等学校サッカー部栄養サポート （2012年5月～2015年1月） ゼミ活動の一環としてサッカー部員の栄養サポートならび保護者における栄養教育を行った。 ・福岡県立小倉西高等学校野球部栄養サポート （2015年5月～現在に至る） ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行い、栄養教育の重要性を確認し、またスポーツ貧血における鉄グミサプリメントの有用性を検証した。 ・北九州市立大学野球部栄養サポート （2019年5月～2年3月） 大豆由来ペプチドを用いて心身へのコンディションニングの影響を検証し、栄養教育を行った。
所 属 学 会	日本体力医学会 （2000年～現在に至る） 日本健康心理学会 （2003年～現在に至る）
	日本心臓リハビリテーション学会 （2007年～現在に至る） 日本スポーツ栄養学会 （2008年～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

戸田（トダ） 晶久（アキヒサ）　TODA Akihisa　教授

所　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科	
	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・化学、有機化学、栄養薬理学Ⅰ、栄養薬理学Ⅱ 〔こども教育学部 こども教育学科〕 ・化学 〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕	
	・健康科学特別講義・健康科学研究法特論講義	
	・薬理学特論Ⅰ、薬理学特論Ⅱ 〔東筑紫短期大学 食物栄養学科〕 ・薬理学	
専門分野	■薬理学 ■衛生薬学 ■生化学 ■薬物代謝学	
最終学歴	福岡大学・大学院博士課程前期	
学　位	博士（薬学）／薬学修士／薬学士	薬学部薬学科／生化学専攻　修了
職　歴	久光製薬（株）研究所研究員（薬理・生化学研究室）	（１９８０年４月～１９８４年３月）
	福岡大学薬学部助手（生化学教室）	（１９８４年４月～１９９５年１月）
	国立療養所南福岡病院付属看護学校兼任講師（生化学（薬理学、栄養学、免疫学を含む））	（１９９２年４月～１９９５年３月）
	福岡大学薬学部講師（生化学教室）	（１９９５年２月～１９９５年３月）
	第一薬科大学専任講師（公衆衛生学、病態生理学、特別演習）	（１９９５年４月～２００２年９月）
	博士研究員（米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California at　Los Angeles：UCLA) 医学部 分子薬理学教室）	（１９９８年１月～１９９９年１月）
	独立行政法人国立病院機構九州医療センター附属福岡看護助産学校兼任講師（生化学（薬理学、栄養学、免疫学を含む））	（１９９９年４月～２００１年３月）
	第一薬科大学専任助教授（公衆衛生学、特別演習）	（２００２年１０月～２００８年３月）
	第一福祉専門学校兼任講師（公衆衛生学（3 年生））	（２００４年４月～２００７年３月）
	第一薬科大学准教授（食品衛生学Ａ（3 年生）、食品衛生学Ｂ（3 年生）、公衆衛生学Ｓ（3 年生）、特別演習（4 年生、6 年生））、入試問題作成委員（化学、生物）	（２００８年４月～２０１０年３月）
	第一薬科大学教授（食品衛生学Ⅰ（3 年生）、食品衛生学Ⅱ（3 年生）、薬学への招待（1 年生）、特別演習（4 年生、6 年生））、衛生化学分野主任教授	（２０１０年４月～２０２１年３月）
	第一薬科大学教務副部長	（２０１０年４月～２０１１年３月）
	福岡こども短期大学兼任講師（公衆衛生学（2 年生）	（２０１１年４月～２０１８年３月）
	第一薬科大学教務部長代理	（２０１１年４月～２０１２年１０月）
	第一薬科大学学部長	（２０１８年３月～２０２０年３月）
	第一薬科大学厚生部長	（２０２０年４月～２０２１年３月）
	第一薬科大学大学院教授	（２０２０年８月～２０２１年３月）
	九州大学大学院薬学研究院非常勤講師（衛生化学Ⅱ）	（２０２２年１０月～現在に至る）
	九州栄養福祉大学食物栄養学部　食物栄養学科教授（栄養薬理学Ⅰ、栄養薬理学Ⅱ、有機化学、化学） 大学院健康科学科教授（薬理学特論）	（２０２３年３月～現在に至る）

教育上の業績	○教育方法の実践例：講義・実習　教育内容の工夫等 基本的には板書を主体として講義を進めており、適宜配布資料とパワーポイント(パワーポイントの内容はPDFファイルで事前に配布)を用いて学生の理解を深める工夫をした。また、教育の補完・補充のため、「衛生化学および公衆衛生学実習書」、「衛生薬学実習書」（第一薬科大学　衛生化学分野 編)(2年～3年毎に改訂)、衛生薬学資料集Ⅰ」、「衛生薬学資料集Ⅱ」（第一薬科大学　衛生化学分野　編)、「食品衛生学実験書」（九州栄養福祉大学　薬理学研究室　編）等を作成した。
	○学部学生の指導および卒業研究の指導、大学院生の研究指導等 福岡大学薬学部および大学院にて学士、修士、博士を、また第一薬科大学おいても多くの学士を輩出した。さらに九州大学大学院薬学府臨床薬学専攻博士課程の大学院生を指導した。
	【作成した教科書・著書】
	1. 「新衛生薬学系実習」（共著） 編者　手塚雅勝、山本郁夫　地人書館：担当部分（全般的/全149頁）（２００６年）
	2. 「最新公衆衛生学（第4版）」（共著） 編者　中室克彦、小嶋仲夫、棚田成紀　廣川書店：担当部分（21頁／478頁）（２００７年）
	3.「INTEGRATED ESSENTIALS 衛生化学・公衆衛生学（改訂第4版）」（共著） 編者　早津彦哉、菊川清見、大沢基保　南江堂：担当部分（22頁／450頁）（２００７年）
	4. 「予防薬学としての衛生薬学-健康と環境-」（共著） 編者　吉原新一、繪柳玲子　廣川書店：担当部分（56頁／437頁）（２００９年）
	5. 「最新公衆衛生学（第5版）」（共著） 編者　中室克彦、小嶋仲夫　廣川書店：担当部分（28頁／478頁）（２０１０年）
	6. 「新　衛生化学・公衆衛生学」（共著） 編者　大沢基保、福井哲也、永沼章　南江堂：担当部分（20頁／425頁）（２０１１年）
	7. 「コンパス衛生化学-健康と環境-」（共著） 編者　鍛冶利幸、佐藤雅彦　南江堂：担当部分（13頁／438頁）（２０１１年）
	8. 「予防薬学としての衛生薬学-健康と環境-　第2版」（共著） 編者　吉原新一、山野茂、戸田晶久　廣川書店：担当部分（56頁／437頁）（２０１２年）
	9. 「薬学のための医療統計学」（共著） 編者　竹内正弘、細川友和、山村重雄　廣川書店：担当部分（28頁／234頁）（２０１４年）
	10. 「最新公衆衛生学（第6版）」（共著） 編者　上野仁、小嶋仲夫、中室克彦　廣川書店：担当部分（48頁／375頁）（２０１５年）
	11. 「スタンダード薬学シリーズⅡ5；衛生薬学　健康と環境」（共著） 編者　太田茂、原俊太郎、姫野誠一郎　東京化学同人：担当部分（13頁／456頁）（２０１６年）
	12. 「衛生薬学　基礎・予防・臨床」（共著） 編者　今井浩孝、小椋康光　南江堂：担当部分（２５頁／６２４頁）（２０１６年）
	13. 「コンパス衛生薬学　-健康と環境-（改訂第2版）」（共著） 編者　鍛冶利幸、佐藤雅彦　南江堂：担当部分（16頁／565頁）（２０１６年）
	14. 「予防薬学としての衛生薬学　-健康と環境-　第3版」（共著） 編者　山野茂、戸田晶久　廣川書店：担当部分（51頁／494頁）（２０１６年）
	15. 「衛生薬学　基礎・予防・臨床　改訂第2版」（共著） 編者　今井浩孝、小椋康光　南江堂：担当部分（29頁／674頁）（２０１８年）
	16. 「衛生薬学　基礎・予防・臨床　改訂第3版」（共著） 編者　今井浩孝、小椋康光　南江堂：担当部分（29頁／約674頁）（２０２０年）
	17. 「コンパス衛生薬学　-健康と環境-（改訂第3版）」（共著） 編　　鍛冶利幸、佐藤雅彦　南江堂：担当部分（16頁）（２０２０年）
	18. 「ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ薬学ｼﾘｰｽﾞⅡ　第9巻　薬学演習Ⅲ. 薬学総論・衛生薬学」（共著） 編者　太田茂、原俊太郎、姫野誠一郎　東京化学同人：（分担執筆：SBO22～SBO29、21問）他（２０２０年）
	19. 「予防薬学としての衛生薬学　-健康と環境-　第4版」（共著） 編者　山野茂、戸田晶久　廣川書店：担当部分（51頁／494頁）（２０２２年）
	20. 「衛生薬学　基礎・予防・臨床　改訂第4版」（共著） 編者　今井浩孝、小椋康光　南江堂：担当部分（29頁／約674頁）（２０２３年）

	21 「南山堂薬学大辞典」（共著） 南山堂：分担執筆（37 項目）（２０２５年以降に印刷予定）
	22. 「衛生薬学　基礎・予防・臨床　改訂第５版」（共著） 編者　今井浩孝、小椋康光　南江堂：担当部分（29 頁／約 674 頁）（２０２５年）
	23. 「予防薬学としての衛生薬学　−健康と環境− 第 5 版」（共著） 編者　戸田晶久、杉原数美、杉原成美　廣川書店：担当部分（51 頁／494 頁）（２０２５年）
主な研究活動	【総説】
	1.「乾癬の病態モデル動物とスーパー抗原」（単著） Farumashia, 33(2)　(P195～P196)（１９９７年）
	2. 「薬物アレルギーとキャリヤータンパク質」（単著） Xenobiotic Metabolism and Disposition,ADME Line 16, [2]　(P158～P159)（２００１年）
	３.「ノシセプチンの GABA/ベンゾジアゼピンおよびオピオイド受容体の作用における関与:抗不安作用と退薬症候発現機構の関わり」（共著） Annual report of Daiichi University of Pharmacy No.27（第一薬科大学研究年報第 27 号）（２０１１年）
	４. オセルタミビル（タミフル）によるマウスの異常行動に関するアデノシン受容体および脳内プロスタグランジンの相互関係 −タミフルの代謝物（OCB）と PGE_2 の相互作用を中心に−（共著） BULLETIN OF KYUSHU NUTRITION WELFARE UNIVERSITY No.21（P83～P112）（九州栄養福祉大学研究紀要第 21 号）（２０２４年）
	【学術論文】
	1. Effect of dl-3-pyridylalanine on serotonine concentration and tryptophan-serotonin metabolizing enzymes in rats （共著）1981.11　Chemical and Pharmaceutical Bulletin　Vol. 29, No. 10 (P2940～P2948) Shimeno H, Fukumoto Y, Toda A , Nagamatsu A.
	（概要） dl-3-pyridylalanine 投与による肝臓トリプトファンピロラーゼの酵素阻害作用によって、末梢臓器中のセロトニン含量には殆ど影響することなく、ラットの脳内セロトニン濃度の上昇のみを引き起こす事を明らかにした。この現象は、肝臓のトリプトファンピロラーゼの特異的阻害作用により血中および脳内トリプトファン濃度が生理的に上昇した結果、引き続き脳内セロトニン濃度が生理的分布で上昇しているものと思われる。
	2. ラット脳および末梢組織セロトニン量におよぼす DL-3-Pyridyl-alanine および 5-Hydroxy-L-tryptophan の併用投与の影響 （共著）1983.5　薬学雑誌 Vol. 103, No. 5　(P544～P552) 占野廣司、福元洋子、戸田晶久、永松淳雄
	（概要） DL-3-Pyridylalanine のトリプトファンピロラーゼ酵素の特異的阻害作用によるラット脳内セロトニン濃度の上昇を明らかにしており、この作用を更に効果的にするために、セロトニン前駆体との併用を試みた。その結果、DL-3-Pyridylalanine 及び 5-Hydroxy-L-tryptophan の併用投与によってラットの脳および各末梢組織のセロトニン量上昇を明らかにした。また、DL-3-Pyridylalanine 及び 5-Hydroxy-L-tryptophan の併用効果の有用性を、条件回避反応による実験結果からも確認した。
	3. In vitro における Des-Arg9-bradykinin およびその kininase II 水解産物のラット多核白血球遊走におよぼす影響 （共著）1984.6　薬学雑誌 Vol. 104, No. 6　（P659～P698） 井ノ口仁一、永松淳雄、谷口恭章、戸田晶久

（概要）
KininaseⅡは Des-Arg9-bradykinin に対して極めて強い tripeptidyl carboxypeptidase 作用を示すことから、kininaseⅡの水解産物である Ser-Pro-Phe は、ブラジキニンと共に炎症局所における多核白血球遊走に関与している可能性が示唆された。多核白血球の遊走実験は Boyden 法を用いて検討し、kininaseⅡの水解産物である Ser-Pro-Phe は、ブラジキンの約２分の１の多核白血球遊走能を認めた。

4. Ketoprofen ゲル状軟膏（KPG)の薬理学的研究（第一報）抗炎症・鎮痛作用
（共著）1985.5 応用薬理 Vol. 29, No. 5 （P833～P843）
斉田勝、竹之下博隆、谷口恭章、古田研一、青木哲雄、下園雄治、戸田晶久、溝口威伸、中川晃、松浦晃治、辻正義

（概要）
3% Ketoprofen ゲル状軟膏（KPG)の経皮吸収およびウサギの抗原惹起性関節炎の効果を検討した。KPG の塗布後ケトプロフェンの筋肉及び関節組織への高い浸透性が認められた。KPG 塗布群は、対照群に比較して滑膜のプロスタグランジンの著明な減少と関節浮腫の経時的な減少が確認された。また、滑膜の酸性ホスファターゼ(AP)活性及び総蛋白量には変化は認められなかったが、関節内滲出液の AP 活性の軽度の減少が認められた。

5. Ketoprofen ゲル状軟膏（KPG）の薬理学的研究（第２報）抗炎症作用および経皮吸収
（共著）1985.5 応用薬理 Vol. 29, No. 5 （P845～P856）
斉田勝、谷口恭章、竹之下博隆、戸田晶久、古田研一、下園雄治、矢野忠則、古川一秀、権藤敏、荒木栄喜、中川晃、松浦晃治、辻正義

（概要）
3% Ketoprofen ゲル状軟膏（KPG)の経皮吸収およびウサギの抗原惹起性関節炎の効果を検討した。KPG の塗布後ケトプロフェンの筋肉及び関節組織への高い浸透性が認められた。KPG 塗布群は、対照群に比較して滑膜のプロスタグランジンの著明な減少と関節浮腫の経時的な減少が確認された。また、滑膜の酸性ホスファターゼ(AP)活性及び総蛋白量には変化は認められなかったが、関節内滲出液の AP 活性の軽度の減少が認められた。

6. Effects of experimental diabetes on aminopyrine metabolism in rats
（共著）1987.9 Xenobiotica Vol. 17, No. 9 （P1075～P1083）
Toda A, Shimeno H, Nagamatsu A, Shigematsu H.

（概要）
アロキサン及びストレプトゾトシンで誘導した実験的糖尿病ラットに於ける、アミノピリンの代謝を正常ラットと比較検討した。正常ラットに比較して糖尿病ラットでは、アミノピリン代謝全体が低下して多くの中間代謝物の生成量が減少するものの、一部の代謝物（AM-CH_2OH）は逆に増加することが判明した。このことより、本代謝物生成に関与する CYP 分子種の変動が示唆された。このように一定の変化を示さない事から、病態時の薬物代謝の評価には、正常状態の薬物代謝と比較検討することが重要となると思われる。

7. Inhibition of rat liver tryptophan pyrrolase activity and elevation of brain tryptophan concentration by administration of DL-α-amino-β- pyridinepropanic acid (pyridylalanine) analogs
（共著）1987.12 Journal of Enzyme Inhibition Vol. 2（P56～P66）
Shimeno H, Bou S, Harada N, Toda A, Nagamatsu A.

（概要）
DL-α-amino-β-pyridinepropanic acid (pyridylalanine) analogs(2-PA, 3-PA および 4-PA)又はその代謝物は、夫々ラット肝臓のトリプトファンピロラーゼ活性（アポ及びホロ）を直接阻害して脳内のトリプトファン濃度を生理的組織分布に従って上昇する。その結果、上昇したトリプトファンから引き続き起こるセロトニンの生合成により生理的な組織分布で脳内セロトニン濃度の上昇が起こると考えられる。

8. Aminmopyrine metabolism in primary monolayer cultures of diabetic rat hepatocytes
（共著）1988.5 Xenobiotica Vol. 18, No. 5（P551～P560）
Shimeno H, Toda A, Nagamatsu A, Shigematsu H.

（概要）
新規に開発したコラゲーンゲル/ポリ塩化ビニリデン(PCV)フィルム浮上法に於いて、ラット肝細胞培養を行い長期間の細胞維持に成功した。本培養法を用いて、正常および糖尿病ラット肝細胞

に於ける、アミノピリン代謝を検討し、in vivo の結果と比較した。また、アミノピリンを投与した糖尿病ラットで増加する代謝物（AM-CH2OH）がインスリンによって用量依存的に減少することを確認した。これは、本代謝物の生成に関与するシトクロム P450 分子種の含量がインスリンにより調節されていることが考えられる。

9. Purification and aminopyrine monooxygenase activity of liver microsomal cytochrome P-450 from alloxan-induced diabetic rats

（共著）1991.3 Drug Metabolism and Dispsition Vol. 19, No. 2（P291～P297）

Shimeno H, Toda A, S.Ogata S, Nagamatsu A.

（概要）

アロキサン誘導糖尿病ラットから得られたインスリン感受性の二つのシトクロム P450 分子種を夫々、P-450AL-1 及び AL-2 と命名した。これらの分子種は、SDS-PAGE 電気泳動で単一なバンドとして確認され、夫々、分子量 50,000 及び 48,500 で、互いに N 末端アミノ酸配列が異なり、共に既に報告されている糖尿病ラットから精製された分子種のそれとも異なっていた。また、これらの分子種は、アミノピリンに対する、高い３位の水酸化活性を有していた。

10. Cytochrome P-450 in liver microsomes of streptozotocin-induced diabetic rats: purification and characterization

（共著）1993.2 Biochemica et Biophysica Acta Vol. 1141（P245～P252）

Toda A, Ogata S, Nagamatsu A, Shimeno H

（概要）

糖尿病のモデル動物の一つであるストレプトゾトシン誘導糖尿病ラットの肝ミクロソームから精製したインスリン感受性の二つのシトクロム P450 分子種を夫々、P-450ST-1 及び ST-2 と命名した。これらの分子種は、SDS-PAGE 電気泳動で単一なバンドとして認められ、夫々、48,500 及び 48,000 の分子量で、互いに N 末端アミノ酸配列が異なり、共に既に報告されている糖尿病ラットから精製された何れの分子種のそれとも異なっていた。

11. 病態時の薬物代謝研究　糖尿病ラットのアミノピリン代謝

（単著）1993.11 福岡大学（第 460 号）学位論文（P1～P107）

戸田晶久

（概要）

病態時の薬物代謝研究の一貫としてアミノピリンをモデル薬物として用い、病態としては、糖尿病ラットを使用して様々な代謝実験を行った。先ず、正常及び糖尿病ラットに投与されたアミノピリンの代謝を薬物速度論的に検討し、肝薬物代謝酵素系に及ぼす影響も調べた。次いで、糖尿病ラットから得られた肝細胞にて肝初代培養を行い、インスリンの効果を検討した。その結果、糖尿病ラットでは、特定の代謝物がインスリンに調節される CYP 分子種 により生成していることが示唆されたため、この分子種を精製し、それらの特徴を解析した。最後に本論文では、ヒト糖尿病場合も同様に、CYP 分子種に変動が生じている可能性を指摘し、今後の病態時の薬物代謝研究の重要性を協調した。

12. Effect of adjuvant-induced arthritis on hepatic drug metabolism in rats

（共著）1994.7 Xenobiotica Vol. 24, No. 7（P603～P611）

Toda A, Ishii N, .Kihara T, Nagamatsu A,　Shimeno H.

（概要）

正常、アジュバント関節炎(AA)、インドメタシン処置 AA 及びプレドニゾロン処置 AA ラット肝臓の薬物代謝を検討した。その結果、AA ラット肝臓の P450 と b5 含量および薬物代謝酵素活性（fp1、fp2、P450 複合酸化酵素、FAD-モノオオキシゲナーゼ）がかなり低下していること、更に数種の酵素活性を正常レベルまで回復するためには AA ラットに対する抗炎症剤による治療を長期にわたって続ける必要があることが示された。

13. Sutdies on Drug Metabolism in Pathlogical States －Aminopyrine Metabolism in Experimental Diabetic Rats－

（単著）1995.1Pharmaceutical Bulletin of Fukuoka University　Vol. 19（P36~P53）

Toda A.

（概要）

正常ラットと糖尿病ラットの薬物代謝を様々な観点から比較検討した。糖尿病ラットの肝臓を用

いて検討した薬物代謝活性は、基質として用いた薬物あるいは研究者によって異なった様相を呈することを示した。また、アジュバンと関節炎モデル動物とモデル薬物として用いたアミノピリンの代謝結果からは、in vitro の結果を用いて本病態動物の薬物代謝能を一般化することの難しさも示された。今後とも、こうした視点にたって、各種病態時の薬物代謝研究を重ねることで、薬物の代謝、薬物療法そして薬物開発研究に応分の寄与が出来るものと考えられる。

14. Selective inhibition by nimesulide, a novel non-steroidal anti-inflammatory drug, with prostaglandin endoperoxide synthase-2 activity in vitro

（共著）1995.3 Pharmaceutical Sciences Vol. 1（P179～P181）

Taniguchi Y, Ikesue A, Yokoyama K,Noda K, Debuchi H, Nakamura T, Toda A, Shimeno H.

（概要）

新規に合成した非ステロイド性抗炎症薬である Nimesulide のシクロオキシゲナーゼ（プロスタグランジン　エンドパーオキサイド　シンターゼ）の阻害効果を検討した。その結果、ヒツジ精液から得られたシクロオキシゲナーゼ-1 に対しては有意な阻害効果を示さず、ヒツジ胎盤から得られたシクロオキセゲナーゼ-２に対して特異的な阻害効果を示した。これは、Nimesulide が他の NSAIDs に比べて胃腸障害の少ないものになることを示唆している。

15. Liver haem metabolism in adjuvant-induced arthritic rats

（共著）1996.4 Xenobiotica Vol. 26, No. 4（P415～P423）

Toda A, Kihara T, Ono N, Nagamatsu A, Shimeno H.

（概要）

アジュバント関節炎ラット（AA）に於いて、肝臓中シトクロム P450 含量が低下すことを既に明らかにしており、この低下とヘム代謝の関係を検討した。その結果、AA ラットでは、ヘムの分解酵素であるヘムオキシゲナーゼ活性が上昇していた。また、ヘム生合成に関与する代謝酵素活性は全体的に上昇しているものの、コプロポルフィリノーゲン　オキシダーゼ活性のみが極めて低下していた。従って、シトクロム P450 含量の低下は、これらの組み合わさった作用によって起こっていると思われる。

16. Effect of interleukin 1β-induced fever on hepatic drug metabolism in rat

（共著）1998.6 Xenobiotica Vol. 28, No. 6（P559～P569）

Kihara T, Toda A, Umesue I, Ono N, Shigematsu H, .Soeda S, Shimeno H.

（概要）

Interleukin 1β をラットの脳側室内に投与して作成した発熱病態のモデル動物に於いて、肝臓の薬物代謝に及ぼす影響を検討した。ラットの発熱状態においては、シトクロム P450 含量低下や第 I 相の数種の薬物酵素活性、第 II 相の抱合酵素の活性の低下が認められた。また、イムノブロット法により、発熱状態のラット肝臓では、CYP アイソザイムの内、CYP2C11 及び CYP3A が極端に低下している事が判明した。

17. Inhibition by nimesulide of prostaglandin production in rat macrophages

（共著）1998.1 Drugs under Experimental and Clinical Research Vol. 24,No. 1（P17～P27）

Taniguchi Y, Yokoyama K, Ikesue A, Noda K, Debuchi H, Nakamura T, Toda A , ShimenoH.

（概要）

新規に合成した非ステロイド性抗炎症薬である Nimesulide のマクロファージに於けるプロスタグランジン生成に対する阻害効果を検討した。その結果、ザイモザン刺激によるマクロファージからの PGE2 産生を阻害した。これは、シクロオキシゲナーゼ-2（プロスタグランジン　エンドパーオキシド　シンターゼ-2：COX-2）の m-RNA 発現の阻害や COX-2 の誘導阻害ではなく、選択的な COX-2 に対する直接阻害であることが判明した。

18. Hepatic heme metabolism in rats with fever induced by interleukin1

（共著）1999.2 Research Communications in Molecular Pathology and Pharmacology Vol. 104, No. 2（P115～P126）

Kihara T, Umesue I, Soeda S, Toda A, Ono N, Shigematsu H, Shimeno H.

（概要）

Interleukin 1β をラットの脳側室内に投与して作成した発熱病態のモデル動物に於いて、肝臓のヘム代謝に及ぼす影響を検討した。特に、既に明らかにしているシトクロム P450 含量の低下をヘムの生合成系と分解系を中心に調べた。その結果、ヘム生合成系の律速酵素であるδ-アミノレ

ブリン酸合成酵素とポルホビリノーゲン合成酵素の有意な活性低下を認めた。一方、ヘム分解系の中心的酵素であるヘムオキシゲナーゼの活性は著しく増加していた。

19. Antigenicity of sulfanilamide and its metabolites using fluorescent-labelled compounds

（共著）2005.9 Xenobiotica Vol. 35, No. 9（P911～P925）

Eyanagi R, Toda A, Ishii Y, Saito H, Soeda S, Shimeno H, Shigematsu H.

（概要）

薬物によるアレルギー発現機序の研究のため、スルファニルアミドの活性代謝物の蛍光標識化合物（DNS-4HABA 等）を用いて肝臓における結合タンパク質の生むを検討した。DNS-4-HABA が結合する蛋白を HPLC で単離精製し、N 末端アミノ酸分析を行った所、ラット肝サイトゾル画分から ubiquitin(10kDa)、 fatty acid binding protein(30kDa)、ミクロソーム画分から retinol-dehydrogenase (35 kDa)が、モルモット肝サイトゾル画分からは glutathione-S-transferase B (mμ) (25 kDa)が同定された。

20. Effects of experimental diabetes on hepatic drug metabolism in rats: the activities of flavin-contgaining monooxygenase, the phaseII conjugation reactions and glutathione related enzymes

（共著）2005.11 Research Communications in Molecular Pathology and Pharmacology Vol. 117, No. 118（P13～P27）

Toda A, Eyanagi R, Saito H, Soeda S, Shimeno H, Moriyama M, Shigematsu H.

（概要）

アロキサン及びストレプトゾトシン（STZ）誘導糖尿病ラットに於ける肝薬物代謝（Flavin-containing monooxygenase (FMO)、グルタチオン関連酵素、 phaseII 抱合反応）等の変動を正常ラットのそれと比較した。その結果、両糖尿病ラットでは、FMO 及び数種の phaseII 抱合酵素並びにグルタチオン関連酵素の酵素活性は、正常ラットのそれに比し有意に高く、この上昇はインスリン処理により何れも正常値に回復した。一方、グルタチオン S-転移酵素活性は、STZ 糖尿病ラットのみで上昇し、これはインスリン処理により正常値に回復せず、糖尿病の高血糖状態に特異的な変化ではないことが明らかとなった。

21. Plasminogen activator inhibitor-1 aids nerve growth factor-induced differentiation and survival of pheochromo-cytoma cells by activating both the extracellular signal-regulated kinase and c-Jun pathwa

（共著）2006.5 Neuroscience Vol. 141, No. 1（P101～P108）

Soeda S, Shinomiya K, Ochiai T, Koyanagi S, Toda A, Eyanagi R, Shimeno H.

（概要）

プラスミノーゲン活性化阻害因子-1(ＰＡＩ－１)は、非血清下でラットの神経細胞突起の伸展とクロム親和性細胞の生存性を高め、続いて起こる神経生長因子受容体（Trk A）と c-Jun の直接的なリン酸化の両方の活性化を増強する。ＰＡＩ－１は、神経組織の栄養因子として働くことを示唆しており、これは神経成長因子の保護だけではなく c-Jun/活性化タンパク質－１の経路を活性化することでも起こっている。

22. The S-oxidation of PCB methylsulfoxide to PCB methylsulfone with animal liver microsomes and human cytochrome P450

（共著）2007.4 Persistent Organic Pollutants (POPS) Resarch in Asia Vol. 1(P251～P256)

Kuroki H, Nakai H, Toda A, Mitsutake M, Eyanagi R, Kitamura S.

（概要）

MeSO2-PCB から MeSO-PCB の S-oxidation に関係する酵素系を明らかにするために、ラット、モルモット、マウスおよびヒト・チトクローム P450 の肝ミクロソームを用いた MeSO2-CB52 に対する 3-又は 4-MeSO-2,2',5,5'-4 クロロビフェニル（CB52）への S-oxidation を検討した。また、ヒト・フラビン含有モノオキシゲナーゼ（FMO）、3-又は 4-MeSO2-CB52 の S-oxidation 活性を対照肝ミクロソームで比較検討した。その結果、P450 アイソフォーム、特に、CYP2B6、CYP2C9 と CYP2C19（フェノバルビタールによる P450 の誘導性のアイソフォーム）は MeSO2-PCB からの MeSO-PCB の S-oxidation に関与し、FMO アイソフォームはその S-oxidation に関与していないことが確認された。

23. Protective effects of carotenoids from saffron on neuronal injury in vitro and in vivo

（共著）2007.4 Biochemica et Biophysica Acta Vol. 1770（P578～P584）
Ochiai T, Shimeno H, Mishima K, Iwasaki K, Fujiwara M, Tanaka H, Shoyama Y, Toda A, Eyanagi R, Soeda S.

（概要）
サフランのカロチノイド色素は、ジ・クロシン、3 クロシンおよびクロシンから成る。本研究において、サフランの神経保護の効果が単にクロシンだけに起因するかどうか確認する為に、低酸素状況下で、PC12 細胞におけるクロシンの GSH 合成活性を調べた。神経保護の作用強度の順番は、クロシン>3 クロシン>ジ・クロシンとピクロクロシンの順であり、これらのサフランの構成要素間で、クロシンが最も効果的にγ-グルタミルシステイニルシンターゼの伝令ＲＮＡ発現を促進することを示した。これらのことは、カロチノイドがマウスで中大脳動脈の閉鎖に起因する梗塞部を有意に減らすことができるものと考えられる。

24. Acid sphingo-myelinase inhibition suppresses lipopoly-saccharide-mediated release of inflammatory cytokines from macrophages and protects against disease pathology in dextran sulphate sodium-induced colitis in mice
（共著）2007.9 Immunology Vol. 122（P56～P64）
Sakata A, Ochiai T, Shimeno H, Hikishima S, Yokomatsu T, Shibuya S, Toda A, Eyanagi R, Soeda S.

（概要）
LPS を介する THP-1 マクロファージからの TNF、IL-1 と IL-6 の遊離、デキストラン硫酸塩ナトリウム(DSS)で誘導したマウスの大腸炎の病態および強力な抑制薬（SMA-7）の効果を報告した。SMA-7 は、LPS 誘発によるサイトカイン遊離と核因子（NF）-B 活性化を抑制した。LPS の刺激は、酸性 SMase の活性化を 4 倍増加したが、中性 SMase の活性はわずかな増加であった。10μM SMA-7 の存在下では、酸性 SMase は対照レベルのままであり、セラミドの生成を減弱した。しかしながら、SMA-7 と LPS を処置したマクロファージを含む培地で大腸細胞を培養すると生存性が良く、セラミドは大腸細胞に対して細胞障害因子を遊離する LPS 刺激情報伝達の役割があることを示唆した。

25. Cholesterol-independent, MAPK/ERK signal-mediated Simvastatin potentiation of nerve growth factor-induced neurite outgrowth in PC-12 cells
（共著）2008.1 Pharmaceutical Bulletin of Fukuoka University Vol. 8, No. 32（P146～P159）
Ochia Ti, Fukuda K, kasutani M, Sakata A, Shimeno H, Toda A, Eyanagi R, Soeda S.

（概要）
ラット PC12 細胞の NGF 誘導分化に及ぼす simvastatin、lovastatin 及び mevastatin の影響を検討した。その結果、これらの statin の内 simvastatin は細胞外シグナル調節キナーゼのリン酸化(ERK)を最も促進するが、タンパク質キナーゼＢに対しては効果がなく、NGF 単独で起こるより高いレベルの ERK の NGF 誘導リン酸化状態の遅延に寄与することが判明した。

26. Role of amygdaloid nuclei in the anxiolytic-like effect of nocicept in/orphanin FQ in rats
（共著）2008.1 Neuroscience Letters Vol. 431（P66～P70）
Uchiyama H, Toda A, Hiranita T, Watanabe S, Eyanagi R.

（概要）
高架式十字迷路を用いて、ラットに於ける nociceptin/orphanin FQ(N/OFQ)の抗不安作用を検討した。中心扁桃体への N/OFQ の投与によりオープンアームにおける滞在時間が増加したのに対し、腹側中脳被蓋野への投与では変化が見られなかった。また、非ペプチド性 N/OFQ レセプター（NOP）拮抗剤（J-113397）は、N/OFQ によって誘導される抗不安作用を阻害した。これらの結果は、N/OFQ の抗不安作用がオープンアームからの脱出を減じることを示しており、それはパニック作用の関与が中心扁桃体内で N/OFQ システムと関連していることが示唆される。

27. Involvement of the GABA/benzo-diazepine receptor in the axiolytic-like effect of nociceptin / orphanin FQ
（共著）2008.5 European Journal of Pharmacology Vol. 590（P185～P189）
Uchiyama H, Yamaguchi T, Toda A, Hiranita T, Watanabe S, Eyanagi R.

（概要）
高架式十字迷路を用いて、ラットに於ける nociceptin/orphanin FQ(N/OFQ)の抗不安作用を検討した。マウスの脳室内への nociceptin/orphanin FQ(N/OFQ)（0.1 と 0.32nmol）の注入は、その抗不安作用により、滞在時間が増加した。また、非ペプチジル N/OFQ 受容体（NOP）拮抗剤、J-113397(1-{(3R,4R)-1-

cyclooctylmethyl-3-hydroxymethyl-4-piperidyl}-3-ethyl-1,3-dihydro-2H-benzimidazol-2-one)と N/OFQ によって誘発される高架式十字迷路の滞在時間増加を抑制した。一方、ベンゾジアゼピン受容体拮抗剤（フルマゼニル）、GABAA 受容体拮抗剤（(+)ビククリン）、N/OFQ によって誘発される高架式十字迷路滞在時間の増加も阻害した。しかしながら、海馬への N/OFQ の脳室内注入は、滞在時間に影響を及ぼさなかった。これらの知見は、N/OFQ の抗不安薬様の効果が扁桃で GABA/ベンゾジアゼピン系に関連があることを示唆している。

28. Sphingo-myelinase inhibition suggests a posssible new strategy for the treatment of inflammatory bowel disease

（共著）2008.1 Current Drug Therapy Vol. 3, No. 3（P218～P225）

Soeda S, Sakata A, Ochiai T, Yasuda K, Kuramoto Y, Shimeno H, Toda A, Eyanagi R, Hikishima S, Yokomastu T, Shibuya S.

マクロファージには炎症性サイトカイン（例えば腫瘍壊死因子（TNF））を分泌することによって炎症性大腸疾患（IBD）の疾患病理学での重要な役割があるこが示唆されている。IBD の治療法は、これらの炎症伝達物質の一つ以上を目標とする。特に、抗-TNF-抗体、CDP571 と Infliximab は、臨床的に、若干の成功でクローン病を処置するのに用いられた。脂質メッセンジャー・セラミドを生成するために、炎症性サイトカインとリポ多糖体（LPS）はスフィンゴミエリナーゼ（SMases）の活性化とスフィンゴミエリン(SM)の以降の加水分解を生じる。SMase 抑制薬の設計は、新しい治療を LPS の処置に対して提供する可能性がある。

29. The stimulatory effects of caffeine with oseltamivir (Tamiflu) on light-dark behavior and open field behavior in mice

（共著）2010.1 Neuroscience Letters Vol. 469, No. 2（P184～P188）

Uchiyama H, Toda A, Imoto M, Nishimura S, Kuroki H, Soeda S, Shimeno H, Watanabe S, Eyanagi R.

（概要）

明暗行動と開放行動のマウスの反応をオセルタミビルを用いて検討した。オセルタミビル（75 と 150mg/kg、腹腔内に）単独は、いずれの明暗反応とオープンフィールドテストに於ける異常反応も所要時間に対する影響もなかった。しかし、非選択的アデノシン A(1)/A(2)受容体拮抗剤、カフェイン（10mg/kg、i.p.）、オセルタミビル（150mg/kg、i.p.）と併用では、明暗反応テストで開放領域での滞在時間が増加した。これは、ベンゾジアゼピン受容器アンタゴニスト（フルマゼニル（10-20mg/kg、皮下に）によって変化しなかった。さらに、アデノシン A(2)受容体拮抗剤、SCH58261（3mg/kg、i.p.）オセルタミビル（150mg/kg、i.p.）と併用してアデノシン A(1)受容体拮抗剤（DPCPX（1-3mg/kg、腹腔内に））を投与すると、オープンフィールドテストで異常運動が増加した。これらの知見は、オセルタミビルの作用がドーパミンとアデノシン系を含む可能性があることを示唆する。

30. Design, Synthesis, and Pharmacological Activity of Nonallergenic Pyrazolone-Type Antipyretic Analgesics

（共著）2010.12 Journal of Medicinal Chemistry Vol. 53, No. 24（P8727～P8733）

Uramaru N, Shigematsu H, Toda A, Eyanagi R, Kitamura S, Ohta S

（概要）

新規非アレルギー性ピラゾロン鎮痛薬を開発するために、ピラゾロン環の位置 1 が N-脱アルキルを経て抗原性の代謝物の形成を妨害するために最初のメチル基の代わりに置換された一連の合成物を合成した。これらのピラゾロンの類似体が、アンチピリン（AT）と同程度強い解熱作用および鎮痛効果を示すとわかった。アレルゲン性の検査において、AT はモルモットで典型的皮膚反応を誘発したが、ピラゾロンの類似体は不活性だった。生体内で抗原性の代謝物に変わらなかったので、これらの新しいピラゾロンの類似体が非抗原性だったと結論した。

31. Δ9−tetra-hydro-cannabinol and its major metabolite Δ9−tetrahydro-cannabinol-11-oic acid as 15-lipoxygenase inhibitors

（共著）2011.3 ournal of Pharmaceutical Sciences Vol. 100, No.3 （P1206～P1211）

Takeda S, Earing J, Aramaki H, Imoto M, Toda A, Eyanagi R, Amamoto T, Yamamoto I, Watanabe K.

（概要）

15-リポオキシゲナーゼ（15-LOX）は、酸化低比重リポ蛋白質（アテローム硬化の主な原因の要

因）の形成に対する鍵酵素の１つである。Δ9-Tetrahydrocannabinol（Δ9-THC）（マリファナの主要構成要素）は、アテローム動脈硬化症を抑制することが示唆された。Δ9-THC が、2.42μM.の IC(50)値による 15-LOX の直接的な阻害剤であることがわかった。そして、もう一つのΔ９-THC 代謝物 11-OH-Δ９-THC（精神状態に影響する）以外の、Δ(9)-THC-11-oic acid（Δ9-THC の主要および非精神活性代謝物）が 15-LOX を阻害することが明らかとなった。

32. Covalent binding of nitroso-sulfonamides to glutathione S-transferase in guinea pigs with delayed type hypersensitivity

（共著）2012.4 International Immunopharmacology Vol. 12, No. 4（P694～P700）

Eyanagi R, Toda A, Imoto M, Uchiyama H, Ishii Y , Kuroki H, Kuramoto Y,Soeda S, Shimeno H.

（概要）

薬剤誘発アレルギーは、生体高分子と活性代謝物からなる抱合体によって誘発されると考えられている。3 つのニトロソ化合物（すなわち、4-ニトロソ-スルファニルアミド（SA-NO）、4-ニトロソスルファメトキサゾール（SMX-NO）と蛍光標識のニトロソ化合物（DNSBA-NO））を合成して、多量のニトロソ化合物をモルモットの gpGST に結合することを調べた。各ニトロソ化合物を使用している感作モルモットは、単独で gpGST を使用して行われる誘発試験で、陽性皮膚反応を示した。従って、ニトロソ化合物がモルモットの体で gpGST と結合するとき、ニトロソ gpGST は新抗原として作用する。そして、それは自己抗体の合成を誘導する。薬の活性代謝物によるモルモットの免疫化は、ヒトで遅延型過敏反応の発生を予測するために、情報を伝える可能性がある。

33. Vasohibin induces prolyl hydroxylase-mediated degradation of hypoxia-inducible factor-1α in human umbilical vein endothelial cells

（共著）2012.7 FEBS Letters Vol. 586, No. 7（P1067～P1072）

Kozako T, Matsumoto N, Kuramoto Y, Sakata A, Motonagare R, Aikawa A, Imoto M, Toda A, Honda S , Shimeno H, Soeda S.

（概要）

Vasohibin は、VEGF によって内皮細胞で選択的に誘発される脈管形成の重要な負のフィードバック調節装置であると考えられる。今回、HUVEC で過酸化水素（H_2O_2）によって誘導される酸化ストレスの下で、HIF-1α発現に関して vasohibin の役割を評価した。VEGF は、vasohibin 発現の増加と関係していた有意の細胞増殖を誘発した。H_2O_2-前処置の後、VEGF は細胞増殖を更に増加させた、しかし、単独で VEGF と比較されるとき、これは vasohibin 表現で減少と対照的に、関係していた。興味深いことに、vasohibin は H_2O_2-前処置の間、HIF-1α発現の低下を通して、細胞増殖を阻害した。さらにまた、vasohibin はプロリルヒドロキシラーゼ（PHD）の発現を上昇させた。これらの結果は、vasohibin が PHD を経た HIF-1α低下を通しての脈管形成の負のフィードバック調節装置としての十字形の役割を演ずることを示唆する。

34. Pyriproxyfen enhances the Immunoglobulin G immune response in mice

（共著）2013.4 Microbiology and Immunology Vol. 57, No. 4（P316～P322）

Sharmin T, Satho T, Irie K, Watanabe M, Hosokawa M, Hiramatsu Y, Talukder P, Okuno T, Tsuruda S, Uyeda S, Fukmits Y, Tamura Y , Nakashima Y, Imoto M, Toda A, Kashige N, Miake F.

（概要）

Pyriproxyfen の大用量が哺乳類で免疫応答に影響を及ぼすかどうか検討した。Pyriproxyfen の大用量投与は、特異的に全体の IgG 免疫応答を有意に増強した。

これは、pyriproxyfen 投与の 24 時間後には消失していた。この結果は、pyriproxyfen が安全なものであることを示唆した。また、pyriproxyfen は、ミョウバンによるインターロイキン-4 と-10 での IgG1 の誘発に比較して、IgG2a より高い活性を有する、腫瘍壊死因子αとγ-インターフェロンの反応を増強した。これらのことは、pyriproxyfen による免疫増強の機序がミョウバンのそれとは異なることを示している。

35. Expression and secretion of cholera toxin B subunit in lactobacilli

（共著）2013.6 Biological and Pharmaceutical Bulletin Vol. 36, No. 6（P952～P958）

Okuno T, Kashige N, Satho T, Irie K, Hiramatsu Y, Sharmin T, Fukumitsu Y, Uyeda S, Yamada S, Harakuni T, Miyata T, Arakawa T, Imoto M, Toda A, Nakashima Y, Miake F.

（概要）
乳酸菌（LAB）が、さまざまな場所（食物と医療用品に含むこと）で使われる。それらの「一般に、安全なものと認められた」状態によるキャリアとして LAB を使用しているワクチン開発の多くの研究がある。コレラは、コレラ菌によって生じるコレラ毒素（CT）のため下痢が起きる感染症である。五量体のコレラ毒素 B（CTB）サブユニットは、毒性を持たないコレラワクチンの抗原として、さまざまな疾患に対するワクチンの分子として使われている。今回、CTB を発現を制限されている組換え型の LAB を生成した。これが GM1 ガングリオシドと結合することを明らかにした。この結果は、それが LAB と CTB を併合している新しい経口コレラワクチンの基礎として有効であることを示唆している。

36. Recombinant fusion protein of cholera toxin B subunit with YVAD secreted by Lactobacillus casei inhibits lipopo-lysaccharide-induced caspase-1 activation and subsequent IL-1 beta secretion in Caco-2 cells

（共著）2014.5 BMC Biotechnology Vol. 14（P1～P9）
Hiramatsu Y, Yamamoto M, Satho T, Irie K, Kai A, Uyeda S, Fukumitsu Y, Toda A, Miyata T, Miake F, Arakawa T, Kashige N.

（概要）
rCTB 分泌媒体動物 pSCTB を修正することによって、rCTBYVAD 分泌媒体動物 pSCTBYVAD を作成した。rCTBYVAD を分泌している L. casei は、pSCTBYVAD で変換によって発生した。pSCTB 変わる L. casei と浄化された rCTB の培養上清のように、pSCTB-YVAD 変わる L. casei の培養上清と浄化された rCTBYVAD は GM1 ガングリオシドと結合した。また、リポ多糖体（LPS）に関係なく、浄化された rCTBYVAD と Caco-2 細胞に転位置される rCTB は rCTBYVAD を浄化するだけだったが、細胞生存度に影響を及ぼすことなく、rCTB は Caco-2 細胞で LPS によって誘発されたカスパーゼ-1 活性化と以降の IL-1β分泌を阻害しなかった。即ち、L. casei によって分泌される機能的なペプチドに溶解する rCTB タンパク質は GM1 ガングリオシド（rCTB の様な）と結合することができ、L. casei によって分泌される組換え型の YVAD は腸で抗炎症効果を及ぼす可能性がある。従って、L. casei によって分泌される rCTB には、IEC に対する YVAD の送達のための媒体動物として、潜在的な利用価値がある。

37. Effect of adenosine system in the action of oseltamivir on behavior in mice

（共著）2015.7 Neuroscience Letters Vol. 599（P7～P11）
Uchiyama H, Hiromura M, Shiratani T, Kuroki H, Honda S, Kosako K, Soeda S, Inoue K, Toda A.

（概要）
オセルタミビル（タミフル）服用に関連すると考えられる異常行動と死亡は、大きな問題となっている。オセルタミビルは、その活性型として、オセルタミビル・カルボン酸塩（OCB）に加水分解される。我々はオセルタミビルのマウス行動に及ぼす作用について、アデノシン系と OCB の効果を検討した。オセルタミビルの単独投与では異常運動は認められないが、カフェインとの併用で用量依存的に、それが出現・増強した。これは、アデノシン A2 受容体アゴニスト（CGS21680（0.2mg/kg、（皮下））によって無くなり、アデノシン A2 受容体拮抗剤、SCH58261 で増強した。これらの知見は、オセルタミビルの作用がアデノシン系とその代謝物に関連している可能性があることを示唆する。さらに、カフェインによるアデノシン A2 受容体の中心遮断と OCB によって誘発された行動変化の間の相互作用が示唆された。

38. Cannabidiol-2’,6’-dimethyl ether stimulates body weight gain in apolipoprotein E-deficient BALB/c. KOR/Stm Slc-Apoeshl mice

（共著）2015.12 The Journal of Toxicological Sciences Vol. 40, No. 6 (P739～P743)
Takeda S, Hirota R, Teradaira S, Takeda-Imoto M , Watanabe K, Toda A , Aramaki H

（概要）
カンナビジオール（CBD）（カンナビス植物の主要な非向精神性構成成分）の生物活性は、詳細に調べられているが、カンナビジオール-2',6'-ジメチル・エーテル（CBDD）（CBD のジメチル・エーテル派生化合物）の生物活性については未だ検討がなされていない。そこで今回、マウスの体重変化等に関する CBDD の効果とその原因・機序について検討した。その結果、アポリポタンパク質のアポリポ蛋白質 E が原因であることが判明し、これにより体重増加を促進されることを BALB/c. KOR/Stm Slc-Apoe（shl）マウスを用いて確認することができた。

39. Enhancement and regulation effect of myrcene on antibody response in immunization with

ovalbumin and Ag85B in mice

（共著）2016.12 Asian Pacific Journal of Allergy and Immunology Vol. 34, No.4（P314～P323）

Uyeda S, Sharmin T, Satho T, Irie K, Watanabe M, Hosokawa M, Hiramatsu Y, Koga T, Nakashima Y, Kashige N, Toda A, Mishima K, Miake F.

（概要）

Pyriproxyfen は、ヘルパー１型（Th1）に偏った免疫応答を示す。そして、myrcene がオボアルブミン(OVA)に対する IgG 免疫応答を強化することが示された。Myrcene は OVA 特異的な IgG2a 力価を増加させ、Th1-免疫応答の誘導が示唆された。IL-13 は免疫直後に増加したが、Th1 サイトカインである、IFN-γは免疫 8 週後に増加した。また、myrcene は免疫 5 週後に Ag85B 特異的な総 IgG 力価を増加させることが分かった。即ち、myrcene が Th1 免疫応答を強化することが示唆され、OVA と Ag85B に対して特異的な免疫応答を増強することが確認された。従って、Th1 免疫応答の強化が myrcene によって可能であることが示された。

40. Characterization of a Novel Allergenic Protein from the Octocoral Scleronephthya gracillima (Kuekenthal) which corresponds to a New GFP like protein named Akane

（共著）2017.9 Luminescence Vol. 32, No. 6（P1009～P1016）

Kato Y, Jimbo M, Sakakibara Y, Onizuka R, Takahashi T, Matsuhashi S, Mita H, Amada K, Imahara Y, Tanabe K, Toda A , Kamiya H.

（概要）

特定の海洋生物が職業漁師の間でアレルギー反応を引き起こすことは、知られていた。特に、八珊瑚（Scleronephthya gracillima（Kuekenthal））が漁師でアレルギー疾患を引き起こすことに着目し、これから新規のアレルゲン物質を検索した。その結果、27kDa のタンパク質を、ウェスタンブロット法、クロム親和性細胞様免疫染色法と抗原による患者血清との吸収により確定した。これは、アカネという名称の GFP 様のタンパク質に対応する赤および緑の部分蛍光放出をする新規アレルギー性のタンパク質であることを確認した。

41. Metallo-estrogenic effects of cadmium are absent in long-term estrogen-deprived MCF-7 cells: evidence for the involvement of constitutively activated estrogen receptor α and very low expression of G protein-coupled estrogen receptor 1

（共著）2019.11 Toxicology Letters Vol. 319（P22～P30）

Hirao-Suzuki M, Takeda S, Kodama Y,　Takiguchi M, Toda A, Ohara M.

（概要）

MCF-7 ヒト乳癌細胞は、エストラジオールにより ERα情報伝達を通して成長を正常に示す。また、我々は、MCF-7 細胞とは異なり、LTED 細胞が内因性 ERα活性化を起こし、エストラジオールから独立した反応を示すことを示した。さらに、Cd は LTED 細胞でなく、MCF-7 細胞と ERα を介して、LTED 細胞で ERα情報伝達を刺激し、これを MCF-7 細胞と比較すると、LTED 細胞は、Gタンパク質結合型エストロゲン受容体 1 を極めて低いレベルで発現していた。。これらの知見は、Cd の発情性物質作用が LTED 細胞で、潜在的に閉経後乳癌で抑制される可能性があることを示唆するものである。

42. Effect of calcium on the hydrolysis activity of human butyryl-cholinesterase

（共著）2020.2 Journal of Pharmaceutical Sciences Vol. 109 (P1417～P1420)

Imai T, Goksin Bahar F, Ohura K, Toda A.

（概要）

精製したヒト・ブチリルコリンエステラーゼ(HuBChE)の加水分解活性に及ぼすカルシウムの影響について、酸性薬物と塩基性薬物を用いて検討した。HuBChE による酸性薬物の加水分解はカルシウムイオンの濃度依存的に増大したが、塩基性薬物の加水分解にはほとんど影響しなかった。

さらに、Butyrylthiocholine（BTC）（陽イオン性の基質）は、二相性の活性化で加水分解され、その他の陽イオン性の基質（ブチリルとバレリル基群によるプロプラノロール誘導体）は、HuBChE によって優先的に加水分解された。これらの化合物の加水分解率は、ほとんどカルシウムイオンの影響を受けなかった。また、カルシウムは EF-hand に強く結合する原子に加え、Km が 2～6 mM で 2 原子結合することを明らかにした。

43. Cannabidiolic acid dampens the expression of cyclooxygenase-2 in MDA-MB-231 breast cancer cells: Possible implication of the peroxisome proliferator-activated receptor β/δ abrogation

（共著）2020.2 The Journal of Toxicological Sciences 45(4)（P227～P236）
Hirao-Suzuki M, Takeda S, Koga T, Takiguchi M, Toda A.

（概要）
COX-2 発現が MDA-MB-231 細胞でペルオキシソーム増殖因子活性化受容体(PPAR) β/δ 媒介情報伝達によって調整されることを初めて確認した。すなわち、カンナビジオール酸(CBDA)は GW501516(PPAR δ のアゴニスト)で PPAR β/δ による活性化を抑制した。そして、PPAR γ は CBDA に影響を受けなかったが、PPAR β/δ 感受性遺伝子(COX-2)はダウンレギュレートされた。さらに、細胞アクチン・ストレスファイバーの消失、PPAR β/δ の特質と GW501516 により起こる COX-2 経路の活性化は、CBDA によって効果的に逆転した。これらのことより、CBDA が PPAR β/δ 情報伝達をしないことで、COX-2 の機能的な調節装置となると考えられる。

44. (-)-Isostemonamine can enhance the anti-proliferative activity of trichostatin A against human breast cancer MDA-MB-231 cells

（共著）2020.2 Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB) Reports（P56～P59）
Hirao-Suzuki M, Takeda S, Iwata T, Fujita S, Tomiyama T, Takiguchi M, Toda A, Shindo M.

（概要）
(-)-isostemonamine は、エストロゲン受容体α陰性ヒト乳癌細胞（MDA-MB-231）に対する抗増殖因子である。そして、(-)-isostemonamine のチオアミド誘導剤である ST-4 は、この細胞の生存性に影響を及ぼさないと考えられている。本研究において、我々は、ST-4 とその関連合成物（ST-3 と ST-5）が 5-アザ-2'-デオキシシチジンの抗増殖活性を増強することができるか否か検討した。その結果、合成物間で、ST-4 が MDA-MB-231 に対する最も強い抗増殖性活性を示すことを明らかとした。しかし、この効果は、25nM trichostatin A （TSA）濃度を超えるものでは観察されなかった。この結果は、ST-4 が抗癌剤と結合することで抗増殖性活性を増強することが示唆された。このことは、最適な臨床での有効性と安全性のために必要とされる薬剤の濃度の最小化に寄与するものと考える。

45. Fatty acid 2-hydroxylase (FA2H) as a stimulatory molecule responsible for breast cancer cell migration

（共著）2020.10 Biochem Biophys Res Commun Vol. 531, No. 2 (P215～P222)
Hirao-Suzuki M, Koga T , Sakai G, Kobayashi T, Yuji Ishii , Miyazawa H, Takiguchi M, Sugihara N , Toda A, Ohara M, Takeda S.

（概要）
脂肪酸 2-水酸化酵素（FA2H）の機能には二つの役割があり、癌生物学の分野で議論されている。また、疫学的な検査にて FA2H の発現が TNBC（陰性乳癌）症例でより短い無症候生存を伴うことが証明されている。我々は、FA2H がペルオキシソーム増殖因子活性化の受容体α（PPARα）であり、ヒトの乳癌 MDA-MB-231 細胞の調整遺伝子が TNBC 分析のための実験的な生体外モデルになることを報告した。本研究では、MDA-MB-231 細胞が MCF-7 細胞と比較して FA2H の発現レベルが低く、PPARα 駆動転写性の活性がさらなる FA2H 発現に影響を及ぼして MDA-MB-231 および MCF-7 乳癌細胞遊走を反映することを示した。即ち、我々の知見は、ERα 発現の状態とは独立しており、FA2H が乳癌細胞遊走刺激物質であることを示唆している。

46. Methionine is a Key Regulator in the Onset of Atopic Dermatitis in NC/Nga Mice

（共著）2021.2 Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB) Reports Vol. 4, Issue 1(P41～P47)
Koga K, Hirayama F, Satoh T, Ishii Y, Kashige N, Hiromura M, Soeda F, Toda A.

（概要）
アトピー性皮膚炎（AD）は、そう痒とひっかき行動を呈して、しばしば慢性の状態に進行する皮膚障害である。NC/Nga マウスを、AD のモデルとして使用した。我々は、潜在的に AD 症状の重症度に関連した因子を特定するために、NC/Nga マウスから血清に対してメタ投入分析を行った。分析の結果、還元型の血清メチオニン・レベル間の相関を示しており、AD の重症度を増加させた。加えて、AD 症状の発症の前の過剰なメチオニンによる治療は、AD の増悪を抑制した。これに対し、AD 症状の発症の後のメチオニンの投与は、増悪を抑制しなかった。アトピー性皮膚炎（AD）は、そう痒とひっかき行動を呈して、しばしば慢性の状態に進行する皮膚障害である。NC/Nga マウスを、AD のモデルとして使用した。我々は、潜在的に AD 症状の重症度に関連した因子を特定

するために、NC/Ngaマウスから血清に対してメタ投入分析を行った。分析の結果、還元型の血清メチオニン・レベル間の相関を示しており、ADの重症度を増加させた。加えて、AD症状の発症の前の過剰なメチオニンによる治療は、ADの増悪を抑制した。これに対し、AD症状の発症の後のメチオニンの投与は、増悪を抑制しなかった。また、システインとタウリン（メチオニンの不可逆性代謝物）は、AD発生を抑制しなかった。これらの成績は、メチオニン（その代謝物以外のでない）が発症（ADの発展よりもむしろ）の変動主要因であることを示す。今後、様々な食品成分を含め検討をする予定である。今後、様々な食品成分を含め検討をする予定である。

47. Estimation of dietary intake and sources of organo-halogenated contaminants among infants: 24-h duplicate diet survey in Fukuoka, Japan

（共著）2021.3 Environmental Research Vol. 195, Issue 110745

Fujii Y, Poma G, Malarvannan G, Soeda F, Toda A, Haraguchi K, Covaci A.

（概要）

環境の残留性有機汚染物質（POPs）の広範囲にわたる発生は、問題となっている。本研究は、ジクロロジフェニルトリクロロエタンとその代謝物（DDT）ポリ塩化ビフェニル（PCB）を含む有機ハロゲン化された汚染物質、クロルデン（CHLs）、ヘキサクロロベンゼン（HCB）、ポリ臭化ジフェニルエーテル（PBDE類）、6ブロモシクロドデカン（HBCDs）において、4ブロモビスフェノールA（TBBPA）（2,4,6-3ブロモフェノール（TBP））は、レベル、プロフィールと汚染の可能性があるもとを調査するために、日本の乳児の完全な食事セット（24時間の二重の食事）で測定を行った。その結果、TBPが海草の消費（スピアマンの $\rho = 0.46$、$p < 0.05$）と相関し、PCB-153、PCB-138、トランス・クロルデン、シス・クロルデンとトランスnonachlorはシーフードの消費（スピアマンの $\rho = 0.45\ 0.57$（$p < 0.05$））と相関していた。また、TBP（5.5 +/- 6.6ng/gの湿重量）の比較的高い濃度は海草サンプルで観察された。そして、海草がTBPの潜在的暴露の原因であることを示していた。

48. Effects of enriched environment on micturition activity in freely moving C57BL/6J mice

（共著）2021.7 Low Urin Tract Symptoms(LUTS) Vol. 13, No. 3(P400～P409)

Soeda F, Toda A, Masuzaki K, Miki R, Koga T, Fujii Y, Takahama K.

（概要）

エンリッチ（豊かな）環境（EE）が、感情的な強化を示すことが知られている。しかしながら、脳でのEEの効果についてほとんどわかっていない（例えば尿意機能など）。そこで、本研究ではマウスを用いて、EEが尿意活性に影響を及ぼすか否か、蓄尿、自由運動の記録を実施した。その結果、様々なエンリッチ環境（EEs）は、脳幹に対する効果を導くことと、これにより排尿反射の変化が反映される可能性があることが確認された。また、尿意活動を促進する老齢マウスにおいては、尿意活性機能障害（例えば多尿）の緩和が認められた。今後、更なる検討行う予定である。

49. Micturition function of freely moving BALB/c mice and their effects on rearing environment and neurogenesis inhibitor

（共著）2021.7日本排尿機能学会誌 第31巻第2号（P404～P410）

Soeda F, Toda A, Masuzaki K, Honda A, Moriyama S, Tashiro A, Kimura I, Kudo S, Sato A, Hashimoto T, Wakayama K, Koga T, Kobuke Y, Takahama K.

（概要）

BALB/cマウスの生理的な排尿活動および咳の誘発に伴う排尿回数を測定した。また、神経新生を阻害するテモゾロミドを用いて、排尿機能に対するエンリッチ環境と神経新生の影響について検討した。その結果、BALB/cマウスの排尿機能には性差があること、マウスの排尿機能に対するエンリッチ効果に海馬神経新生の増大が関与する可能性が示唆された。

50. Perfluorooctanoic acid (PFOA) as a stimulator of estrogen receptor-negative breast cancer MDA-MB-231 cell aggressiveness: Evidence for involvement of fatty acid 2-hydroxylase (FA2H) in the stimulated cell migration

（共著）2022.4 The Journal of toxicological sciences (J Toxicol Sci.) 47(4) (P159～P168)

Sakai G, Hirao-Suzuki M, Koga T, Kobayashi T, Kamishikiryo J, Tanaka M, Fujii K, Takiguchi M, Sugihara N, Toda A, Takeda S.

（概要）

今回、我々は、1）PFOA が PPARα を介した転写を活性化すること、2）PFOA が FA2H 発現に依存する移動を刺激すること、および 3）機構的に、PFOA が PPARα活性の PPARβ/δ抑制を緩和して MDA-MB-231 細胞の FA2H をアップレギュレートすることを示した。

51. Dimethylglycine, a Methionine Metabolite, Participates in the Suppressive Effect of Methionine on 1-Fluoro-2,4-dinitrobenzene-Induced Dermatitis

（共著）2023.7 Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB) 46(7)(P946～P954)

Koga T, Inoue K, Hirayama F, Hiromura M, Fujii K, Ishii Y, Hirao-Suzuki M, Takeda S, Toda A, Soeda F.

（概要）

我々は以前、アトピー性皮膚炎モデルマウスに必須アミノ酸であるメチオニンを継続投与したところ、アトピー性皮膚炎の症状が緩和したことを報告した。 今回は、ACD モデルマウスの作成に使用したマウスの系統によって、メチオニンの効果に系統差が見られ、この違いは、ACD による肝臓のベタイン-ホモシステイン メチルトランスフェラーゼ (Bhmt) 発現の抑制に関連する、肝臓のジメチルグリシン (DMG) 産生の抑制に起因していた。皮膚炎における肝代謝酵素の発現調節や、DMG の肝代謝状態による皮膚炎症状の緩和など、皮膚炎における肝臓と皮膚との相互作用の存在が示唆された。

主な学会発表

【国際学会及び国内学会発表】

国 際 学 会

1. The Metabolic Activation Mechanism of Aminopyrine to Cause Allergic Reaction

〈主　　催〉14th International Symposium on Microsomes and Drug Oxidations (MDO2002)
〈開 催 場 所〉Japan, Sapporo
〈開催年月日〉２００２年７月

Shigematsu H, Toda A, Eyanagi R, Shimeno H.

（概要）

アミノピリンの中間代謝物である4-amino-1,2-dihydro-5-methyl-2-phenyl-3-H-pyrazol-3-one(ADMP)は、4-アミノアンチピリンの脱メチル化によって生成し、グルタチオンやイソオイゲノールと結合する。また、モルモットの皮膚紅斑反応を起こし、アミノピリンアレルギーに於けるハプテンであることを強く示唆している。

2. The mechanism for dansyl chloride mediated drug allergy. Dansyl chloride-glutathione S-transferase complex has the potency of allergen

〈主　　催〉3th North American International Society for the Study of Xenobiotics (ISSX) meeting
〈開 催 場 所〉U.S.A., Maui, Hawaii
〈開催年月日〉２００５年１０月

Shigematsu H, Saito H, Toda A, Eyanagi R, Watabe T.

（概要）

我々は、グルタチオンS-transferase（GST）M1-1をダンシルクロリド（DC)処理モルモットの肝臓からのDC結合蛋白質として分離し、確認した。加えて、DCgpGSTM1-1複合体（DCとgpGSTM1-1が結合反応によって生じる）をモルモット肝臓から精製した。これは非抗原性だった。我々の結果は薬物アレルギーを引き起こすために知られている低分子量の薬物が代謝活性化で、生体内で機能蛋白質と複合体を形成することを示している。そして、それによりはアレルギー性反応を誘発することが確認できた。我々の研究は、低分子量の薬物が生体内抗原性を得る機序と現在使用されている薬物および新規開発薬に対する薬物アレルギー反応を確認するための有効な手段を示すものと思われる。

3. Glutahione S-transferase M1 as a potential carrier protein for allergic drugs in the guinea pig

〈主　　催〉3th North American International Society for the Study of Xenobiotics (ISSX) meeting
〈開 催 場 所〉U.S.A., Maui, Hawaii
〈開催年月日〉２００５年１０月

Saito H,Toda A, Eyanagi R, Watabe T, Shigematsu H

（概要）

モルモット（GP）肝臓T7ファージcDNAライブラリーは、PAに対して処置GPの肝臓で発現しているキャリアー蛋白質のスクリーニングのために用いた結果、GPのSMXは独立して個別のcDNAライブラリーであった。また、相補ＤＮＡのヌクレオチド配列は、これらのキャリアー蛋白質の１つがグルタチオン S トランスフェラーゼのミュー・クラス・サブユニット１（M1）であることが示された。本研究で使用した T7 ファージディスプレイ・システムは、低分子量のアレルギー性を有する化学物質や医薬品を検出するために有用な手段となるものと思われる。

4. Analysis of Hydroxylated Sulfur-containing PCB Metabolites formed from MeSO-PCB and MeSO2-PCB by Rat Liver Microsomes

〈主　　催〉36th International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants
〈開 催 場 所〉Italy, Firenze
〈開催年月日〉２０１６年８月
Kuroki H, Shima T, Tazuya-Murayama K, Kitamura S, Toda A

（概要）
残留性有機汚染物質の一つであるPCBの毒性発現には、その代謝物である水酸化体（OH-）およびメチルスルホン体（MeSO2-）の生物活性が関連していることが知られている。これら代謝物以外に、PCB中毒症である油症患者よりOH-とMeSO2-の二つの官能基をもつ新規な代謝物（OH-MeSO2体）が見出されている。この新規代謝物の生成機構およびPCB毒性発現との関連を明らかにするため、5-MeSO2-2,3,6-2’,5’-pentachlorobiphenyl (5-MeSO2-CB95)およびその前駆体であるメチルスルホキシド体(MeSO-)である5-MeSO-CB95をラット肝ミクロソーム（Ms）と反応し生成物を検討した。その結果、安定な代謝物と考えられているMeSO2体は、さらにMsにより (OH)1～2-MeSO2体へ代謝されること、また、MeSO体からの経路も存在することが明らかとなった。

5. Influence of neuraminidase inhibitor on the abnormal jumping off behavior induced experimentally by the combined administration of haloperidol and clonidine in mice

〈主　　催〉Neuroscience 2019.10
〈開 催 場 所〉U.S.A., Chicago, IL
〈開催年月日〉２０１９年１０月
Ono N, Yoshida M, Toda A.

（概要）
オセルタミビルが、インフルエンザ A 型と B 型で臨床的に使われているが、自傷行為に対するこの薬とヒトにおける関連性は、未解決のままである。抗インフルエンザ薬が実験人によって誘発された異常行動に影響を及ぼすかどうか調べた。その結果、オセルタミビルは、用量依存的に飛び跳ね行動を起こした。少しの用量でも単独で使われる場合は、いかなるジャンピング行動も提示しなかった。これは、少なくともカテコールアミン作動性のシステムの複雑な影響と中枢神経系の炭酸ヒドロリアーゼの活性で抗インフルエンザウイルス薬の関与の可能性がある。

国内学会（2018年～現在）

1. オセルタミビル及びその代謝物投与による異常行動について —プロスタグランジンE2（PGE2）の作用—

〈主　　催〉第35回日本薬学会九州支部大会（福岡）
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉２０１８年１１月
竹中陽美、林沙也加、内山秀盛、白谷智宣、古賀貴之、副田二三夫、戸田晶久

（概要）
インフルエンザ患者へのオセルタミビル(OT)投与による異常行動が問題となっているが、その詳細な発生機序は明らかにされていない。そこで、我々はマウスにOT及びその代謝物(OCB)を投与し、脳内のプロスタグランジンE2(PGE2)とそれらの関連性についてアデノシン受容体とドーパミン受容体について検討を行った。その結果、OCBとPGE2における相互作用はアデノシン受容体とドーパミン受容体が関与する可能性が示唆された。

2. The effect of oral administration of cloperastine on micturition reflex in mice

〈主　　催〉第 92 回日本薬理学会年会
〈開 催 場 所〉大阪
〈開催年月日〉２０１９年３月
Kimura I, F.Soeda F, Kudo S, Sato A, Koga T, Misumi S, Takahama K, Toda A.

（概要）

クロペラスチン（CP）（中枢性非麻薬性鎮咳薬）が齧歯動物で尿意機能障害を改善することを明らかにしている。CP の臨床応用が予想されるにもかかわらず、CP の内服が排尿反射に影響を及ぼすかどうかは知られていない。そこで、CP を経口で慢性投与した場合の覚醒時と麻酔下のマウスで、尿意機能を測定した。その結果、覚醒しているマウスにおいて、CP は暗期に、更に、対照群と比較して 24 時間排尿頻度、総排尿量と排尿期間を有意に増加させた。また、麻酔下のマウスにおいて、平均の尿流量は有意に減少した、そして、排尿期間は制御と比較して CP 群が増加する傾向があった。これらの結果は、CP の慢性の内服が、鎮咳薬用量で、マウスで排尿反射に影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

3.　アミノ酸によるアレルギー性皮膚炎抑制作用の系統差への肝臓の寄与の検討

〈主　　催〉日本薬学会第 139 年会
〈開 催 場 所〉千葉
〈開催年月日〉２０１９年３月
古賀貴之、井上貴恵、平山芙香、武田知起、石井祐次、廣村信、副田二三夫、戸田晶久

（概要）

アレルギー性接触皮膚炎(ACD)はアレルギー応答を基盤とする皮膚疾患であり、原因物質との接触により痒みを伴う紅斑や丘疹が惹起される。経口を摂取経路とする新規 ACD 治療法の基礎の構築を目指した検討を実施している。その中で、ddY マウスを用いた 2,4-ジニトロフルオロベンゼン(DNFB)誘導性 ACD モデルマウスにおいて、恒常的なメチオニンの摂取が ACD 発症/進行を有意に抑制することをすでに見出している。本研究ではこれらの背景を基盤とし、新規 ACD 治療法としてのメチオニンの有効性・有用性を追求する一環として、メチオニンによる ACD 発症/進行抑制作用のマウス系統間の差異およびそれに対する肝臓の寄与について検討を行った。

4.　薬物誘発性閉経モデルマウスの排尿機能に対する既存薬の影響

〈主　　催〉フォーラム2019 衛生薬学・環境トキシコロジー
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０１９年８月
田代明寛、副田二三夫、工藤寿未礼、木村一朗、佐藤亜紀、江藤祐里、古賀貴之、戸田晶久

（概要）

4-vinylcyclohexene diepoxide（VCD）投与による閉経モデルマウスは、閉経周辺期以降に失禁様の排尿障害を示すこと、咳誘発物質であるカプサイシンの噴霧により、排尿回数が増加することを見出している。既存の腹圧性尿失禁治療薬である clenbuterol（CLN）を用いて、正常および閉経モデルマウスの排尿機能に対する薬物感受性の有無を検討した。CLN はβ2 受容体作動薬であることから、膀胱平滑筋や外尿道括約筋に発現しているβ2 受容体が CLN により刺激され、排尿筋の弛緩や尿道の収縮が起こり、膀胱内圧の低下などの薬理作用を発現したと考えられる。

5.　アレルギー性皮膚炎による肝臓アミノ酸代謝かく乱のマウス系統差の解析

〈主　　催〉フォーラム2019 衛生薬学・環境トキシコロジー
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０１９年８月
古賀貴之、平山芙香、石井祐次、廣村信、副田二三夫、戸田晶久

（概要）

アレルギー性接触皮膚炎（ACD）はアレルギー応答を基盤とする皮膚疾患であり、原因物質との接触により痒みを伴う紅斑や丘疹が惹起される。原因物質が特定できていない場合や身の回りに原因物質が存在するため接触回避が不可能である場合などには、回避以外の機構に基づく治療法が必要であると考えられる。ACD による肝 Bhmt 抑制作用と血中 IgE 濃度の誘導時期には相関関係が認められなかった。このことから、肝 Bhmt 発現抑制には、病態としての ACD の成立は必須ではないことが示唆された。

6.　IL-6 誘導 JAK-STAT 経路における亜鉛錯体の作用

〈主　　催〉フォーラム2019 衛生薬学・環境トキシコロジー
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０１９年８月
左藤悠、古賀貴之、副田二三夫、田鶴谷(村山)恵子、戸田晶久、廣村信

（概要）

HepG2 細胞（ヒト肝がん細胞株）をモデル細胞として用いた。無血清培地処理した細胞に、Zn(opt)2、Opt、ZnSO4、Insulin、IL-6の処理を行った。薬剤処理後、細胞抽出液を回収し、総タンパク質濃度を Bradford法により算出した。総タンパク質を SDS-ポリアクリルアミドゲルにて分離し、ウェスタンブロット法により、JAK、STAT3またはAKTなどのリン酸化レベルについて検討を行った。その結果、IL-6刺激によるSTAT3のリン酸化は、Zn(opt)2用量依存的に抑制された。一方、ZnSO4 および Opt 前処理における STAT3 のリン酸化抑制は認められなかった。また、IL-6刺激の有無に関わりなく、Zn(opt)2 による

AKTのリン酸化は検出された。Zn(opt)2 前処理では、IL-6刺激によるJAKのリン酸化は検出されなかった。以上の研究結果から、Zn(opt)2の作用序として、JAKのリン酸化抑制であることが判明した。

7.　薬物誘発性閉経モデルマウスの排尿機能に対するエンリッチ環境飼育の影響

〈主　　催〉日本薬学会第140年会
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０１９年９月
副田二三夫、木村一朗、工藤寿未礼、佐藤亜紀、古賀貴之、戸田晶久

（概要）
無麻酔・無拘束下での排尿活動測定の結果、5 週間の環境飼育では、対照(SE)群に比べエンリッチ(EE)群で 24 時間および明期における排尿回数は有意に減少した。15～16 週間の環境飼育においても同様に、SE 群に比べ EE 群で 24 時間および明期における排尿回数は有意に減少した。ロータロッドテストの結果、マウスが落下するまでの潜時は、SE 群に比べ EE 群で有意に延長した。以上の結果から、本研究で作製した EE は、既報と同様の EE 効果を示すことが示唆され、5 週間の環境飼育で検討した閉経周辺期、15～16 週間の環境飼育で検討した閉経後、両方の時期において、EE は閉経モデルマウスの安静期である明期の排尿機能に感受性を示すことが示唆された。

8.　繊維型大麻草主成分カンナビジオール酸による PPARβ/δの機能抑制を介した COX-2 発現低下

〈主　　催〉日本薬学会第140年会
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０２０年３月
平尾雅代、竹田修三、古賀貴之、瀧口益史、戸田晶久

（概要）
機能的COX-2及びPPARβ/δを発現するMDA-MB-231細胞を用いた。MDA-MB-231細胞におけるCOX-2の発現はPPARβ/δを介したシグナル伝達によって正に調節されていることが示唆された。MDA-MB-231細胞の増殖に影響を与えない濃度のCBDAは、PPARα及びPPARγで制御される遺伝子発現には影響を与えず、COX-2の発現のみ抑制した。また、CBDAはGSK0660(PPARβ/δのアンタゴニスト)により発現が低下したCOX-2の発現を濃度依存的にさらに抑制した。即ち、MDA-MB-231細胞では、COX-2の発現はPPARβ/δにより正に調節されており、CBDAはPPARβ/δの機能抑制を介してCOX-2の発現を抑制することが明らかとなった。

9.　IL-6 誘導 JAK-STAT 経路における亜鉛錯体の作用

〈主　　催〉日本薬学会第140年会
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０２０年３月
廣村信、左藤悠、古賀貴之、副田二三夫、戸田晶久、田鶴谷(村山)恵子

（概要）
亜鉛錯体は、血糖降下作用などの抗糖尿病作用を有する金属錯体として研究開発されている。亜鉛錯体により前処理したHepG2 細胞では、IL-6 刺激による JAK および STAT3 のリン酸化抑制が認められた。一方、細胞内亜鉛キレート剤の存在下では、亜鉛錯体による JAK および STAT3 のリン酸化抑制は認められなかった。このことから、亜鉛錯体は、JAK 及び STAT3 のリン酸化を負に制御していることが考えられた。そこで、JAK 及び STAT3 の負の制御因子である SHP に着目したところ、亜鉛錯体により、SHP のチロシンリン酸化が促進していることが判明した。このことから、亜鉛錯体は SHP チロシンリン酸化亢進により負の制御を活性化することで、JAK-STAT3 のリン酸化を抑制していることが考えられた。

10.　メチオニン代謝産物によるアレルギー性皮膚炎抑制作用の検討

〈主　　催〉日本薬学会第140年会
〈開 催 場 所〉京都
〈開催年月日〉２０２０年３月
古賀貴之、廣村信、副田二三夫、石井祐次、戸田晶久

（概要）
2,4-ジニトロフルオロベンゼン（DNFB）誘導による性アレルギー性接触皮膚炎（Allergic contact dermatitis, ACD）モデルマウスについて、メチオニンによるACD症状抑制作用の有無は、マウス系統に依存すること、およびそのマウス系統差は肝Betaine-homocysteine S-methyltransferase（Bhmt）mRNAのACDによる発現抑制の程度と相関することを見出しているが、その因果関係の解明には至っていない。そこで、メチオニンによるACD抑制作用のマウス系統差におけるBhmt発現抑制の寄与について検討を行った。ACDによる肝Bhmt発現抑制が観察されたが、メチオニンによるACD抑制作用は認められなかった。一方、

BHMTにより生成される代謝産物であるDMGは、用量依存的にACD抑制作用を示し、その作用はメチオニン併用で増強された。この結果から、メチオニンによるACD抑制作用の有無のマウス系統差は、ACDによる肝BHMT発現抑制に伴うDMG産生抑制に起因すると推察された。

11. エンリッチ環境飼育マウスの排尿機能に対するテモゾロミドおよびPCPAの影響

〈主　　催〉第 95 回日本薬理学会年会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉２０２２年３月
副田 二三夫、森山 柊樹、古賀 貴之、小武家 優子、戸田 晶久

（概要）
我々は最近、濃縮環境 (EE) がBALB / c雌マウスの排尿頻度と総排尿量を大幅に減少させることを報告した 。この研究では、神経新生阻害剤であるテモゾロミドと、セロトニン合成酵素阻害剤である PCPA (p-クロロフェニルアラニン) が EE のマウスの排尿機能に影響を与えるかどうかを調査した。 テモゾロミドは、BALB/c 雌マウスに毎週 3 日間、合計 6 週間注射され、マウスは、テモゾロミド投与終了の翌日からEEまたは標準環境(SE)で飼育した。 PCPA (100 mg/kg、腹腔内、4 日間投与) は、EE の開始から 22 ～ 23 週の間にマウスに注射した。 ＰＣＰＡ投与の最終日の翌日に、自由に動くマウスの排尿活動を測定した。 明期では、EE は SE と比較して排尿頻度と総排尿量が大幅に減少しました。 テモゾロミドは、明期の EE グループで排尿頻度と総排尿量が有意に増加しました。 暗期では、PCPA は飼育環境に関わらず、総排尿量、平均排尿量、排尿時間、最大排尿量が有意に減少した。 これらの結果は、神経新生が排尿機能に対する濃縮効果に関連している可能性があることを示唆した。

12. 皮膚-肝連関による肝メチオニン代謝酵素Bhmt発現制御へのSelenium binding protein 1 (Selenbp1) の寄与の解析

〈主　　催〉フォーラム 2023：衛生薬学・環境トキシコロジー
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉２０２３年９月
古賀 貴之、廣村 信、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、藤井 由希子、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

（概要）
6 週齢の雄性および雌性 C57BL/6J マウス (野生型、WT)、および C57BL/6J を遺伝的背景にもつ SBP1 欠損マウス (KO) についてメチオニンの影響を検討した。WT マウスでは、ACD により肝 Bhmt の有意な発現低下が観察された。一方、KO マウスでは同様な低下は観察されなかった。これらの結果より、Selenbp1 の欠損は ACD による肝 Bhmt 発現抑制を軽減することが示唆された。一方、メチオニンは ACD 発症/非発症に関わらず、WT および KO マウスのそれぞれにおいて肝 Bhmt 発現量に影響を及ぼさなかった。以上の結果より、上述の Selenbp1 欠損によるメチオニンの ACD 軽減作用の促進は、皮膚-肝連関に基づいた ACD による肝 Bhmt 発現抑制の軽減に起因することが示唆された。また、Selenbp1 の欠損は皮膚-肝連関を抑制する、すなわち Selenbp1 は皮膚-肝連関の制御因子であると推察された。

13. Selenium binding protein 1 (Selenbp1) 欠損による高脂肪食性脂肪肝軽減の機構解析

〈主　　催〉フォーラム 2023：衛生薬学・環境トキシコロジー
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉２０２３年９月
古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、長島 史裕、藤井 由希子、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

（概要）
肝臓のトリグリセリド含量は WT および KO マウスともに対照群と比較して高脂肪食摂餌により有意に増加した。しかし、WT マウスと比較して KO マウスにおけるトリグリセリド含量の増加は緩やかであり、Selenbp1 の欠損は肝臓トリグリセリド含量の増加を有意に軽減した。また、高脂肪食摂餌下における細胞外への脂質排出機構の攪乱のうち、Selenbp1 の欠損は ATP-binding cassette protein a1 (Abca1) の高脂肪食による発現抑制を有意に軽減した。一方、Selenbp1 の欠損は脂肪酸β酸化に関与するカルニチンパルミトイルトランスフェラーゼⅡ (Cpt2) の発現を、高脂肪食摂餌下のみではあるが、有意に増加させた。

14. Selenbp1欠損による果糖誘導性非アルコール性脂肪肝の促進

〈主　　催〉第96回日本生化学会大会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉２０２３年１１月
古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、長島 史裕、戸田 晶久、副田 二三夫

（概要）
NAFLDモデルは6週齢の雄性ならびに雌性のC57BL/6Jマウス（野生型、WT）およびSelenbp1欠損マウス（KO）について、果糖を添加した飲料水（最終濃度; 30 w/v %）を用いて10週間飲水投与を行うことで作成した。投与開始後10週（16週齢）時点において、雌雄ともにWTマウスと比較して、KOマウスで有意なトリグリセリド蓄積の亢進が観察された。また、肝臓脂質代謝の制御に関わる代表的な核内受容体であるPPARについて、その標的遺伝子を指標に各PPARサブタイプの活性化へのSelenbp1欠損の影響を観察したところ、雌雄ともにKOマウスでのみ果糖過剰摂取によるPPARβ/δの標的遺伝子Adrpの発現増加が観察された。一方、PPARαおよびPPARγの標的遺伝子の発現変化について、雌雄に共通して観察されるものはなかった。従って、Selenbp1の欠損は、特にPPARβ/δが関与する機構を介して、果糖過剰摂取による肝臓への脂肪蓄積に対し促進的に寄与すること、およびその作用には顕著な雌雄差はないことが推察された。

15.　果糖過剰摂取による脂肪肝形成の性差への Selenium binding protein 1（Selenbp1）欠損の影響

〈主　　催〉第96回日本生化学会大会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉２０２３年１１月
古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、石井 祐次、平尾 雅代、竹田 修三、石田 卓巳、長島 史裕、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

（概要）
雌雄の WT マウスでは果糖過剰摂取による体重の増加は観察されなかった。しかし、KOマウスでは雌雄ともに果糖過剰摂取による有意な体重の増加が認められた。一方、雌雄ともに、各群の飲水量には有意な差は認められなかった。また、WTおよびKOの雌雄マウス全てにおいて肝臓のトリグリセリド含量を有意に増加させたが、WTマウスと比較して、KOマウスではその増加の程度は雌雄ともに有意に亢進していた。果糖過剰摂取による体重増加がKOマウスでのみ観察されたことから、Selenbp1の欠損は全身レベルでの脂肪の蓄積を亢進している可能性が示唆された。また、果糖過剰摂取による肝臓トリグリセリド蓄積がKOマウスで亢進したことから、Selenbp1の欠損は肝臓への脂質の取り込みを促進していることが示唆された。さらに、脂肪過剰摂取モデルとは異なり、これらの作用には明瞭な雌雄差は認められなかったことから、Selenbp1による肝臓や全身への脂質の蓄積の制御機構は、脂肪過剰摂取や糖質過剰摂取など過剰摂取した栄養素によって異なる可能性が示唆された。

16. 高脂肪食性肥満症へのSelenium binding protein 1　（SBP1）欠損の影響の解析

〈主　　催〉フォーラム 2024：衛生薬学・環境トキシコロジー
〈開 催 場 所〉仙台
〈開催年月日〉２０２４年９月
古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、長島 史裕、藤井 由希子、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

6 週齢の雄性および雌性 C57BL/6J マウス（野生型、WT）、および C57BL/6J を遺伝的背景にもつ SBP1 欠損マウス（KO）について、脂肪含有量が 60 kcal% の高脂肪食を 10 週間与えることで高脂肪食性脂肪肝モデルを作成した。WT マウスでは、雌雄共に高脂肪食による有意な体重の増加が観察された。しかし、KO マウスでは雄性マウスでのみ高脂肪食による体重の増加が観察されたが、雌性マウスでは同様な体重増加は観察されなかった。さらに、雄性 KO マウスにおける体重増加の程度は、雄性の WT マウスと比較して有意に抑制された。また、血清中のレプチン濃度は、上述の体重増加と同様に、雌雄の WT マウス及び雄性の KO マウスでは有意に増加したが、雌性のKOマウスでは有意な増加は観察されなかった。一方、褐色脂肪組織における Uncoupling protein 1（Ucp1）の発現量は、雌性 WT マウスでのみ高脂肪食による有意な発現誘

導が観察された。しかし、雄性 WT マウスならびに雌雄の KO マウスでは同様な発現誘導は観察されなかった。以上の結果より、SBP1 の欠損は高脂肪食による肥満症に抑制的に作用すること、およびその作用は雌性マウスでより顕著であることが明らかになった。また、その作用機構は褐色脂肪組織での Ucp1 を介した熱産生の調節には起因しない可能性が示唆された。

17. 肝臓への脂肪蓄積に対するSelenium binding protein 1 (SBP1) 欠損の影響の性差の解析

〈主　　催〉第41回日本薬学会九州山口支部大会（熊本）
〈開 催 場 所〉熊本
〈開催年月日〉２０２４年１１月
立川怜那、古賀貴之、中島隆博、廣村信、石井裕次、平尾雅代、竹田修三、石田卓巳、小武家優子、戸田晶久、副田二三夫

糖質の過剰摂取による脂肪肝モデルは肥満を伴わない脂肪肝モデルとして汎用されている。本研究においても、高果糖食による体重の変化は雌雄共に、いずれの遺伝子型においても認められなかった。通常食の飼育条件下においては、セレン結合性タンパク質1（Selenium binding protein 1, SBP1)欠損により雄性マウスでのみ肝臓中のトリグリセリド含量が有意に増加し、雌性マウスでは同様な変化は観察されなかった。この結果より、非病態下ではSBP1は肝臓への脂肪の蓄積に対して抑制的に寄与する可能性が示唆された。また、高脂肪食摂餌条件下ではSBP1の欠損は雄特異的に脂肪肝形成を抑制した過去の報告とは異なり、本研究で用いた高果糖食の摂餌モデルにおいては、高果糖食の摂餌による肝トリグリセリド含量の変化は雌雄ともに、いずれの遺伝子型においても観察されなかった。このことから、SBP1は糖質過剰摂取下における糖質から脂質への変換には寄与しない可能性が考えられた。

18. 褐色脂肪組織におけるSelenium binding protein 1 （SBP1）の寄与の解明

〈主　　催〉日本薬学会第145年会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉２０２５年３月
古賀 貴之、廣村 信、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、小武家 優子、藤井 由希子、戸田 晶久、副田 二三夫

16 週齢の雄性および雌性 C57BL/6J マウス（野生型、WT)、および C57BL/6J を遺伝的背景にもつ SBP1 欠損マウス（KO）について、褐色脂肪組織を採取し、熱産生に関与する遺伝子発現量をリアルタイム PCR 法にて測定した。WTマウスにおいてSBP1の発現量は雌雄で同程度であった。一方、褐色脂肪組織における熱産生を制御するUncoupling Protein 1（UCP1）経路へのSBP1欠損の影響には性差があり、雄マウスではUCP1やその発現調節に関与するタンパク質の発現変化は観察されなかったのに対し、雌マウスではUCP1の発現増加が観察された。これらの結果より、SBP1は雌特異的にUCP1に起因する熱産生を抑制する可能性が示唆された。

国内学会発表　他128回(2025年5月現在)

主な社会活動	・日本私立薬科大学協会衛生化学・公衆衛生学教科検討委員会委員	（１９９５年４月～２００５年４月）
	・福岡市学校薬剤師会東支部例会講演（覚せい剤とその関連化合物について）	（２０００年９月）
	・第４回福岡市学校薬剤師学校保健研究大会講演（環境アレルギーについて）	（２００１年２月）
	・福岡市学校歯科医会「例会」講演（環境アレルギーについて）	（２００１年７月）
	・学校薬剤師（玉川小学校）	（２００３年４月～現在に至る）
	・福岡県薬物乱用防止講習会講師団講師	（２００３年４月～現在に至る）
	・福岡市立香椎小学校父母教師会定例勉強会講演（シンナー乱用のおそろしさ、覚せい剤乱用の現状とその対策）	（２００３年１２月）
	・薬学教育協議会・衛生薬学担当教員会議委員	（２００６年４月～２０２１年３月）
	・薬剤師国家試験問題検討委員会（衛生薬学部会）委員	（２００９年１月～２０２１年３月）
	・「児童（6 年生）と行う、シンナー・乱用薬物の断り	（２００９年１月）

	方のロールプレイング」、 ロールプレイングの実施指導、（玉川小学校）	
	・薬物乱用防止啓発キャンペーン＆イベント No Drug, Know Drug～やめよう乱用！正しく学ぼう　くすりの知識～（ブースとステージ）	（２０１０年９月～現在に至る）
	・薬学共用試験センター　薬学共用試験 CBT 試験モニター員	（２００１１年4月～２０１２年3月）
	・Journal of Natural Medicines（J.Nat.Med.）、論文審査員	（２０１２年５月～現在に至る）
	・公私立大学実験動物施設協議会代議員	（２０１３年４月～現在に至る）
	・Journal of Natural Medicines（J.Nat.Med.）、論文審査員	（２０１３年９月～現在に至る）
	・ The Journal of Toxicological Sciences（J.Toxicol.Sci.）、論文審査員	（２０１３年９月～現在に至る）
	・Pharmacology, Biochemistry and Behavior、論文審査員	（２０１４年７月～現在に至る）
	・杉原数美 教授(広島国際大学 薬学部)特別講演、座長（日本薬学会九州支部）	（２０１４年１１月）
	・Dr.J.Douglas Bricker(デュケイン大学 薬学部学部長)特別講演、座長（福岡市薬剤師会、日本薬学会九州支部）	（２０１４年１１月）
	・薬学教育評価員（薬学教育評価機構）（主査、副査）（東京）	（２０１５年４月～２０１７年３月）
	・Journal of Pharmacological sciences、論文審査員	（２０１５年１０月～現在に至る）
	・Drug Design, Development and Therapy、論文審査員	（２０１６年１月～現在に至る）
	・日本法科学技術学会誌、 論文審査員	（２０１６年４月～現在に至る）
	・「N-アセチルグルコサミンの加齢における変動について」、キューサイ（株）、TV 放映	（２０１６年４月～２０１８年６月）
	・第 33 回日本薬学会九州支部大会（鹿児島）、優秀発表賞審査員	（２０１６年１２月）
	・日本高等教育評価員、（日本高等教育評価機構）	（２０１７年４月～２０２０年３月）
	・Neuroscience Letters、論文審査員	（２０１７年７月～現在に至る）
	・フォーラム 2017 衛生薬学・環境トキシコロジー（仙台）、座長	（２０１７年９月）
	・福岡県薬物乱用防止講習会講師団講師、「タバコの害とその正体」講演会、香椎下原小学校	（２０１８年２月）
	・平成 29 年度第 5 回薬学評価委員会（拡大）会議、渋谷（日本薬学会長井記念館 1 階, 薬学教育評価機構）（東京）	（２０１８年２月）
	・第 8 回薬学教育協議会・衛生薬学担当教員会議、ホテル・グランヴェール岐山（岐阜）	（２０１８年２月～３月）
	・九州山口薬学会運営委員会、ホテルセントラーザ博多（福岡）	（２０１８年４月）
	・福岡県薬剤師研修協議会委員	（２０１８年４月～２０２０年３月）
	・福岡赤十字病院倫理委員会 外部評価委員、福岡赤十字病院（福岡）	（２０１８年５月～現在に至る）
	・平成 30 年度第 1 回全国薬科大学長・薬学部長会議、渋谷（日本薬学会長井記念館 1 階、薬学教育評価機構）（東京）	（２０１８年６月）
	・平成 30 年度「文部科学省薬学教育指導者のためのワ	（２０１８年８月）

	ークショップ」、慶応大学薬学部、芝共立キャンパス（東京）	
	・フォーラム 2018 衛生薬学・環境トキシコロジー（佐世保）、実行委員	（２０１８年９月）
	・九州山口薬学会運営委員会、別府国際コンベンションセンター（大分）	（２０１８年１１月）
	・ Journal of Traditional and Complementary Medicine、論文審査員	（２０１９年１月～現在に至る）
	・九州山口薬学会運営委員会、ホテルセントラーザ博多（福岡）	（２０１９年４月）
	・令和元年度薬学教育評価機構総会（日本薬学会長井記念館長井記念ホール）（東京）	（２０１９年６月）
	・令和元年度薬学共用試験センター総会（日本薬学会長井記念館長井記念ホール）（東京）	（２０１９年６月）
	・令和元年度第１回全国薬科大学長・薬学部長会議総会（慶応義塾大学薬学部）（東京）	（２０１９年６月）
	・令和元年度薬学教育協議会総会（慶応義塾大学薬学部）（東京）	（２０１９年６月）
	・令和元年度第２回全国薬科大学長・薬学部長会議総会、東京ガーデンパレス（東京）	（２０１９年１２月）
	・九州薬学会雑誌、論文審査委員	（２０２０年４月～現在に至る）
	・北九州市学校給食調理等業務委託業者選考委員会	（２０２３年１２月～現在に至る）
	・令和５年後期「北九州市民カレッジ」・「大学リレー連携講座」講師 テーマ・内容「自然毒と食中毒」	（２０２４年２月）
所　属　学　会	日本薬学学会	（１９７９年４月～現在に至る）
	日本薬剤師会	（１９８１年４月～現在に至る）
	日本毒性学会	（１９９６年１月～現在に至る）
受　　賞　　歴	福岡市長感謝賞 （15 年永続勤務学校薬剤師功労感謝賞）	（２０１９年１１月）
	令和３年度 福岡市学校保健功労者表彰受賞	（２０２２年１月）
	一般社団法人日本毒性学会 2023 年度ファイザー賞	（２０２３年４月）
	令和５年度学校保健功労賞	（２０２３年１１月）
	一般社団法人日本毒性学会 2025 年度ファイザー賞	（２０２５年４月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

田畑（たばた） 純（まこと） TABATA Makoto 教授

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	［食物栄養学部 食物栄養学科］ ・解剖生理学Ⅰ・Ⅱ ・解剖生理学実習、解剖生理学実験 ・栄養福祉論、基礎生物学 ・管理栄養士演習 IA・IB・II、食センター活動 ・専門ゼミナール、卒論指導 ［食物栄養学部 食環境データサイエンス学科］ ・解剖生理学 ［大学院 健康科学研究科］ ・健康科学特別講義Ⅰ、健康科学研究法特論Ⅰ ・解剖生理学特論Ⅰ・Ⅱ
専門分野	■組織学　（口腔組織学） ■発生学　（両生類の初期発生、歯胚発生、エナメル質形成） ■解剖学　（口腔解剖学、歯の解剖学） ■比較解剖学　（歯の進化と多様性、乳食の仕組みと進化）
最終学歴	広島大学・大学院生物圏科学研究科　博士課程後期　修了
学位	博士（学術）
職歴	○大阪大学 歯学部 助手　（1992 年 5 月～2001 年 6 月） 大阪大学付属歯科技工士学校 非常勤講師（兼任）　（1993 年 4 月～2000 年 6 月） 東洋歯科技工士学校 非常勤講師（兼任）　（1993 年 4 月～2000 年 6 月） ○ヘルシンキ大学 生物化学研究所 在外研究員　（1996 年 10 月～1997 年 9 月） ○鹿児島大学 歯学部 助教授　（2000 年 7 月～2007 年 1 月） 加治木看護専門学校 非常勤講師（兼任）　（2002 年 4 月～2006 年 10 月） ○東京医科歯科大学 歯学部 准教授　（2007 年 2 月～2024 年 3 月） ○九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授　（2024 年 4 月～現在に至る）
教育上の業績	○大阪大学歯学部では、歯の解剖学実習、口腔組織発生学実習を担当した。 同大学院では、6 人の博士課程の院生を指導した。
	○鹿児島大学歯学部では、口腔組織発生学の講義と実習、神経解剖学の実習を担当した。 同大学院では、多数の学位審査を担当した。
	○東京医科歯科大学歯学部では、口腔組織発生学の講義と実習を担当した。 講義においては毎回 130 枚を越えるスライドを用意し、PDF 配布を行った。 同大学院では、多数の学位指導を行い、審査も担当した。 ○多数の教科書を出版。多くは単著または筆頭著者である。（別項にて詳述） 1.「口腔の発生と組織」改訂 5 版　南山堂 2025 2.「口腔の機能と解剖」南山堂 2021 3.「イラストでわかる歯科医学の基礎」改訂 5 版　永末書店 2025 4.「バーチャルスライド口腔組織学」羊土社 2021 5.「あたらしい歯の教科書」池田書店 2022 6.「구강의 발생과 조직」의학교육 2024　（1 の韓国語版） ○多数のソフトウェアを開発し、公開している。（別項にて詳述） ○情報教育も担当しており、「SeaMonkey 教室」などの HP を公開している。（別項にて詳述） ○「喉頭・咽頭の立体紙模型」など 4 種の教材を開発し、頒布している。（別項にて詳述） ○NHK への出演、日本歯科新聞の掲載など、メディア協力も多数。（別項にて詳述） ○九州栄養福祉大学においては、「食材の組織学」をテーマに卒論研究を指導。

主な研究活動	歯胚培養やエナメル芽細胞の初代培養系を用いて、歯の発生のメカニズムを解明するために、さまざまな分子生物学的アプローチと組織学的な解析を行っている。また、歯の起原をさぐるため、魚鱗を使った研究もしており、その派生研究としてシーラカンスの鱗研究、鱗を用いた宇宙実験などもしている。
【学術論文】	1) Tabata MJ, Kawahara A and Amano A: Analysis of the formation of the animal-vegetal axis during Xenopus oogenesis using monoclonal antibodies. Develop Growth Differ, 34: 337 - 345 (1992) 2) 田畑純: アフリカツメガエルの卵形成期にみられる分布特異性細胞質抗原の同定とその解析. 広島大学大学院学位論文 (1992) 3) 田畑純: アフリカツメガエルの卵形成期にみられる分布特異性細胞質抗原の同定とその解析. 広島大学総合科学部紀要IV, 18: 101 - 102 (1992) 4) Wakisaka S, Takikita S, Sasaki Y, Kato J, Tabata MJ and Kurisu K: Cell size-specific appearance of nueropeptide Y in the trigeminal ganglion following peripheral axotomy of different branches of the mandibular nerve of the rat. Brain Res, 620: 347 - 350 (1993) 5) Kato J, Wakisaka S, Tabata MJ, Sasaki Y and Kurisu K: Induction of FOS protein in the rat trigerminal nucleus complex during an experimental tooth movement. Arch Oral Biol, 39: 723 - 726 (1994) 6) Kato J, Wakisaka S, Tabata MJ, Itotagawa T and Kurisu K: Appearance of dynorphin in the spinal trigeminal nucleus complex following experimental tooth movement in the rat. Arch. Oral Biol, 40: 79 - 81 (1995) 7) Tabata MJ, Kim K, Liu JG, Yamashita K, Matsumura T, Kato J, Iwamoto M, Wakisaka S, Matsumoto K, Nakamura T, Kumegawa M and Kurisu K: Hepatocyte growth factor is involved in the morphogenesis of tooth germ in murine molars. Development, 122: 1243 - 1251 (1996) 8) Miyawaki Y, Morisaki I, Tabata MJ, Kurisu K and Wakisaka S: Calbindin D28k-like immunoreactivity in the gustatory epithelium in the rat. Neurosci Lett, 214: 29 - 32 (1996) 9) Tabata MJ, Matsumura T, Liu JG, Wakisaka S and Kurisu K: Expression of cytokeratin 14 in ameloblasts-lineage cells of developing tooth of rat, both in vivo and in vitro. Arch. Oral Biol, 41: 1019 - 1027 (1996) 10) Miyawaki Y, Morisaki I, Tabata MJ, Maeda T, Kurisu K and Wakisaka S: Calbindin D28k-like immunoreactivity in the developing and regenerating circumvallate papilla of the rat. Cell Tissue Res, 291: 81 - 90 (1998) 11) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Matsumura T, Iwamoto M and Kurisu K: Developmental role of PTHrP in murine molars. Eur J Oral Sci, 106(s1): 143 - 146 (1998) 12) Jikko A, Yamashita K, Iwamoto M, Hiranuma H, Takebayashi T, Maeda T, Sakuda M, Matsumoto K, Nakamura T, Enomoto-Iwamoto M, Tabata MJ, Fuchihata H and Kurisu K: The role of hepatocyte growth factor in growth plate cartilage. J Bone Mineral Res, 16: 170 - 177 (1998) 13) Matsumura T, Tabata MJ, Wakisaka S, Sakuda M and Kurisu K: Ameloblast-lineage cells of rat tooth germs proliferate and scatter in response to hepatocyte growth factor in culture. Intn J Develop Biol, 42: 1137 - 1142 (1998) 14) Wakisaka, S, Tabata, MJ, Maeda, T, Matsumoto K, Wanaka A, Muramatsu H, Muramatsu T, Kurisu K: Immunohistochemical localization of pleiotrophin and midkine in the lingual epithelium of the adult rat Arch Histol Cytol. 61 (5): 475-480 (1998) 15) Ohnishi T, Ooshima T, Sobue S, Tabata MJ, Maeda T, Kurisu K and Wakisaka S: Immunohistochemical localization of calbindin D28k during root formation of rat molar teeth. Cell Tissue Res, 297: 503 - 512 (1999) 16) Pispa J, Jung HS, Jernvall J, Kettunen P, Mustonen T, Tabata MJ, Kere J and Thesleff I: Cusp patterning defect in Tabby mouse teeth and its partial rescue by FGF. Develop Biol 216: 521 - 534 (1999) 17) Ohnishi T, Ooshima T, Sobue S, Tabata MJ, Kurisu K and Wakisaka S: Calbindin D28k-like immunohistoreactivity during the formation of the enamel-free ared in the rat molar teeth. Aant Record, 258: 384 - 390 (2000) 18) Liu JG, Tabata MJ, Fujii T, Ohmori T, Abe M, Ohsaki Y, Kato J, Wakisaka S, Iwamoto M, Kurisu K:

Parathyroid hormone-related peptide is involved in protection against invasion of tooth germs by bone via promoting the differentiation of osteoclasts during tooth development. Mech Dev 95: 189 - 200 (2000)

19) Tabata MJ, Fujii T, Liu J-G, Ohmori T, Abe M, Wakisaka S, Iwamoto M, and Kurisu K: Bone morphogenetic protein 4 is involved in cusp formation in molar tooth germ of mice. Eur. J. Oral Sci. 110: 114-120 (2002)

20) Ogi H, Tabata MJ, Yamanaka A, Yasui K, and Uemura M: Comparison of expression patterns of fibroblast growth factor 8, bone morphogenetic protein 4, and sonic hedgehog in jaw development of the house shrew, Suncus murinus. Cellular Molecular Biol. 48: OL289-OL296 (2002)

21) Abe M, Tamamura Y, Yamagishi H, Maeda T, Kato J, Tabata MJ, Srivastava D, Wakisaka S, and Kurisu K: Tooth-type specific expression of dHAND/Hand2: possible involvement in murine lower incisor morphogenesis. Cell Tissue Res 310:201-212 (2002)

22) Shibaguchi T, Kato J, Abe M, Tamamura Y, Tabata MJ, Liu J-G, Iwamoto M, Wakisaka S, Wanaka A, and Kurisu K: Expression and role of Lhx8 in murine tooth development. Arch. Histol. Cytol. 66:95-108 (2003)

23) Tabata MJ, Matsumura T, Fujii T, Abe M, and Kurisu K: Fibronectin accelerate the growth and the differentiation of ameloblast-lineage cells in vitro. J. Histochem. Cytochem. 51:1673-1679 (2003)

24) Fujiwara N, Tabata MJ, Endoh M, Ishizeki K, and Nawa T: Insulin-like growth factor-I stimulates cell proliferation in the outer layer of Hertwig's epithelial root sheath and elongation of the tooth root in mouse molars in vitro. Cell Tissue Res. 320:69-75 (2005)

25) Yoshikubo H, Suzuki N, Takemura K, Hoso M, Yashima S, Iwamuro S, Takagi Y, Tabata MJ, and Hattori A: Osteoblastic activity and estrogenic response in the regenerating scale of goldfish, a good model of osteogenesis. Life Sci. 76:2699-2709 (2005)

26) Suzuki N, Tabata MJ, Kambegawa A, Srivastav AK, Shimada A, Takeda H, Kobayashi M, Wada S, Katsumata T and Hattori A: Tributyltin inhibits osteoblastic activity and disrupts calcium metabolism through an increase in plasma calcium and calcitonin levels in teleosts. Life Sci., 78: 2533 - 2541 (2006)

27) 鈴木信雄, 北村敬一郎, 根本鉄, 清水宣明, 和田重人, 近藤隆, 井尻憲一, 田畑純, 新実信夫, 服部淳彦:超音波刺激による骨形成促進作用:魚類のウロコのアッセイ系を用いた骨芽及び破骨細胞の解析. 第15回ソノケミストリー討論会講演論文集, 3-4 (2006)

28) 田畑純, 小椋幹記, 竹原重信, 五月女さき子、瀬戸口尚志, 宮脇正一:ローカル・エリア・ネットワーク(LAN)を利用して同期と制御を行うOSCE進行プログラム"Dolphin". 歯科医学教育学会誌 22(3): 289-295 (2006)

29) 宮脇正一, 小椋幹記, 瀬戸口尚志, 小山徹, 西原一秀, 吉田礼子, 坂口勝義, 田畑純, 五月女さき子, 石神哲郎, 川島清美, 佐藤強志, 重田浩樹, 西恭宏, 徳田 雅行, 志野久美子, 鳥居光男, 宮脇正一:ITの活用と導線の工夫などによる客観的臨床能力試験(OSCE)の新たな人的資源削減の試みとその効果 ; 日本歯科医学教育学会雑誌,23(1),56-64 (2007)

30) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 清水宣明, 田畑純, 池亀美華, 中村正久, 近藤隆, 松田恒平, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬睦, 服部淳彦:魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究. Space Utiliz. Res. 23: 318-321 (2007)

31) Uemura M, Sonomura T, Yamanaka A, Tabata MJ, and Nakashima M: Topographical representation of motoneurons innervating the transverse mandibular muscle in the trigeminal motor nucleus, with special reference to rats, J. Oral Biosci. 49(2): 136-142 (2007)

32) Suzuki N, Kitamura K, Nemoto T, Shimizu N, Wada S, Kondo T, Tabata MJ, Sodeyama F, Ijiri K, and Hattori A.: Effect of vibration on osteoblastic and osteoclastic activities: Analysis of bone metabolism using goldfish scale as a model for bone. Adv. Space Res. 40(11): 1711-1721 (2007)

33) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 清水宣明, 田畑純, 池亀美華, 中村正久, 近藤隆, 松田恒平, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬睦, 久保田幸治、奈良雅之、服部淳彦:疑似微小重力及び過重力下における骨代謝制御:培養ウロコを用いた解析. Space Utiliz. Res. 24: 230-233 (2008)

34) 鈴木信雄, 清水宣明, 北村敬一郎, 根本 鉄, 染井正徳, 池亀美華, 和田重人, 近藤 隆, 大森克徳, 中村正久, 井尻憲一, 田畑 純, 服部淳彦:物理的刺激に対する骨芽細胞・破骨細胞の

応答：魚類のウロコを骨のモデルとした骨代謝の解析．日本生体電気・物理的刺激研究会誌, 22, 31-37, (2008).

35) Li Y, Nakayama H, Notani T, Ahmad M, Tabata MJ, and Takano Y: Phosphatase actions at the site of appositional mineralization in bisphosphonate-affected bones of the rat. J. Med. Dent. Sci., 55, 255-265 (2008)

36) Suzuki N, Omori K, Nakamura M, Tabata MJ, Ikegame M, Ijiri K, Kitamura K, Shimizu N, Kondo T, Matsuda K, Ando H, Kasahara H, Nagase M, Nara M, and Hattori A: Scale osteoblasts and osteoclasts sensitively respond to low-gravity loading by centrifuge. Biol. Sci. Space, 22, 3-7 (2008)

37) Suzuki N, Hayakawa K, Kameda T, Triba A, Tang N, Tabata MJ, Takada K, Wada S, Omori K, Srivastav AK, and Hattori A : Monohydroxylated polycyclic aromatic hydrocarbons inhibit both osteoclastic and osteoblastic activities in teleost scales. Life Sci., 84: 482-488 (2009)

38) 鈴木信雄, 田畑 純, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 染井正徳, 池亀美華, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 奈良雅之, 服部淳彦：魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究：宇宙実験に適したウロコの培養法の検討. Space Utiliz. Res., 25, 166-169 (2009)

39) Nakayama H, Takakuda K, Matsumoto HN, Miyata A, Baba O, Tabata MJ, Ushiki T, Oda T, McKee MD, Takano Y: Effects of altered bone remodeling and retention of cement lines on bone quality in osteopetrotic aged c-*src*-deficient Mice. Calcif Tissue Int, 86(2):172-83 (2009)

40) Notani T, Tabata MJ, Iseki H, Baba O, Takano Y: Introduction of a three-dimensional and layered (TDL) culture, a novel primary co-culture method for ameloblasts and pulp-derived cells. Arch. Histol. Cytol. 72: 187-198 (2009)

41) Suzuki N, Kitamura K-I, Omori K, Nemoto T, Satoh Y, Tabata MJ, Ikegame M, Yamamoto T, Ijiri K, Furusawa Y, Kondo T, Takasaki I, Tabuchi Y, Wada S, Shimizu N, Sasayama Y, Endo M, Takeuchi T, Nara M, Somei M, Maruyama Y, Hayakawa K, Shimazu T, Shigeto Y, Yano S, Hattori A: Response of osteoblasts and osteoclasts in regenerating scales to gravity loading. Biol. Sci. Space, 23(4) in press

42) 鈴木信雄, 田畑 純, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 笹山雄一, 染井正徳, 池亀美華, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 江尻貞一, 小萱康徳, 前田斉嘉, 内田秀明, 田谷敏貴, 林明生, 中村貞夫, 杉立久仁代, 芹野武, 奈良雅之, 服部淳彦：魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究：魚類のウロコにおけるホルモン応答. Space Utiliz. Res., 26, 210-213 (2010)

43) 三島弘幸、北原正大、服部淳彦、鈴木信雄、田畑 純、奈良雅之、筧 光男、見明康夫：歯の象牙質における成長線の周期性と生物リズムとの関連：メラトニンによる調節の可能性. 比較内分泌学 36, 106-112 (2010)

44) 鈴木信雄, 北村敬一郎, 清水宣明, 染井正徳, 笹山雄一, 大森克徳, 矢野幸子, 重藤祐子, 谷垣文章, 鈴木ひろみ, 嶋津 徹, 池亀美華, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 近藤 隆, 遠藤雅人, 中村正久, 井尻憲一, 田畑 純, 奈良雅之, 服部淳彦：魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究, 平成22年度JAROS宇宙環境利用の展望, 第2章: 1-13 (2011)

45) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 笹山雄一, 染井正徳, 池亀美華, 田畑 純, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 土屋美和, 谷川直樹, 吉馴重徳, 大嶋一成, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 江尻貞一, 小萱康徳, 前田斉嘉, 内田秀明, 田谷敏貴, 林 明生, 中村貞夫, 杉立久仁代, 芹野 武, 嶋津徹, 矢野幸子, 奈良雅之, 服部淳彦：魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究：ウロコ及び頭蓋骨に対する重力応答. Space Utilization Res., 27: 209-212 (2011)

46) 鈴木信雄、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、根本 鉄、清水宣明、笹山雄一、西内 巧、染井正徳、池亀美華、田畑 純、中村正久、近藤 隆、古澤之裕、松田恒平、田渕圭章、高崎一朗、和田重人、安東宏徳、笠原春夫、永瀬 睦、久保田幸治、土屋美和、谷川直樹、吉馴重徳、大嶋一成、鈴木 徹、遠藤雅人、竹内俊郎、江尻貞一、小萱康徳、佐藤和彦、渡邊竜太、森部絢嗣、三島弘幸、前田斉嘉、内田秀明、田谷敏貴、林明生、中村貞夫、杉立久仁代、芹野 武、嶋

津 徹、矢野幸子、関 あずさ、舟橋久幸、奈良雅之、服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究:新規メラトニン誘導体のウロコ及び骨疾患ラットの骨代謝に対する作用. 第28回宇宙利用シンポジウムSpace Utilization Res., 28: XXX-XXX (2012)

47) Atukorala AD, Inohaya K, Baba O, Tabata MJ, Ratnayake RA, Abduweli D, Kasugai S, Mitani H, Takano Y.: Scale and tooth phenotypes in medaka with a mutated ectodysplasin-A receptor: implications for the evolutionary origin of oral and pharyngeal teeth. Arch Histol Cytol. 2010;73(3):139-48.

48) Suzuki N, Danks JA, Maruyama Y, Ikegame M, Sasayama Y, Hattori A, Nakamura M, Tabata MJ, Yamamoto T, Furuya R, Saijoh K, Mishima H, Srivastav AK, Furusawa Y, Kondo T, Tabuchi Y, Takasaki I, Chowdhury VS, Hayakawa K, Martin TJ.: Parathyroid hormone 1 (1-34) acts on the scales and involves calcium metabolism in goldfish. Bone. 2011 May 1;48(5):1186-93.

49) Ahmad M, Iseki H, Abduweli D, Baba O, Tabata MJ, Takano Y.: Ultrastructural and histochemical evaluation of appositional mineralization of circumpulpal dentin at the crown- and root-analog portions of rat incisors. J Electron Microsc (Tokyo). 2011;60(1):79-87. 2010-Oct /2011年2月

50) Ratnayake A.R.K. Ratnayake, Dawud Abduweli, Seong-Suk Jue, Otto Baba, Makoto J. Tabata, Kaj Josephsen, Ole Fejerskov, Yoshiro Takano: Organic Anion Transport in during Rat Enamel Formation. J Oral Biosci (2013) 55: 40-46. 2013-Feb

51) Baba O, Ota MS, Terashima T, Tabata MJ, Takano Y.: Expression of transcripts for fibroblast growth factor 18 and its possible receptors during postnatal dentin formation in rat molars. Odontology. 2013 Dec 28. [Epub ahead of print] 2014-Jan

52) Abduweli D, Baba O, Tabata MJ, Higuchi K, Mitani H, Takano Y.: Tooth replacement and putative odontogenic stem cell niches in pharyngeal dentition of medaka (Oryzias latipes). Microscopy (Oxf). 63(2):141-53. doi: 10.1093/jmicro/dft085. Epub 2014 Jan 23. (2014)

53) Ijbara M, Wada K, Tabata MJ, Wada J, Inoue G, Miyashin M. Enamel Microcracks Induced by Simulated Occlusal Wear in Mature, Immature, and Deciduous Teeth. Biomed Res Int. 16;2018:5658393. doi: 10.1155/2018/5658393. eCollection (2018).

54) Fukuba S, Akizuki T, Hoshi S, Matsuura T, Shujaa Addin A, Okada M, Tabata Y, Matsui M, Tabata MJ, Sugiura-Nakazato M, Izumi Y., Comparison between different isoelectric points of biodegradable gelatin sponges incorporating β-tricalcium phosphate and recombinant human fibroblast growth factor-2 for ridge augmentation: A preclinical study of saddle-type defects in dogs. J Periodontal Res. 54(3): 278-285. doi: 10.1111/jre.12628. Epub 2018 Nov 25. (2019)

55) Ikegame M, Hattori A, Tabata MJ, Kitamura K, Tabuchi Y, Furusawa Y, Maruyama Y, Yamamoto T, Sekiguchi T, Matsuoka R, Hanmoto T, Ikari T, Endo M, Omori K, Nakano M, Yashima S, Ejiri S, Taya T, Nakashima H, Shimizu N, Nakamura M, Kondo T, Hayakawa K, Takasaki I, Kaminishi A, Akatsuka R, Sasayama Y, Nishiuchi T, Nara M, Iseki I, Chowdhury VS, Wada S, Ijiri K, Takeuchi T, Suzuki T, Ando H, Matsuda K, Somei M, Mishima H, Mikuni-Takagaki Y, Funahashi H, Takahashi A, Watanabe Y, Maeda M, Uchida H, Hayashi A, Kambegawa A, Seki A, Yano S, Shimazu T, Suzuki H, Hirayama J, Suzuki N. Melatonin is a potential drug for the prevention of bone loss during space flight. J. Pineal Res. (2019)

56) Inagaki Y, Ogawa T, Tabata MJ, Nagata Y, Watanabe R, Kawamoto T, Moriyama K, Tanaka T: Identification of OPN3 as associated with non-syndromic oligodontiain a Japanese population. Journal of Human Genetics (2021) 66:769–775 https://doi.org/10.1038/s10038-021-00903-3

57) Ishihara S,Usumi-Fujita R , Kasahara Y , Oishi S , Shibata K , Shimizu Y , Ishida Y, Kaneko S, Sugiura-Nakazato M, Tabata MJ, Hosomichi J , Taniyama Y, Ono T, Periostin splice variants affect craniofacial growth by influencing chondrocyte hypertrophy. J Bone Miner Metab. 2023 Mar;41(2):171-181. doi: 10.1007/s00774-023-01409-y. Epub 2023 Mar 1.

58) Iwasaki T, Takahara N, Duc VV, Tomomatsu N, Tabata MJ, Yoda T. Effect of anterior disc displacement and estrogen deficiency on rabbit mandibular condyle. J Oral Biosci. 67(1):100599 (2025). doi: 10.1016/j.job.2024.100599. Epub 2024 Dec 14.

【総　説】

1) 栗栖浩二郎, 岩本容泰, 田畑純: アンチセンスオリゴDNAによる細胞機能の解析. ブレインサイエンス, 7: 81 - 89 (1996)
2) Kurisu, K. and Tabata MJ: Human genes for dental anomalies. Oral Dis, 3: 223 - 228 (1997)
3) 栗栖浩二郎, 田畑純: 歯の形成異常をもたらす遺伝性疾患とその原因遺伝子. 解剖誌, 73: 201 - 208 (1998)
4) 田畑純, 栗栖浩二郎: 歯の発生におけるアポトーシス. The Bone, 13: 81 - 88 (1999)
5) 田畑純, 栗栖浩二郎: アンチセンス法と器官培養法による歯胚発生の研究へのアプローチ. Arch. Comp. Biol. Tooth Enamel, 6: 19 - 33 (1999)
6) 田畑純, 劉継光, 大盛朝玄, 藤井隆文, 岩本容泰, 栗栖浩二郎: 歯の発生に関与する遺伝子とその役割. 咀嚼誌 9: 43 - 49 (2000)
7) 田畑純, 阿部真土, 玉村禎宏, 栗栖浩二郎: 歯の形態形成遺伝子とその異常. 現代医療 32: 1983 - 1991 (2000)
8) 栗栖浩二郎, 劉継光, 田畑純: マウス歯胚の発生における副甲状腺ホルモン関連ペプチド(PTHrP)の役割. 解剖誌, 75: 371 - 375 (2000)
9) 田畑純, 松村達志, 栗栖浩二郎: エナメル芽細胞の初代培養法. Arch. Comp. Biol. Tooth Enamel, 7: 23-32 (2000)
10) 田畑純: エナメル質形成の細胞生物学.　鹿大歯学部紀要, 22: 33-40 (2002)
11) 田畑純: 歯の発生初期の分子機構. Clinical Calcium, 13:628-633 (2003)
12) 田畑純: 外胚葉異形成症の原因遺伝子と歯の発生における役割.　鹿大歯学部紀要, 24: 53-61 (2004)
13) 田畑純, 近藤信太郎:咬頭はどのようにしてできるのか　―歯の発生・変異・進化と分子メカニズムからの考察―.　Anthropol. Sci., 114: 57-62（2006）
14) 鈴木信雄、田畑純、和田重人、服部淳彦:魚のウロコを用いた新しい骨モデル系の開発と歯科医療への応用.　デンタル・ダイヤモンド 2006年10月号74-79 (2006)
15) 田畑純、鈴木信雄、服部淳彦:魚鱗:硬組織研究と再生研究のフロンティア.　細胞 39: 55-57 (2007)
16) 鈴木信雄、清水宣明、北村敬一郎、根本鉄、染井正徳、池亀美華、和田重人、近藤隆、大森克徳、中村正久、井尻憲一、田畑純、服部淳彦:物理的刺激に対する骨芽細胞・破骨細胞の応答:魚類のウロコを骨のモデルとした骨代謝の解析.　日本生体電気・物理的刺激研究会誌, 21: 31-37 (2008)
17) 田畑　純:　シーラカンスのウロコと小歯構造の謎.　遺伝　68:238-244　(2014)
18) 田畑純、杉浦真琴、牛村英里.　顎の進化を考える―ヒトとサメの比較から―　赤ちゃん歯科ネットワーク, 3; 57-69 (2017)
19) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第1回　子：木の実を囓る.　歯界展望, 130(4): 773-779 (2017)
20) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第2回　丑：草を喰む.　歯界展望, 130(5): 1005-1009 (2017)
21) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第3回　寅：肉を食らう.歯界展望, 130(6): 1213-1218 (2017)
22) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第4回　卯：重歯で咀む.歯界展望, 131(1): 177-181 (2018)
23) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第5回　辰：究極の歯.歯界展望, 131(2): 383-389 (2018)
24) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第6回　巳：獲物は丸呑み.歯界展望, 131(3): 573-579 (2018)
25) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第7回　午：歯の皺を読む.歯界展望, 131(4): 773-779 (2018)
26) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第8回　未：毛と角のはなし.歯界展望, 131(5): 1025-1031 (2018)
27) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第9回　申：手を使う.歯界展望, 131(6): 1247-1253 (2018)
28) 田畑純.　新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり.　第10回　酉：嘴で啄む.歯界展

望, 132(1): 197-202 (2018)
29) 田畑純. 新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第11回 戌：牙と爪で闘う.歯界展望, 132(2): 421-427 (2018)
30) 田畑純. 新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第12回 亥：まるで十徳ナイフ.歯界展望, 132(3): 561-567 (2018)
31) 田畑純. 新十二歯考：十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第13回 人：おいしく食べる.歯界展望, 132(4): 737-746 (2018)
32) 田畑純、坂口もも子、牛村英里、杉浦真琴. 四大組織の発生学. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 4; 24-32 (2018)
33) 石田房枝、角田佳折、田畑純. 臨床の Question, 基礎のAnswer. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 4; 33-41 (2018)
34) 田畑純、角田佳折「立体紙模型で学ぶ喉頭と咽頭のかたち」小児歯科臨床 23(12): 86-89 (2018)
35) 角田佳折、田畑純. 喉頭・咽頭の機能解剖学. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 33-41 (2019)
36) 田畑純、山本智子、角田佳折. 喉頭・咽頭の立体紙模型. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 47-53 (2019)
37) 田畑純、角田佳折、杉浦真琴. 臨床の Question, 基礎のAnswer その２. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 54-63 (2019)
38) 坂口もも子、田畑純. 新生児における口蓋のかたちと大きさ［古典論文 M.F.Ashley-Montagu, The form and dimensions of the palate in the newborn, Intn. J Orthodontia and Dentistry for Children 20(8):810-827 (1934) の翻訳］. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 79-87 (2019)
39) 田畑純. 舌の発生と構造：向井の術式を考える. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 6-13 (2020)
40) 田畑純. 舌癒着症の症状と術式についての解剖学的な考察. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 32-38 (2020)
41) 角田佳折、田畑純. 口蓋の機能解剖学. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 41-49 (2020)
42) 坂口もも子、田畑純. 新生児における上下顎歯槽堤の咬合関係の多様性［古典論文 L.Clinch, Variations in the mutual relationshipso fhte maxillary and mandibular gum pads in the newborn child, Intn, J. Orthodontia and Dentistry for Children 20(4): 359-374 (1934) の翻訳］.赤ちゃん歯科ネットワーク, 6: 90-101 (2020)
43) 田畑 純. 無歯期の意味を考える～進化と解剖の視点から. 小児歯科臨床. 2020.12; 25 (12): 66-71.

【著 書】

学術書だけでなく、音楽、写真などで多数の著書がある。研究以外の著書、ソフトウェア開発、Webサイトでは、田畑休八という名義を使っている。著書のみあげる。（一部再掲）

1) 口腔の発生と組織 第2版, 共著, 南山堂, 東京 (1998)
2) 田畑休八：ムソルグスキー. In「クラシックCD 異稿・編曲の楽しみ」青弓社 (2008)
3) 鈴木信雄、田畑純、服部淳彦：キンギョ. 鈴木範男編 「身近な動物を用いた実験 1」, 三共出版, 東京 (2009)
4) 二村正之. 「ニッポン時空写真館」 誠文堂新光社 （2010）（写真を多数提供）
5) 田畑純：遺伝子から見た歯の進化. 後藤仁敏、大泰司紀之、田畑純、花村肇、佐藤巌編 「歯の比較解剖学 第2版」、医歯薬出版、東京 (2014)
6) 田畑純：歯のデザインを決めるもの. 葛西一貴, 近藤信太郎編 「歯科に役立つ遺伝学」 わかば出版, 東京 (2014)
7) 田畑純（編著）「口腔の発生と組織 改訂3版」, 南山堂, 東京 (2015)
8) 田畑純：口腔と歯の発生. 渕端孟, 祖父江鎮雄,西村康,村上秀明監修 「イラストでわかる歯科医学の基礎 第3版」 永末書店, 京都 (2016)
9) 田畑純「喉頭・咽頭の立体紙模型」オフィスTB, （2018）
10) 田畑純（単著）「口腔の発生と組織 改訂4版」南山堂, 東京 (2019)
11) 田畑純（単著）「新・十二歯考：十二支でめぐる歯の比較解剖学」 医歯薬出版, 東京 （2020）
12) 田畑純、遠藤雅人、塩栗大輔、安川雄一郎、栗山武夫、森本元 「鱗の博物誌」 グラフィック

社, 東京（2020）

13) 田畑純: 口腔と歯の発生. 村上秀明・天野修監修「イラストでわかる歯科医学の基礎 第4版」永末書店, 京都 (2021)

14) 田畑純、角田佳折「口腔の機能と解剖」南山堂, 東京 (2021)

15) 田畑純、杉浦真琴「バーチャルスライド口腔組織学」羊土社, 東京 (2021)

16) 東京医科歯科大学・最先端口腔科学・研究推進プロジェクト「新しい歯の教科書」池田書店, 東京 (2022)

17) 「구강의 발생과 조직」의학교육 2024 （10の韓国語版）

18) 二村正之. 「昭和初期↔平成・令和 日本定点写真紀行 東日本編」 国書刊行会（2024）（写真を多数提供）

19) 二村正之. 「昭和初期↔平成・令和 日本定点写真紀行 西日本編」 国書刊行会（2024）（写真を多数提供）

20) 田畑純: 口腔と歯の発生. 村上秀明・天野修ほか監修「イラストでわかる歯科医学の基礎 第5版」 永末書店, 京都 (2025)

21) 田畑純（単著）「口腔の発生と組織 改訂5版」南山堂, 東京 (2025)

【シンポジウム】

＜国際学会＞

1) Tabata MJ: In vitro study of tooth morphogenesis using antisense techniques. *80th General session of the IADR (Makuhari, Japan)*, June, 2001 （IADR=国際歯科医学会）

2) Tabata MJ, Uemura M: Molecular patterning of tooth arch formation during the development of house shrew, *Suncus murinus*. *16th Intn Congress of the IFAA (Kyoto, Japan)*, Aug, 2004 （IFAA=国際解剖学会）

3) Fujiwara N, Tabata MJ, Nawa T: The cell dynamics in tooth root formation: Hertwig's epithelial root sheath and cellular cementogenesis. *Intn. Sympo. of Maxillofacial & Oral Regenerative Biol.* (Okayama, Japan), Sept, 2005

4) Kitamura K, Suzuki N, Nemoto T, Shimizu N, Tabata MJ, Wada S, Omori K, Nakamura M, Kondo T, and Hattori A: Effects of low-intensity ultrasound on bone metabolism in goldfish scale. Internat. Symposium of Sonochemistry Sonoprocessing (Kyoto, 2007), July 2007

＜国内学会＞

1) 田畑純, 久米川正好: 歯胚におけるHGFの発現と形態形成. 第100回日本解剖学会総会・ミニシンポジウム12, (東京・東京大学) 1995年4月1日

2) 田畑純: 歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 日本解剖学会関東地方会第5回懇話会（横須賀・神奈川歯科大学）1995年6月17日

3) 田畑純: 歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 第38回歯科基礎医学会学術大会・歯科基礎医学会賞受賞講演（横須賀）1996年10月12日

4) 田畑純: 歯の発生に関与する遺伝子とその役割. 第10回日本咀嚼学会総会・シンポジウムⅡ（東京）1999年9月2日

5) 田畑純、栗栖浩二郎: 歯の発生に関与する遺伝子とその役割. 第41回歯科基礎医学会総会・シンポジウムⅡ（東京・日本歯科大学）1999年9月

6) 田畑純: 歯の形態発生の分子機構. 第105回日本解剖学会総会・シンポジウム4（横浜・横浜パシフィコ）2000年4月

7) 田畑純、劉継光、栗栖浩二郎: 歯胚のPTHrPは破骨細胞の形成を促進し、歯槽骨の侵入を阻止する. 第106回日本解剖学会総会・シンポジウム13（高知・高知医科大学）2001年4月

8) 田畑純: マウス歯胚の器官培養とアンチセンス法の応用. 第43回歯科基礎医学会・ミニシンポジウム2（大宮・ソニックシティ）2001年9月 ［オーガナイザーと座長も務める］

9) 田畑純、植村正憲: *In vitro* におけるエナメル芽細胞の増殖と分化. 第45回日本組織細胞化学会・ワークショップ（鹿児島・県民文化センター）2004年10月

10) 田畑純: 咬頭形成の分子メカニズム. 第59回日本人類学会・シンポジウム（横浜・横浜市開港記

念会館）2005年11月

11) 田畑純：歯と骨とウロコの話 －魚鱗の再生過程で見られる組織構築を中心に－．第48回歯科基礎医学会・シンポジウム（横浜・鶴見大学）2006年9月

12) 田畑純：初代培養とTDL培養を用いた歯胚上皮細胞の分化機構の解析：よく動き、形を変える細胞たち．第42回日本臨床分子形態学会総会・学術大会・ワークショップ（三島・東レ総合研修センター）2010年9月

13) 田畑 純：硬組織の多様性と共通性: シーラカンスとキンギョのウロコの組織解析．第53回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム10（岐阜市）2011年9月

14) 池亀美華、服部淳彦、丸山雄介、北村敬一郎、田畑 純、井関八郎、矢野幸子、田渕圭章、山本敏男、鈴木信雄：微小重力に対するウロコの破骨細胞の応答：国際宇宙ステーションにおける宇宙実験．第53回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム10（岐阜市）2011年9月

15) 田畑 純：魚類のウロコ－歯の起源を考える．第119回日本解剖学会・全国学術集会（自治医大、下野市）2014年3月［オーガナイザーと座長も務める］

16) 田畑 純： シーラカンス・ウロコの小歯構造の謎－歯の起源を考える．第56回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム6（福岡市）2014年9月 ［オーガナイザーと座長も務める］

17) 田畑 純： 天野先生のキセキ．天野先生を偲ぶ会（東広島市・広島大学） 2015年3月15日

18) 田畑 純： 象牙質の進化と歯の進化．第57回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム1（新潟市）2015年9月 ［オーガナイザーと座長も務める］

19) 田畑 純、杉浦真琴、山本智子：歯の多様性を考える ～標本整理報告と「新十二歯考」の予告をかねて．日本解剖学会・第27回関東支部懇話会（昭和大学） 2017年7月15日

20) 田畑 純： キンギョ再生鱗を用いた宇宙実験 ～微小重力下における破骨細胞の素顔～．第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会（東京歯科大）2018年8月

21) 田畑純、牛村英里、笹川一郎：エナメロイドの組織学：魚類の歯に見られる光沢層の形成過程とその特殊性．第124回日本解剖学会総会・全国学術集会（新潟）シンポジウム 2019年3月28日

22) 田畑純 ： 赤ちゃんの口と乳食の進化： 比較形態学の視点から．第68回歯科基礎医学会・アップデートシンポジウム11（東京・お茶の水） 2023年9月18日 ［オーガナイザーと座長も務める］

【学会発表】

＜国際学会＞

1) Kim K, Tabata MJ, Liu JG, Iwamoto M, Nakamura T and Kurisu K: Hepatocyte growth factor participates in the morphogenesis of tooth. *73rd General Session of IADR (Singapore)*, June, 1995

2) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Iwamoto M and Kurisu K. Involvement of parathyroid hormone-related peptide (PTHrP) in the development of mouse tooth germ. *1st Japan-China Symposium of Anatomy (Toyonaka)*, November, 1995

3) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Matsumura T, Iwamoto M and Kurisu K. Parathyroid hormone-related peptide (PTHrP) is essential in the development of murine molars. *10th Intn. Congress of Hisochemistry and Cytochemistry (Kyoto)*, August, 1996

4) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Matsumura T, Fujii F, Ohmori T, Shibaguchi T, Iwamoto M and Kurisu K: Role of PTHrP in the development of murine molars. *75th General Session of IADR (Orland, USA)*, March, 1997

5) Kurisu K, Liu JG, Tabata MJ, Matsumura T, and Iwamoto M: Developmental role of PTHrP in murine molars. *6th Intn. Conference on Tooth Morhpgenesis and Differentiation (Gotenborg, Sweden)*, June, 1997

6) Tabata MJ, Matsumura T, Sakuda M and Kurisu K: HGF maintains ameloblast lineage cells at early stage of development of murine tooth for the crown formation. *6th Intn. Conference on Tooth Morphogenesis and Differentiation (Gotenborg, Sweden)*, June, 1997

7) Ohmori T, Iwamoto M, Tabata MJ, Liu JG, Fujii T, Okada H and Kurisu K: Role of Sonic Hedgehog (Shh) gene in tooth development. *76th General Session of IADR (Nice, France)*, June, 1998

8) Fujii T, Tabata MJ, Kato J, Iwamoto M, Wakisaka S and Kurisu K: BMP4 is involved in the cusp formation of the mouse molar. *XV congress of the IFAA (Rome, Italy)*, Sep. 11-16, 1999 (IFAA = 国際解剖学会)

9) Fujii T, Tabata MJ, Ohmori T, Liu J-G, Iwamoto M, Wakisaka S and Kurisu K: BMP4 is involved in

the formation of the mouse molar cusp. *79th General session of the IADR (Washington DC, USA)*, Apr. 5-8, 2000

10) Tabata MJ, Matsumura T, Kurisu K: Effect of extracellular matrix on growth, differentiation and mineralization of ameloblast-lineage cells *in vitro*. *7th Intn. Conference on Tooth Morphogenesis and Differentiation (Lyon, France)*, June, 2001 [IADR, Intn. Association of Dental Research]

11) Tabata MJ, Yamanaka A, Sonomura T, Ogi H, Uemura M: Gene expression of growth factors in jaw development of the house shrew, *Suncus murinus*. *Odontology 2002 (Karuizawa)*, Sep, 2002

12) Suzuki N, Kitamura K, Nemoto T, Shimizu N, Wada S, Kondo T, Tabata MJ, Sodeyama F, Ijiri K and Hattori A: Effect of acceleration on osteoblastic and osteoclastic activities: Analysis of bone metabolism using goldfish scale as a model for bone. *36th COSPAR Scientific Assembly* (Beijing, China), July, 2006 [COSPAR, Committee on Space Research]

13) Nakayama H, Takakuda K, Matsumoto HN, Miyata A, Baba O, Tabata M, Oda T, and Takano Y: Evaluation of Cementlines in Aging Bones of c-Src Deficient Mice. *55th General Session of the JADR, (Yokohama)* Nov, 2007

14) Kitamura K, Suzuki N, Nemoto T, Shimizu N, Tabata MJ, Wada S, Ohmori K, Nakamura M, Kondo T, and Hattori A: Effects of low-intensity ultrasound on bone metabolism in goldfish scale. *Intn. Symposium of Sonochemistry and Sonoprocessing 2007, (Kyoto),* Dec, 2007

15) Ahmad M, Iseki H, Baba O, Tabata MJ, and Takano Y: Provisional mineralization layer in the predentin of murine teeth. *56th General Session of the JADR*, (Nagoya) Nov, 2008

16) Atukorala ADS, Higuchi K, Tabata MJ, Baba O, Nakayama H, and Takano Y: Impaired tooth development in reduced scale medaka mutant (rs-3). *56th General Session of the JADR*, (Nagoya) Nov, 2008

17) Notani T, Tabata MJ, Baba O, and Takano Y: Three-dimensional & layered culture method for tooth induction and development. *56th General Session of the JADR, (Nagoya)* Nov, 2008

18) Tabata MJ, Notani T, Iseki H, Baba O, Takano Y: Segregation and motility of enamel organ-derived cells in culture. *57th General Session of the JADR, (Wuhan, China)* Nov, 2009

19) Baba O, Atukorala ADS, Tabata MJ, Mitani H, Takano Y: The expression of *edar* transcripts during tooth formation in medaka. *57th General Session of the JADR, (Wuhan, China)* Nov, 2009 (*2nd Meeting of IADR Pan Asian Pacific Federation (PAPF) & 1st Meeting of IADR Asia/Pacific Region (APR)*

20) Tabata MJ, Nishii N, Iseki H, Baba O, Takano Y: Development of mouse tooth germ without outer enamel epithelium. *58th General Session of the JADR, (Kokura)* Nov, 2010

21) M. Kitahara,A. Hattori,N. Suzuki,M.J. Tabata,M. Kakei,Y. Miake,H. Mishima: The relationship between the melatonin and the periodicity of incremental lines in the tooth dentin(10.1016/j.bone.2010.04.213)

22) Mishima H, Hattori A, Suzuki N, Tabata MJ, Kakei M, Miake Y, Suzuki M: The connection between the periodicity of incremental lines in the tooth dentin and the regulation by melatonin. *European Calcified Tissue Society 39th meeting (Stockholm)* May, 2012

＜国内学会＞

1) 田畑純、河原 明、天野 實:アフリカツメガエル母性物質の卵形成初期発生における局在化について. 発生生物学会第21回大会(つくば)1988年5月

2) 田畑純、河原 明、天野 實:アフリカツメガエル卵の細胞質抗原が示す卵形成期後期の軸形成. 発生生物学会第23回大会(広島) 1990年5月

3) 田畑純、岩本容泰、脇坂聡、加藤穣慈、佐々木康夫、栗栖浩二郎:培養エナメル芽細胞に対する細胞外基質の影響. 第35回歯科基礎医学会学術大会(長崎)1993年10月

4) 田畑純、金健志、山下和夫、岩本容泰、手塚洋子、中村敏一、久米川正好、栗栖浩二郎:ラット臼歯歯胚における肝細胞増殖因子(HGF/SF)とその受容体(c-met)の発現. 第36回歯科基礎医学会学術大会(大阪)1994年10月

5) 松村達志、田畑純、金健志、岩本容泰、脇坂聡、加藤穣慈、中村敏一、栗栖浩二郎:培養エナメル芽細胞に対する各種サイトカインの影響. 第36回歯科基礎医学会学術大会(大阪)1994年10

月

6) 金健志、劉 継光、田畑純、岩本容泰、加藤穣慈、脇坂聡、栗栖浩二郎：肝細胞増殖因子(HGF)は歯胚の形態形成に関与する. 第100回日本解剖学会総会（東京）1995年4月

7) 田畑純、金健志、劉 継光、松村達志、岩本容泰、加藤穣慈、脇坂聡、栗栖浩二郎：歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 第37回歯科基礎医学会学術大会（東京）1995年9月

8) 松村達志、田畑純、劉 継光、金健志、岩本容泰、加藤穣慈、脇坂聡、栗栖浩二郎：培養エナメル芽細胞におけるHGFレセプターの発現とHGFの影響. 第37回歯科基礎医学会学術大会（東京）1995年9月

9) 田畑純、栗栖浩二郎：歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 第5回アンチセンスシンポジウム（つくば）1995年11月

10) 田畑純、松村達志、劉 継光、加藤穣慈、岩本容泰、脇坂聡、松本和政、和中明生、遠山正彌、栗栖浩二郎：歯胚の上皮・間葉細胞を特異的に認識する抗体の探索. 第101回日本解剖学会総会（福岡）1996年4月

11) 柴口竜也、加藤穣慈、田畑純、岩本容泰、脇坂聡、松本和政、和中明生、遠山正彌、栗栖浩二郎：LIM-homeodomain 遺伝子 L3 の歯胚における発現. 第101回日本解剖学会総会（福岡）1996年4月

12) 劉継光、田畑純、山下和夫、岩本容泰、栗栖浩二郎：歯の発生における副甲状腺ホルモン関連ペプチド(PTHrP)の役割. 第14回骨代謝学会総会（大阪）1996年7月

13) 栗栖浩二郎、劉 継光、田畑純、岩本容泰、大盛朝玄、藤井隆文、今田淳：歯の発生における副甲状腺ホルモン関連タンパク(PTHrP)の発現とその役割. 発生生物学会第30回大会（つくば）1997年5月

14) 大盛朝玄、岩本容泰、田畑純、藤井隆文、劉 継光、栗栖浩二郎：歯胚における Sonic hedgehog (Shh) 遺伝子の発現とその役割の解析. 第39回歯科基礎医学会学術大会（北九州）1997年10月

15) Ohmori T, Iwamoto M, Tabata MJ, Liu JG, Fujii T, Okada H and Kurisu, K.: Role of Sonic hedgehog (Shh) gene in tooth development. 第7回アンチセンスシンポジウム（千葉）1997年11月

16) 藤井隆文、加藤穣慈、田畑純、岩本容泰、栗栖浩二郎：歯胚の発生過程における BMP-4 の役割. 第103回日本解剖学会総会（大阪）1998年3月

17) 藤井隆文、加藤穣慈、田畑純、岩本容泰、栗栖浩二郎：歯胚の発生過程における BMP-4 の役割. 第103回日本解剖学会総会（大阪）1998年3月

18) 田畑純、栗栖浩二郎：歯胚発生における上皮・間葉相互作用－アンチセンス法による解析－. 第7回エナメル質比較発生学懇話会（軽井沢）1998年9月

19) 藤井隆文、加藤穣慈、田畑純、柴口竜也、大盛朝玄、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎：歯胚における BMP-4の役割の解析. 第40回歯科基礎医学会学術大会（名古屋）1998年10月

20) 柴口竜也、田畑純、加藤穣慈、藤井隆文、大盛朝玄、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎：LIMホメオドメイン遺伝子L3の歯胚形成における役割. 第40回歯科基礎医学会学術大会（名古屋）1998年10月

21) 加藤穣慈、柴口竜也、田畑純、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎：マウス歯胚の発生過程におけるOASIS遺伝子の発現. 第40回歯科基礎医学会学術大会（名古屋）1998年10月

22) 田畑純：歯胚発生のメカニズム－器官培養とアンチセンス法を用いて. 第1回AWKセミナー（広島）1998年10月

23) 田畑純、劉継光、藤井隆文、大盛朝玄、柴口竜也、岩本容泰、栗栖浩二郎：歯胚発生の研究におけるアンチセンス法の有用性. 第8回アンチセンスシンポジウム（千葉）1998年11月

24) 田畑純、加藤穣慈、栗栖浩二郎：歯胚発生における Ta 関連因子の探索. 第104回日本解剖学会総会（東京）1999年3月

25) 藤井隆文、田畑純、栗栖浩二郎：歯胚の発生における BMP-4 の役割. 発生生物学会第32回大会（神戸）1999年5月

26) 劉継光、田畑純、加藤穣慈、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎：歯の発生におけるPTHrPと破骨細胞との関連性. 第41回歯科基礎医学会学術大会（東京）1999年9月

27) 田畑純、阿部真土、玉村禎宏、藤井隆文、脇坂聡、栗栖浩二郎：歯胚発生における細胞マーカー探索のための糖鎖染色法の検討. 第105回日本解剖学会総会（横浜）2000年3月

28) 劉継光、田畑純、栗栖浩二郎：歯の発生におけるPTHrPの役割と破骨細胞の関与. 発生生物学会第33回大会（高知）2000年5月

29) 田畑純、松村達志、栗栖浩二郎：エナメル芽細胞の初代培養法とその関連技術. 第8回エナメル質比較発生学懇話会（札幌）2000年7月
30) 阿部真土、玉村禎宏、田畑純、柴口竜也、劉継光、栗栖浩二郎：セマフォリンHの歯胚における発現. 第42回歯科基礎医学会学術大会（大阪）2000年9月
31) 柴口竜也、田畑純、加藤穣慈、大盛朝玄、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎：LIMホメオドメイン遺伝子 Lhx8 の歯胚形成における役割. 第42回歯科基礎医学会学術大会（大阪）2000年9月
32) 阿部真土、田畑純、加藤穣慈、岩本容泰、脇坂聡：マウスdHANDの下顎での発現と切歯発生におけるその役割. 第43回歯科基礎医学会（大宮）2001年9月
33) 田畑純、山中淳之、薗村貴弘、植村正憲：スンクス歯胚における Fgf8, Bmp4, Shh の発現パターンの解析. 第44回歯科基礎医学会（東京）2002年10月
34) 田畑純、薗村貴弘、植村正憲：スンクスを用いた *Fgf8, Bmp4, Shh* のホモログ遺伝子の探索と顎の発生過程における発現解析. 日本解剖学会第58回九州支部会（小倉）2002年10月
35) 田畑純、山中淳之、薗村貴弘、植村正憲：スンクスの顎と歯列の発生過程における *Fgf8, Bmp4, Shh* の発現パターンの解析. 第108回日本解剖学会総会（福岡）2003年4月
36) 山中淳之、田畑純、薗村貴弘、植村正憲：立体組織像構築によるスンクスの歯の発生様式の研究. 第45回歯科基礎医学会（盛岡）2003年9月
37) 山中淳之、安井金也、薗村貴弘、田畑純、植村正憲：スンクスの歯の発生過程におけるPax9の発現パターン. 第46回歯科基礎医学会（広島）2004年9月
38) 田畑純、田松裕一、宮下桂子、薗村貴弘、山中淳之、島田和幸、植村正憲：歯や骨の再生のモデル系としての魚鱗：再生鱗の組織構築と血管網形成. 日本解剖学会第60回九州支部会（福岡）2004年12月
39) 田畑純、田松裕一、宮下桂子、薗村貴弘、山中淳之、島田和幸、植村正憲：歯や骨の再生実験モデル系としての魚鱗：ウロコの再生過程と血管網. 第110回日本解剖学会総会（富山）2005年3月
40) 山中淳之、薗村貴弘、田畑純、植村正憲：食虫類スンクスにおける歯隙のない歯列の発生様式. 第110回日本解剖学会総会（富山）2005年3月
41) 田畑純、田松裕一、服部淳彦、薗村貴弘、山中淳之、島田和幸、植村正憲：歯や骨の再生実験モデルとしての魚鱗：ウロコ再生初期の組織再構築. 第47回歯科基礎医学会（仙台）2005年9月
42) 山中淳之、薗村貴弘、田畑純、植村正憲：食虫類スンクスにおける歯種決定に関与する遺伝子の発現パターン. 第47回歯科基礎医学会（仙台）2005年9月
43) 藤原尚樹、田畑純、鍵谷忠慶、石関清人、名和橙黄雄：培養マウス臼歯の有細胞セメント質形成をIGF-Iは促進する. 第47回歯科基礎医学会（仙台）2005年9月
44) 山中淳之、安井金也、薗村貴弘、田畑 純、植村正憲：食虫類スンクスにおける歯種決定のメカニズムの探索. 日本解剖学会第61回九州支部会（福岡）2005年10月
45) 田畑 純、藤原尚樹、山中淳之、薗村貴弘、植村正憲：培養下におけるエナメル芽細胞の形態形成：アメロジェニン分泌の様式と円柱化. 第111回日本解剖学会総会（相模原・北里大学）2006年3月
46) 山中淳之、薗村貴弘、田畑 純、植村正憲：食虫類ジャコウネズミにおける上顎歯列と前顎骨の発生. 第48回歯科基礎医学会（横浜・鶴見大学）2006年9月
47) 鈴木信雄、北村敬一郎、根本 鉄、清水宣明、和田重人、近藤 隆、井尻憲一、田畑 純、新実信夫、服部淳彦：超音波刺激による骨形成促進作用：魚のウロコのアッセイ系を用いた骨芽及び破骨細胞の解析. 第15回ソノケミストリー研究会（金沢）2006年10月
48) 三島弘幸、鈴木信雄、田畑純、大野由香、中石裕子、野村加代、服部淳彦：歯の成長線の周期性にメラトニンが関与する可能性. 第61回日本解剖学会中国・四国支部学術集会（広島）2006年11月
49) 鈴木信雄、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、清水宣明、田畑 純、池亀美華、中村正久、近藤隆、松田恒平、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、服部淳彦：魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究. 第23回宇宙利用シンポジウム（東京）2007年1月
50) 馬場麻人、寺島達夫、田畑純、高野吉郎：ラット臼歯歯冠形成期から歯根形成期における歯髄細胞増殖活性の変化. 第49回歯科基礎医学会学術大会（北海道大学）2007年8月
51) 鈴木信雄、北村敬一郎、清水宣明、田畑 純、池亀美華、中村正久、近藤隆、和田重人、井尻憲一、大森克徳、服部淳彦：超音波の機械的刺激及び加速度の重力刺激に対する骨芽・破骨細

胞の応答. 第78回日本動物学会(弘前)2007年9月

52) Thamamongood T, 田畑純、中村正久、鈴木信雄、服部淳彦:キンギョのウロコを用いた種々の骨破壊ー骨再生モデル系の確立. 第32回日本比較内分泌学会(栃木)2007年10月

53) 鈴木信雄、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、清水宣明、田畑 純、池亀美華、中村正久、近藤隆、松田恒平、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、久保田幸治、奈良雅之、服部淳彦:疑似微小重力及び過重力下における骨代謝制御:培養ウロコを用いた解析. 第24回宇宙利用シンポジウム(東京)2008年1月

54) 鈴木信雄、北村敬一郎、根本 鉄、清水宣明、池亀美華、和田重人、近藤 隆、大森克徳、中村正久、井尻憲一、田畑 純、染井正徳、服部淳彦:物理的刺激に対する骨芽・破骨細胞の応答:魚類のウロコを骨のモデルとした骨代謝の解析. 第35回日本生体電気・物理的刺激研究会(新潟)2008年3月

55) 鈴木信雄、Danks JA,田畑 純、池亀美華、中村正久、服部淳彦:副甲状腺ホルモンのウロコの骨芽細胞及び破骨細胞に対する作用. 第79回日本動物学会(福岡)2008年9月

56) 鈴木信雄、北村敬一郎、大森克徳、田畑 純、池亀美華、井尻憲一、近藤隆、山田依里、西島史恵、根本鉄、清水宣明、服部淳彦:再生鱗を用いた評価系の開発と加速度重力の解析. 宇宙生物科学会第22回大会(奈良)2008年9月

57) 鈴木信雄、田畑 純、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、根本鉄、清水宣明、染井正徳、池亀美華、中村正久、近藤隆、古澤之裕、松田恒平、田渕圭章、高崎一朗, 和田重人、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、久保田幸治、鈴木徹、遠藤雅人、竹内俊郎、奈良雅之、服部淳彦:魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究:宇宙実験に適したウロコの培養法の検討. 第25回宇宙利用シンポジウム(神奈川)2009年1月

58) 馬場麻人、太田正人、寺島達夫、田畑純、高野吉郎:ラット歯髄におけるFGF18の発現:in situ RT-PCRによる検出. 第50回歯科基礎医学会学術大会(昭和大学)2008年9月

59) 田畑 純、野谷拓也、井関八郎、中山博登、馬場麻人、高野吉郎:エナメル上皮細胞と歯髄細胞を用いた三次元・重層培養における組織再構築と細胞相互作用. 第114回日本解剖学会学術大会(岡山大学)2009年3月

60) アツコララ アツコララ、樋口和穂、吉見雅之、田畑純、馬場麻人、高野吉郎:無汗性外胚葉異形成症モデル、Edar欠乏メダカの歯の異常解析. 第114回日本解剖学会学術大会(岡山大学)2009年3月

61) 田畑 純、野谷拓也、井関八郎、馬場麻人、高野吉郎:培養エナメル上皮細胞の増殖・分化とその動態. 第51回歯科基礎医学会学術大会(新潟大学)2009年9月

62) 野谷拓也、田畑 純、井関八郎、吉見雅之、馬場麻人、高野吉郎:エナメル芽細胞と歯髄細胞を用いた三次元・重層培養(TDL培養)系における組織分化と組織再構築. 第51回歯科基礎医学会学術大会(新潟大学)2009年9月

63) 馬場麻人、Devi Atukorala、田畑純、高野吉郎:メダカ顎歯および咽頭歯形成野におけるEDAR発現細胞の同定. 第51回歯科基礎医学会(新潟大学)2009年9月

64) 三島弘幸、北原正大、服部淳彦、鈴木信雄、田畑純、筧光男、見明康夫:象牙質の成長線の形成リズムとメラトニンの分泌リズムとの関連. 第4回バイオミネラリゼーションワークショップ(東京大学)2009年9月

65) 鈴木信雄、田畑 純、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、根本鉄、清水宣明、笹山雄一、染井正徳、池亀美華、中村正久、近藤隆、古澤之裕、松田恒平、田渕圭章、高崎一朗, 和田重人、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、久保田幸治、鈴木徹、遠藤雅人、竹内俊郎、江尻貞一、小萱康徳、前田斉嘉、内田秀明、田谷敏貴、林明生、中村貞夫、杉立久仁代、芹野武、奈良雅之、服部淳彦:魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究:魚類のウロコにおけるホルモン応答. 第26回宇宙利用シンポジウム(神奈川)2010年1月

66) 田畑 純、中野崇文、池亀美華、鈴木信雄、服部淳彦、井関八郎、馬場麻人、高野吉郎:宇宙実験のためのキンギョ再生鱗の培養法の開発と保冷・培養下での細胞動態の観察. 第115回日本解剖学会学術大会(盛岡)2010年3月

67) 馬場麻人、寺島達夫、太田正人、田畑純、高野吉郎:象牙芽細胞におけるFGFRの発現. 第52回歯科基礎医学会(東京)2010年9月

68) 矢野幸子、笠原春夫、吉馴重徳、田畑 純、服部淳彦、鈴木信雄:宇宙空間における骨代謝制御:キンギョの培養ウロコを骨のモデルとした解析 (Fish Scales) ー冷蔵輸送の検討. 第24回日本宇宙生物科学会 (東北大学) 2010年9月

69) 田畑 純、馬場優里、石山巳喜夫、奈良雅之、岡田典弘、高野吉郎:シーラカンス・ウロコの小歯様突起の解析. 第5回バイオミネラリゼーション・ワークショップ (東京大学) 2010

年11月

70) Naoto NISHII, Hachiro ISEKI, Yoshiro TAKANO and Makoto J. TABATA: Is outer enamel epithelium necessary for the development of mouse tooth germs?（マウス歯胚の発生に外エナメル上皮は必要か？） 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会合同大会（パシフィコ横浜）2011年3月

71) Takafumi NAKANO, Hachiro ISEKI, Otto BABA, Yoshiro TAKANO and Makoto J. TABATA: Cell identification study of dental epithelium of rat incisor.（ラット切歯の歯胚上皮の構成細胞の識別研究） 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会合同大会（パシフィコ横浜）2011年3月

72) Yuri BABA, Hachiro ISEKI, Masayuki NARA, Mikio ISHIYAMA, Norihiro OKADA, Yoshiro TAKANO and Makoto J. TABATA: Morphological study of the denticles on the fish scales of Coelacanth Latimeria culumnae.（シーラカンスのウロコ上にあるデンティクルの形態学的研究） 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会 合同大会（パシフィコ横浜）2011年3月

73) Ayaka YANAGI, Hachiro ISEKI, Yoshiro TAKANO, Atsuhiko HATTORI and Makoto J. TABATA: In vitro study of regeneration mechanism of fish scales of goldfish.（キンギョ・ウロコの再生メカニズムの in vitro 研究） 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会 合同大会（パシフィコ横浜）2011年3月

74) 池亀美華、服部淳彦、北村敬一郎、田畑 純、矢野幸子、山本敏男、鈴木信雄: キンギョのウロコに存在する破骨細胞は微小重力下で活性化する. 第29回骨代謝学会（大阪）2011年7月

75) 鈴木信雄、池亀美華、田畑 純、北村敬一郎、矢野幸子、山本敏男、服部淳彦：宇宙におけるウロコの破骨細胞の形態及び細胞活性の変化. 日本動物学会・中部支部例会（福井大学）2011年7月

76) 田畑 純、井関八郎、馬場麻人、高野吉郎：外エナメル上皮除去歯胚の培養下における発生. 第53回歯科基礎医学会（岐阜市）2011年9月

77) 田畑 純、井関八郎、池亀美華、宮下桂子、丸山雄介、大森克徳、遠藤雅人、馬場麻人、服部淳彦、鈴木信雄：キンギョ・ウロコを使った宇宙実験：微小重力下における破骨細胞の超微細構造解析. 第116回日本解剖学会・全国学術集会（甲府市）2012年3月

78) Otto Baba, ADSL Atukorala, Keiji Inohaya, Makoto Tabata, Kiyoshi Mitani, Yoshiro Takano: Differential effect of aberrant expression of ectodysplasin-A receptor (edar) on scales and jaw and pharyngeal dentition of medaka. 第116回日本解剖学会・全国学術集会（甲府市）2012年3月

79) 三島弘幸、井上昌子、服部淳彦、鈴木信雄、田畑純、筧光夫、松本敬、里村一人、見明康雄：象牙質の成長線の周期とメラトニンの分泌リズムの関連. 第7回バイオミネラリゼーションワークショップ（東京大学）2012年12月

80) 三島弘幸、井上昌子、服部淳彦、鈴木信雄、田畑純、筧光男、松本敬、里村一人、見明康雄: 象牙質の成長線形成機構と体内時計の情報伝達分子であるメラトニンの分泌リズムの関係. 第117回日本解剖学会・全国学術集会（高松市）2013年3月

81) 田畑　純：　宇宙微小重力下培養でみられたキンギョ・ウロコの形態変化. 第14回エナメル質比較発生学懇話会（新潟・瀬波）2013年8月

82) 馬場麻人、太田正人、寺島達夫、田畑　純、高野吉郎：Fibroblast growth factor (FGF) 18とFGFRのラット象牙質形成過程での発現. 第119回日本解剖学会・全国学術集会（自治医大）2014年3月

83) 田畑 純、杉浦真琴：外エナメル上皮・星状網除去による歯胚発生への影響. 第57回歯科基礎医学会（新潟市）2015年9月

84) 石山巳喜夫, 三上正人, 中富満城, 岡俊哉, 佐藤秋絵, 田畑純, 笹川一郎：エナメルとガノインの分子生物学的解析. 第58回歯科基礎医学会（札幌市）2016年8月

85) 中野崇文、杉浦真琴、坂口もも子、神部芳則、森良之、高野吉郎、田畑純：　ラット切歯上皮シートを用いた初代細胞培養：構成細胞の再集合と細胞マーカーによる識別. 第59回歯科基礎医学会（松本市）2017年9月

86) 田畑純、杉浦真琴、山本智子：　動物の歯の多様性：食性による歯のちがい. 第15回エナメル質比較発生学懇話会（東京医科歯科大学） 2017年11月

87) 坂口もも子、杉浦真琴、田畑純：　ハコフグ鱗の組織解析. 第15回エナメル質比較発生学

	懇話会（東京医科歯科大学） 2017年11月 88） 牛村英里、杉浦真琴、田畑純： イタチザメ歯胚の鋸状縁形成とエナメロイド芽細胞. 第15回エナメル質比較発生学懇話会（東京医科歯科大学） 2017年11月 89） 福場駿介、秋月達也、星嵩、松浦孝典、シュジャ・アディーン・アマール、岡田宗大、田畑泰彦、田畑純、杉浦-仲里真琴、和泉雄一：等電点の異なるβ-TCP含有ゼラチンスポンジと組換え型ヒト線維芽細胞増殖因子(rhFGF-2)を併用した顎堤増大術における効果の比較検討. 日本歯周病学会６０周年記念京都大会（京都国際会館） 2017年12月15日 90） 牛村英里、杉浦-仲里真琴、坂口もも子、中野崇文、田畑純： イタチザメの歯胚発生における鋸状縁形成とエナメロイド芽細胞. 第123回日本解剖学会総会・全国学術集会（日本医科大）2018年3月 91） 坂口もも子、杉浦-仲里真琴、牛村英里、中野崇文、田畑純： ハコフグ鱗の組織構造と細胞分布の解析. 第123回日本解剖学会総会・全国学術集会（日本医科大）2018年3月 92） 坂口もも子、杉浦-仲里真琴、牛村英里、中野崇文、田畑純： ハコフグ鱗の構造と形成細胞の組織学的解析. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会（東京歯科大）2018年8月 93） 牛村英里、杉浦-仲里真琴、坂口もも子、中野崇文、田畑純： イタチザメ Galeocerdo cuvier 歯胚の形態解析：エナメロイドと鋸歯縁の形成過程. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会（東京歯科大）2018年8月 94） 中野崇文、坂口もも子、牛村英里、杉浦真琴、田畑純： ラット切歯エナメル器構成細胞の細胞識別：凍結切片を用いた分化マーカーの再検討. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会（東京歯科大）2018年8月 95） 坂口もも子、杉浦-仲里真琴、牛村英里、中野崇文、田畑純：ハコフグ鱗の構造と境界領域の組織学的解析. 日本動物学会第 89 回札幌大会(札幌コンベンションセンター)2018 年 9 月 96） 角田佳折、北村清一郎、守田剛、神尾強司、田畑純、馬場麻人： ヒト、ウマ、イヌの茎突咽頭筋の走行・停止の比較からヒト茎突咽頭筋の機能を考える. 第 124 回日本解剖学会総会・全国学術集会（新潟）2019 年 3 月 27 日 97） 渡部準也, 坂口もも子, 高橋将人, 杉浦真琴, 田畑純：ラット臼歯のマラッセの上皮遺残はGDF5を発現する . 第124回日本解剖学会総会・全国学術集会（新潟） 2019年3月27日 98） 田畑純. 歯の発生ものがたり ～細胞のはたらきとかたちづくり～. 赤ちゃん歯科ネットワーク・第34回例会講演 2019.08.22 つくば市 99） 田畑 純、牛村英里： エナメロイドの謎：誰がそれを作るのか. 第4回軟骨魚類研究会（沖縄・瀬底） 2019年10月4日～5日 100） 牛村英里、大島勇人、田畑 純: イタチザメ（*Galeocerdo cuvier*）の歯胚におけるエナメロイド形成と鋸歯形成. 第 52 回新潟歯学会総会（新潟）2019 年 4 月 13 日 101) 角田佳折、北村清一郎、守田 剛、神尾強司、城 翠、古田 琴、濱 義之。田畑 純、馬場麻人 コモンリスザルの軟口蓋・咽頭の筋構築に関する肉眼解剖学的研究 、第125回日本解剖学会総会・全国学術集会 2020年3月25-27日 宇部市 102） 杉浦－仲里真琴、田畑 純. 組織学実習標本の整理と活用. 第 61 回日本神経病理学会総会学術研究会 2020.10.12 金沢市 WEB 開催 103） 田畑 純、杉浦真琴、柴田俊一：バーチャルスライドを用いた組織学実習の試みと今後の展望. 第 85 回 口腔病学会学術大会 2020.12.04 東京医科歯科大 104) 田畑 純、杉浦－仲里真琴: バーチャルスライドの利点を生かした組織学実習の実施報告. 第127回日本解剖学会（大阪大学・オンライン） 2021年3月28日
【特別講義・セミナー】	1) 広島大学総合科学部・生命科学セミナー、歯胚発生におけるHGFの働き. 1995年12月26日 2) 九州歯科大学セミナー（口腔解剖学第2講座・豊島教授の招聘）、歯胚発生におけるHGFの働き. 1995年12月27日 3) 明海大学歯学部・基礎研究研修会（口腔解剖学第2講座・久米川正好教授の招聘）、歯胚の発生に関与する遺伝子－PTHrP, shh, BMP4 を中心として－. 1999年4月20日 4) 日本大学松戸歯学部・特別セミナー（口腔解剖学第2講座・小澤幸重教授の招聘）、歯胚発生における PTHrP の働き. 2001年3月7日 5) 第4回コスモ・フォーカス・ミーティング（コスモバイオ株式会社より招聘）、歯の形が決まる謎にせまる—歯胚発生研究の基礎と実際—. 2001年6月1日（大阪講演）

6) 鹿児島大学歯学部イブニングセミナー、歯の発生の分子生物学 －HGFとPTHrPの働き－. 2001年10月3日
7) 九州歯科大学セミナー（口腔解剖学第2講座・原田助教授の招聘）、歯の発生生物学:HGF と PTHrP の役割. 2001年12月27日
8) 九州歯科大学セミナー（口腔解剖学第2講座・原田助教授の招聘）、新しい実験動物スンクスを用いた歯の発生研究. 2002年8月12日
9) 鹿児島大学歯学部イブニングセミナー、歯の発生生物学研究のシーズ. 2003年6月10日
10) 昭和大学歯学部・特別セミナー（口腔解剖学第1講座・中村教授の招聘）、歯の発生の分子メカニズム:マウス歯胚から見えてくるもの. 2005年11月4日
11) 鹿児島大学歯学部イブニングセミナー、歯と骨とウロコの話:魚のウロコはどのように再生するのか. 2005年12月13日
12) 新潟大学大学院医歯学総合研究科・特別セミナー、魚鱗の再生研究から切り開く歯の発生研究. 2005年11月15日
13) 富山大学医学部生命科学先端研究セミナー、歯と骨とウロコの話:魚鱗の再生過程から見えてくるもの. 2006年5月10日
14) 富山県立大学生物工学研究センターセミナー、歯と骨とウロコの話:魚鱗の再生過程から見えてくるもの. 2006年5月12日
15) シーラカンス研究セミナー、シーラカンスの鱗研究:オーナメントが語る歯と鱗の関係. 2010年8月10日（東工大すずかけ台キャンパス）
16) 愛媛大学・理学部・生物学科・生物学特別講義、組織学の基礎と応用研究. 2011年5月21-22日
17) 愛媛大学・大学院理工学研究科・生物学特別講義I、組織学の基礎と応用研究. 2011年5月21-22日
18) コスモバイオ社内セミナー（コスモバイオ株式会社より招聘）、歯の組織発生とはたらき—細胞培養と観察のテクニック—. 2011年12月7日（コスモバイオ本社）
19) 愛媛大学・理学部・生物学科・生物学特別講義、組織学基礎:四大組織と細胞形態. 2012年5月12-13日
20) 愛媛大学・大学院理工学研究科・生物学特別講義I、組織学基礎:四大組織と細胞形態. 2012年5月12-13日
21) 広島大学・生物生産学部・研究者養成コース・特別セミナー: 歯と骨とウロコの研究. 2014年3月10日
23) 赤ちゃん歯科ネットワーク・第14回例会講演（つくば市）: ヒトの発生、歯の発生. 2016年4月
22) 九州歯科大・最新生命科学: 顎関節の組織学～その構造、機能、進化～. 2016年12月21日
23) 赤ちゃん歯科ネットワーク・第20回例会講演（浅草）:歯からウロコへ、そして宇宙へ. 2017年4月
24) 橿の木会・さわやか歯科セミナー・こども向け講演（橿原市）:宇宙ではどうして骨がもろくなるのだろう？ ～目からウロコの僕らの宇宙実験～. 2017年8月24日
25) 橿の木会・さわやか歯科セミナー・歯科医師向け講演（橿原市）:重力のありがたさ ～キンギョのウロコの宇宙実験による骨代謝の解析研究～. 2017年8月24日
26) 東京医科歯科大・写真部講習会: 写真の撮り方、楽しみ方. 2017年11月21日
27) 九州歯科大・最新生命科学: 中枢神経の組織学～中枢機能を司る細胞たち～. 2017年12月20日
28) 九州歯科大・大学院セミナー: 歯からウロコへ、そして宇宙へ. 2017年12月20日
29) 赤ちゃん歯科ネットワーク・第27回例会講演（つくば）:口腔機能理解のための組織学. 2018年6月21日
30) 九州歯科大・最新生命科学: 口腔粘膜の組織学～皮膚と腸粘膜の境界で～. 2018年12月19日
31) 九州歯科大・大学院セミナー: 歯胚の細胞生物学:エナメル質形成の主役と脇役. 2018年12月19日
32) 赤ちゃん歯科ネットワーク座談会講演（東京医科歯科大）: 舌の発生と構造 ～向井の術式を考える～. 2019年4月25日
33) 赤ちゃん歯科ネットワーク・第34回例会講演（つくば）:歯の発生ものがたり ～細胞のはたらきとかたちづくり～. 2019年8月22日

34) 九州歯科大・最新生命科学: 鱗を用いた宇宙実験:微小重力下における硬組織の変化. 2019年11月13日
35) 九州歯科大・大学院セミナー: 歯の発生の多様性:多生歯とエナメロイドの謎を探る. 2019年11月13日
36) 九州歯科大・最新生命科学: シーラカンスの話:歯と鱗の接点. 2020年11月4日
37) 九州歯科大・大学院セミナー: 鱗に見られる歯の進化. 2021年10月14日
38) 赤ちゃん歯科ネットワーク・第43回例会講演(オンライン開催):赤ちゃんの口の機能性 ー母乳を食すための進化と発達ー. 2021年12月16日
39) 東京医科歯科大学・学外者向けセミナー(BBセミナー): 赤ちゃんの口の機能性ー乳食への適応と進化ー. 2023年4月19日
40) 東京医科歯科大学・大学院ボーダレスセミナー:歯の進化と多様性. 2023年10月26日
41) 明海大学・大学院セミナー(坂戸市): 哺乳類の口と歯の進化:その特殊性と多様性 2023年11月22日
42) 周望学舎シニアカレッジ(北九州市): 食べるための進化と多様性～顎の獲得、歯の起原と進化、肉食・草食・雑食・乳食の仕組み～ 2024年10月9日

【その他】

＜雑誌掲載など＞

1) 田畑 純: QuickBASIC でcolor@ 文を実行する. The BASIC, 81: 170-171 (1990)
2) 田畑 純: QuickBASIC の文字列入力を強化する: N88-BASIC(86)タイプの入力関数とロック入力関数. The BASIC, 110: 100-103 (1992)
3) 今村英夫, 内田啓一, 田畑純: 下顎左側第2小臼歯にみられた巨大歯の1例. 歯科放射線, 43: 196 - 197 (2003)
4) 田畑純: 歯と骨とウロコの話.「骨の健康づくり委員会」ホームページ/耳よりな話/今月のトピックス (2003)
5) 田畑純: 銀幕の中の細胞たち.「科学映像館」ホームページ/骨の映画との出会い(2007)
6) 田畑純: アンコウの歯の話. 東京医科歯科大学・献体の会会報 33号3-4 (2007)
7) 田畑純: ウロコに見られる歯のような構造. 国立科学博物館「ダーウィン展」・標本展示(2008)
8) 田畑純. 1000作品公開にあたって(3). 「科学映像館」ホームページ (2018)

＜教材開発と頒布＞

1) 喉頭・咽頭の立体紙模型, オフィスTB (2018)
2) 喉頭の精密立体紙模型, オフィスTB (2022)
3) 喉頭・咽頭の立体紙模型 ver 2, オフィスTB (2022)
4) 動く声帯の紙模型, オフィスTB (2023)
5) 心臓の重層紙模型, オフィスTB (2024)

＜公開ソフトウェア＞

1) 休八の文献管理ソフト Pigeonhole N88-Basic 版 (1984)
2) 休八の文献管理ソフト Pigeonhole MS-DOS 版(1992)
3) 休八の文献管理ソフト Pigeonhole Windows 版 (1997)
4) 休八の分子量計算 Mole H-100LX版 (1993)
5) 休八の単位計算 Q-unit (1997)
6) 休八の繰り返しタイマー Q-repeat (1991)
7) 休八の学会タイマー Q-gakkai (1998) ＊ビブリオバトルの公式タイマーに選定
8) 休八のOSCEタイマー Dolphin (2005)
9) 休八のスクリプト言語支援ソフト Piper (2005)
10) 埋め込みスクリプト ムソ暦 (2014)
11) 埋め込みスクリプト sidestep (2014) (その他多数)

＜メディア協力＞

1) NHK はま・なか・あいづToday 「シーラカンス研究最前線」2010年4月6日放送（福島）［出演］
2) NHK おはよう日本 「シーラカンスの謎に挑む」 2010年4月20日放送［出演］
3) SPACE@NAVI-Kibo (No107) 「Fish Scales」, JAXA, 2010年6月23日（ネット配信）［出演］
4) NHK クローズアップ東北 「シーラカンスに挑む~最先端を走る日本の研究」, 2010年9月24日放送（東北）［出演］
5) 三省堂 高校英語教科書 クラウン「教員用指導書」2013年4月： ハコフグの外骨格について［学術協力・写真提供］
6) NHK教育 ららら♪クラシック「響け！民衆の魂 ムソルグスキーの“展覧会の絵”」 2013年11月30日放送［学術協力］
7) NHK教育 すイエんサー 「さかなクンを超えろ！ すイエんサー流 お魚図鑑を作ろう！」 2016年2月2日放送［学術協力］
8) フジテレビ 「日本の緊急事態24時：サメの脅威は日本でも」 2018年12月25日放送（全国）［出演］
9) 日本歯科新聞 「解説 イノシシの歯」 2019年1月1日号（第2048号）［学術協力］
10) 日本歯科新聞 「解説 ネズミの歯」 2020年1月1日号（第2094号）［学術協力］
11) アポロニア21「レポート：作って学ぶ解剖教材：喉頭・咽頭の立体紙模型」2019年2月号（No.302）［写真提供、学術協力］
12) 日本歯科新聞 「著者に聞く： 新・十二歯考 ～十二支でめぐる歯の比較解剖学. ゾウの象牙質はヒトより進化」2020年7月14日号（第2118号）［インタビュイー、学術協力］
13) 日本歯科新聞 「解説 ウシの歯」 2021年1月1日号（第2139号）［学術協力］
14) サンギ社長ブログ「ロズリンの部屋:インタビュー前編」2021年3月19日号 ［インタビュイー、写真提供］http://roslyn-blog.apagard.com/?eid=978
15) サンギ社長ブログ「ロズリンの部屋:インタビュー後編」2021年3月29日号 ［インタビュイー、写真提供］http://roslyn-blog.apagard.com/?eid=979
16) NHK-BS ワイルドライフ「知床の海～オオカミウオが闘い、シマフクロウ舞う～」2021年12月13日放送［学術協力］
17) 日本歯科新聞 「解説 トラの歯」 2022年1月1日号（第2185号）［学術協力］
18) 毎日新聞「大学に眠る経路不明遺骨」2022年9月26日号（第52776号） [取材協力]
19) 日本歯科新聞 「解説 ウサギの歯」 2023年1月1日号（第2232号）［学術協力］
20) NHK ダーウィンが来た！ 「怪魚オオカミウオ 大きな口で砕く！守る！」 2023年2月5日放送［解説者・学術協力］
21) NHK-BS ヒューマニエンス 40億年のたくらみ 「”歯” 進化を続ける人体の先兵」 2023年9月11日放送［メインコメンテーター・学術協力］
22) 日本テレビ「あなたは小学五年生よりかしこいの？」2023年11月～12月放送［学術協力］
23) 日本歯科新聞 「解説 タツの歯」 2024年1月1日号（第2279号）［学術協力］
24) 日本歯科新聞 「解説 ヘビの歯」 2025年1月1日号（第2325号）［学術協力］

主な社会活動

鹿児島市立錦江台小学校非常勤講師	(2003 年～2005 年)
各種フリーウェアの公開	(1986 年～現在)
赤ちゃん歯科ネットワーク 学術顧問	(2017 年～2023 年)
東京医科歯科大学・写真部 顧問	(2017 年～2023 年)
さまざまな勉強会、学校、大学での講演多数	(2002 年～現在)
Wikipedia 編集者	(2006 年～現在)

所 属 学 会

日本発生生物学会	(1986 年～2001 年)
日本動物学会	(1987年～2001年)
日本歯科基礎医学会	(1992 年～現在)

	日本解剖学会	（1994 年～現在）
	日本アンチセンス DNA/RNA 研究会	（1995 年～2012 年）
	歯の発生の会 （設立発起人）	（2002 年～2007 年）
	日本歯科医学教育学会	（2002 年～2007 年）
	エナメル質比較発生学懇話会	（2002 年～2023 年）
	International Association for Dental Research	（2007 年～2017 年）
	日本骨代謝学会	（2011 年～2017 年）
	赤ちゃん歯科ネットワーク	（2016 年～2023 年）
受　賞　歴	歯科基礎医学会・第 8 回歯科基礎医学会賞	（1996 年 10 月）
	東京医科歯科大学・第 1 回歯学部優秀教員賞	（2013 年 1 月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

本多（ホンダ） みどり（ミドリ）　HONDA Midori　教授

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目 （令和7年前期）	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・道徳教育の理論と方法 ・キャリアガイダンスⅠ 〔こども教育学部 こども教育学科〕 ・教育原理
専門分野	■教育学 ■教育史分野
最終学歴	広島大学・大学院博士課程後期　教育学部／教育学専攻　単位取得満期退学
学位	修士（教育学）
職歴	岩国短期大学幼児教育学科助教授（平成13年4月～平成23年3月） 岩国短期大学幼児教育学科教授（平成23年4月～平成27年3月） 帝京科学大学こども学部児童教育学科教授（平成27年4月～平成28年3月） 帝京科学大学教育人間科学部幼児保育学科教授（平成28年4月～令和6年3月） 九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科（令和7年4月～現在に至る）
教育上の業績	○海外研究者を招き、公開研究会「教える力とは何か」を開催（平成31年3月）、ウェンディ・ロビンソン教授（現ランカスター大学、教師教育史）他、国立大学教授等を招き、企画・司会・同時通訳・発表を担当。 ○地域連携事業のびのびプレーデイ（足立区と大学の連携事業、平成28年以降、年1回）の実施と学生指導。令和4年～5年は、学科長としてイベントを統括。
主な研究活動	【学術論文】レフリー論文のみ記す 1.「イギリスにおける「教育学教授」誕生の背景―教育の科学という言説に着目して―」、教育史学会『日本の教育史学』第62集、令和元年10月、86頁～99頁。 （概要）イギリスにおける「教育学教授」誕生の背景を、「教育の科学」をキーワードとして分析した。使用した主な史料は、中等教員養成に当時唯一積極的であったカレッジ・オブ・プリセプターズが創刊した *The Educational Times* で、その見出しを手がかりとして内容分析を行った。それによると、「教育の科学」という言説は、1840年代においてカレッジ内では、優れた教育思想に関する知識を意味していた。1850年代から1860年代にかけては特に大きな変化は見られなかったものの、1870年代に入って大きく変化、実践的領域を含む専門的学問から成る科学へと脱皮を開始した。この変化を主に担った人物は、教育史家オルドリッチが指摘した通り、初代教育学教授ペインとC.H.レイク（中産階級学校長）であることが確認できた。 2.「19世紀イングランドにおける女子中等教員養成：ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ創設の背景と経緯」、教育史学会『日本の教育史学』第40集、平成9年10月、281頁～299頁。 （概要）1885年に大学で学んだ女性のために設けられたイギリス初の女子中等教員養成機関ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ（のちケンブリッジ大学ヒューズ・ホール）創設の背景と経緯を明らかにした。同カレッジは主にフランシス・メアリー・バスによって創設され、初代校長ヒューズが中心になって運営・講義を行った。同カレッジは、その名の通り、ケンブリッジに設立されたため、学生は、ケンブリッジ教員養成シンジケートが準備した講義を初めて受講し、同大学の女性への門戸開放のさきがけとなった。 3.「19世紀英国における女子中等教員養成に関する考察：フランシス・メアリー・バスの教員養成観と実践への取り組み」、広島大学教育学部『広島大学教育学部紀要』第44号、平成7年3月、65頁～74頁。 （概要）イギリス女子教育改革のパイオニア、フランシス・メアリー・バスの教員養成観と実践内容を明らかにした。バスは、女子中等教員に対して、第一に自己統御能力（その内面化）を要求し、次いで、学識、教授に関する知識と経験を求めた。彼女は、特に、教師としての専門的訓練を重視し、教育原理の学習、教授法の学習の必要性を説いた。自身が経営する大規模女子学校で教鞭をとり、学級経営を行うことができる女性教師の育成を図ろうとしていることがわかる。 【翻訳】単独訳のみ記す 1. リチャード・オルドリッチ著、本多みどり訳『イギリス・ヴィクトリア期の学校と社会―ジョゼフ・ペインと教育の新世界』ふくろう出版、平成25年8月。 （概要）イギリス初の教育学教授であるペインに焦点を当て、ヴィクトリア期の学校と社会の実際を

	浮き彫りにした書である。19 世紀中葉当時、中等教員養成制度は、その原型すら存在しなかった。ペインは、1846 年に創設された中等学校教師の同業者団体、カレッジ・オブ・プリセプターズの中で、「教育の理論と実践」に関する試験の作成に関与、教師養成運動に一貫して携わり、ついに 1873 年にはプロフェッサー就任となった。
【学会発表】教育史学会のみ記す	
	1. 教育史学会にて口頭発表 （発表題目は、「ジョゼフ・ペインの教育科学観―『教育の科学と技芸』を中心に―」） 〈主　　催〉教育史学会 〈開 催 場 所〉日本大学 〈開催年月日〉平成 26 年 9 月
	（概要）イギリスにおける初代教育学教授ジョゼフ･ペインの教育科学観について、主にペインの著作、*The Educational Times*、および、オルドリッチの『ヴィクトリア期イギリスの学校と社会―ジョゼフ･ペインと教育の新世界』を用いて明らかにした。ペインは、教育の科学を提唱し、教育科学運動はかなりの進展を見せた。しかし、運動内部では考え方の違いに起因する争いがあり、彼は教育の基盤は科学であるとはせず、あくまでも「人間の本性」にあると主張した。
	2. 教育史学会にて口頭発表（発表題目は、「イギリスにおける「教育学教授」の誕生（1873 年）―教育の科学という言説に着目して―」。 〈主　　催〉教育史学会 〈開 催 場 所〉静岡大学 〈開催年月日〉平成 31 年 3 月
	（概要）本発表内容は、上述の通り、教育史学会紀要に掲載された。
主な社会活動 （直近 10 年）	・足立区高齢者福祉苦情対策委員会委員長　（平成 27 年 9 月～平成 29 年 3 月） ・足立区子育て支援サービス利用者負担適正化審議会（副委員長）　（令和元年） ・東京都事故調査第三者評価委員　（令和３年 10 月～令和６年３月） ・足立区子育て支援サービス利用者負担適正化審議会（副委員長、２回目）　（令和５年、７月・８月）
所 属 学 会 （現在所属のみ）	日本教育学会　（平成５年～現在に至る）
受　賞　歴	なし

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

竹並（タケナミ） 正宏（マサヒロ）　TAKENAMI Masahiro　特任教授

所　　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・社会福祉論 ・食事介助実習（学外） ・国際理解（海外研修）韓国・台湾 〔食物栄養学部 理学療法学科〕 ・社会福祉と地域ケア 〔食物栄養学部 作業療法学科〕 ・社会福祉と地域ケア 〔東筑紫短期大学 全学科〕 ・国際理解（海外研修）韓国・台湾 〔東筑紫短期大学 保育学科〕 ・社会的養護Ⅱ ・子ども家庭支援論 〔東筑紫短期大学 専攻科（介護福祉専攻）〕 ・コミュニケーション技術
専 門 分 野	■　障害者福祉 ■　介護福祉教育 ■　アジアの社会福祉
最 終 学 歴	岡山大学大学院　文化科学研究科　博士課程単位取得満期退学
学　　位	修士（文学）（韓国大邱大学校）
職　　歴	慶成高等学校 専任教諭　（平成13(2001)年4月～平成16(2004)年3月） 第一福祉大学 人間社会福祉学部 専任講師　（平成17(2005)年4月～平成19(2007)年3月） 福岡医療福祉大学 人間社会福祉学部 准教授　（平成19(2007)年4月～平成21(2009)年3月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授　（平成21(2009)年4月～平成28(2016)年3月） 九州歯科大学 歯学部 非常勤講師（基礎介護）　（平成24(2012)年4月～現在に至る） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授　（平成28(2016)年4月～現在に至る） 九州歯科大学 歯学部 非常勤講師（韓国語）　（令和5(2023)年9月～現在に至る） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 特任教授　（令和7(2025)年4月～現在に至る）
教育上の業績	○手話と点字を40年以上行い著書もあり、現場における実践力強化として、短大の社会福祉援助技術や専攻科のコミュニケーション技術で手話や点字を取り入れて実践形式で授業を行い教育効果を高めた。（平成21(2009)年） ○管理栄養士を目指す学生の「食事介助実習」に関する取り組みについて（第18回日本介護福祉学会大会）で発表を行った。教科「食事介助実習」の学生へのアンケート調査では様々な専門職業務理解が十分できた、管理栄養士に期待される役割理解もおおむね出来た、食事場面をよく観察もおおむね出来た、利用者がどんな食事が望ましいかおおむね出来たとなっており、学生による授業評価アンケートは4.81であった。（平成22(2010)年）
主な研究活動	【著書】 「廃物利用教材教具の作成と使用法」（単著、大邱大学校出版部、B5判・188頁　昭和63(1988)年9月） 「人間関係論」（単著、特殊教育出版社、B5判・296頁　平成元(1989)年10月） 「韓国の手話」（単著、特殊教育出版社、B5判・269頁　平成2(1990)年1月） 「しいのみ学園」（単著、特殊教育出版社、B5判・316頁　平成2(1990)年7月） 「集中日本語会話」（単著、ECA学院出版部、B4版・120頁　平成2(1990)年8月） 「詩集　韓国、台湾、そして日本」（単著、特殊教育出版社、B5判・76頁、平成5(1993)年8月） 「老人福祉論」（単著、梓書院、A5判・193頁　平成15(2003)年12月）

	「実用のための韓国点字表記法」　（単著、梓書院、A5 判・250 頁　平成 17(2005)年 7 月）
	「手作りおもちゃ・親子愛情教室」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・46 頁　平成 18(2006)年 4 月）
	「見ておぼえる韓国手話の会話法」　（単著、梓書院、A5 判・273 頁　平成 18(2006)年 12 月）
	「心あたたまるケースワークの話」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・63 頁　平成 19(2007)年 3 月）
	「新・心あたたまるケースワークの話」 （単著、大邱大学校出版部、A4 版・65 頁　平成 19(2007)年 12 月）
	「臨床ソーシャルワーク原論」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・68 頁　平成 20(2008)年 4 月）
	「人間関係原論」　（単著、梓書院、四六サイズ・184 頁　平成 20(2008)年 4 月）
	「新・臨床ソーシャルワーク原論」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・66 頁　平成 20(2008)年 8 月）
	「ソーシャルワーク実践論」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・56 頁　平成 20(2008)年 11 月）
	「新・ソーシャルワーク実践論」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・58 頁　平成 21(2009)年 2 月）
	「子どもの心の育ちと人間関係」　（共著、保育出版社、p152～p153、p190～p191　平成 21(2009)年 4 月）
	「障害者福祉と教育」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・65 頁　平成 21(2009)年 5 月）
	「新障害者福祉と教育」　（単著、大邱大学校出版部、A4 版・56 頁　平成 21(2009)年 10 月）
	「保育者が学ぶ家庭支援論」　（共著、建帛社、p37～p51、P170～p171　平成 23(2011)年 4 月）
	「福祉・栄養・看護のための社会福祉論」　（共著、建帛社、p106～p121　平成 28(2016)年 2 月）
	「はじめて学ぶ子どもの養護」　（共著、建帛社、p138～p150　令和 7(2025)年 4 月）
	【研究紀要】
	「園生の視聴覚能力の発達をさぐって」 （単著、日本愛護協会、p81－p91　昭和 59(1984)年 5 月）第 8 回ほほえみ奨励賞受賞
	「韓・日老人福祉法の比較研究」 （単著、韓国大邱大学校修士論文、A5 判・60 頁　平成 2(1990)年 2 月）
	“Any Chance to Open the　Paralympic　Games　Ahead of the Olympic Games” （単著、川崎医療福祉学会誌第 2 巻第 2 号、p242－ｐ243　平成 4(1992)年 12 月）
	「殖民地下の朝鮮における夜学の研究」 （単著、川崎医療福祉学会誌第 3 巻第 1 号、p99－p103　平成 5(1993)年 6 月）
	「儒教文化圏の社会福祉（韓国における老人福祉を中心として）」 （単著、旭川荘研究年報第 24 巻第 1 号、p53－ｐ55　平成 5(1993)年 3 月）
	「自立を目指し地域と共に生きる」 （単著、旭川荘研究年報第 25 巻第 1 号 p48－p50　平成 6(1994)年 6 月）
	「韓国の家族制度（R・ジャネリの祖先祭祀と韓国社会を参考にして）」 （単著、川崎医療福祉学会誌第 2 巻第 4 号 p153－ｐ156　平成 6(1994)年 10 月）
	「韓国社会の転機」 （単著、川崎医療福祉学会誌第 1 巻第 5 号 p189－ｐ192　平成 7(1995)年 9 月）
	「ひとり暮らし老人の日韓比較研究」 （単著、旭川荘研究年報第 29 巻第 1 号 p148－ｐ149　平成 10(1998)年 3 月）
	「韓国の老人家庭奉仕員制度についての一考察」 （単著、川崎医療福祉学会誌 Vol.14 No.2 p371－p376　平成 16(2004)年 11 月）
	「韓国社会福祉の歴史（1910～1945）」 （単著、川崎医療福祉学会誌 Vol.15 No.2 p353－p366 平成 17(2005)年 12 月）
	「韓国社会福祉の歴史」 （単著、第一福祉大学紀要第 3 号 p241－p249 平成 18(2006)年 3 月）
	「韓国介護保険制度（テスト事業実施）から見た問題点」 （単著、第一福祉大学紀要第 4 号 p73－p85　平成 19(2007)年 3 月）
	「フィリピンにおける介護福祉士養成事業の一考察」 （単著、介護人材育成プラス Vol.4－No.4、p120－p126　平成 19(2007)年 9 月）
	「障碍者ソーシャルワークの研究」 （単著、第一福祉大学紀要第 5 号 p61－p78　平成 20(2008)年 3 月）
	「韓国の障害者福祉の今後の展望と課題」 （単著、川崎医療福祉学会誌 Vol-18 No.1p109－p119　平成 20(2008)年 5 月）

	「韓国における地域福祉の展開と福祉教育」 （単著、福岡医療福祉大学紀要　第6号p131－p148　平成21(2009)年3月）
	「韓国の地域社会福祉実践機関「地域社会福祉館」の研究」 （単著、川崎医療福祉学会誌Vol-19 No.1P85－p92　平成21(2009)年6月）
	「日本と韓国の介護保険制度の現状と方向性」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第6号ｐ31－ｐ49　平成21(2009)年12月）
	「社会福祉国家スウェーデンの福祉政策についての一考察（21世紀型日本はどうあるべきか）」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号ｐ129－ｐ144　平成22(2010)年12月）
	「フィリピンの社会福祉政策と市民社会運動」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号ｐ145－ｐ174　平成22(2010)年12月）
	“Welfare and Education for the Physically-Mentally Disabled” （身体的、精神的障害がある人ための福祉と教育） （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号ｐ175－ｐ185　平成22(2010)年12月）
	「韓国の儒教規範と社会保障の関係」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第8号ｐ119－ｐ141　平成23(2011)年12月）
	「韓国の介護職養成所における学生の介護意識」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第8号ｐ143－ｐ174　平成23(2011)年12月）
	「国際交流に対する日韓比較研究（国際交流のあり方について）」 （単著、東筑紫短期大学研究紀要第43号ｐ189－ｐ208　平成24(2012)年12月）
	「韓国の契と社会保障の関係」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第9号ｐ119－ｐ139　平成24(2012)年12月）
	“Relation of American Old People and Community(Real State of Sun City, Arizona)” アメリカの高齢者と地域との関係（アリゾナ州サンシティの現状） （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第9号ｐ141－ｐ154　平成24(2012)年12月）
	「韓国の療養保護士（ホームヘルパー）の職務満足が介護サービスの質に与える影響」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第10号ｐ271－ｐ320　平成25(2013)年12月）
	「際交流に対する日韓比較研究（国際交流のあり方について）（2）」 （単著、東筑紫短期大学研究紀要第44号ｐ129－ｐ153　平成25(2013)年12月）
	「国際交流に対する日台比較研究（国際交流のあり方について）」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第11号p227-p228　平成26(2014)年12月）
	『教科「人間関係（指導法）」の科目別履修カルテ3年間のアンケート調査とKJ法についての一考察』 （単著、東筑紫短期大学研究紀要第45号p257-p279　平成26(2014)年12月）
	「社会資源情報マップの必要性と開発（法人ネットワークの有効利用を目指す仕組みづくりへ）」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第12号p229-p259　平成27(2015)年12月）
	「食事介助実習の現状と課題」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第13号p69-p93　平成28(2016)年12月）
	「日本の大学の現実（総合ランキングについての一考察）」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第13号p95-p122　平成28(2016)年12月）
	「食事介助実習についての一考察」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第14号p39-p54　平成29(2017)年12月）
	「日本の大学についての一考察」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第14号p55-p73　平成29(2017)年12月）
	「教科「国際理解」海外研修についての一考察」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第15号p133-p152　平成30(2018)年12月）
	「日本の介護保険についての一考察」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第15号p153-p171　平成30(2018)年12月）
	「読書ノート・調理ノートにおける学生の意識調査について」 （共著、九州栄養福祉大学研究紀要第16号p153-p162　令和元(2019)年12月）

	「社会福祉の視点から考える食品ロスについての一考察」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第 16 号 p163-p184　令和元(2019)年 12 月）
	「読書ノート・調理ノートにおける学生の意識調査について ～キャリアガイダンスⅡの取組みを通して（第 2 報）～」 （共著、九州栄養福祉大学研究紀要第 17 号 p55-p63　令和 2(2020)年 12 月）
	「社会福祉の視点から考える食品ロスについての一考察(Ⅱ) ～学生アンケート調査の日韓台比較～」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第 17 号 p65-p93　令和 2(2020)年 12 月）
	「少子高齢化社会の日本と社会保障についての一考察 ～地球規模で論じる人口問題～」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第 18 号 p41-p60　令和 3(2021)年 12 月）
	「地域福祉の視点からまちの活性化についての一考察 ～2050 年の北九州市のまちづくり構想～」 （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第 19 号 p59-p72　令和 4(2022)年 12 月）
	「地域福祉の視点からまちの活性化についての一考察Ⅱ」 ～2050 年の北九州市のまちづくり構想Ⅱ～ （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第 20 号 p19-p33　令和 5(2023 年 12 月）
	「AI 時代における福祉のまちづくりについての一考察」 ～環境に優しい未来のトイレとは～ （単著、九州栄養福祉大学研究紀要第 21 号 p57-p71　令和 6（2024 年 12 月）
	【学会発表】
	“Any chance to Open Paralympic Game11TH ASIAN CONFERERENCE ON MENTAL RETARDATION” （単著、アセアン国際知的障害者研究大会（韓国ソウル）平成 5(1993)年 8 月）
	「韓国の訪問介護員制度の現状についての報告」 （単著、第 13 回日本介護福祉学会(神奈川県立保健福祉大学) 平成 17(2005)年 10 月）
	「韓国における訪問介護員養成研修事業についての現状と課題」 （単著、福岡県ソーシャルワーカー協会（西日本短期大学）平成 17(2005)年 11 月）
	「フィリピン人介護者導入における一考察」 （単著、第 33 回川崎医療福祉学会（川崎医療福祉大学）平成 19(2007)年 11 月）
	「韓国における社会福祉教育体系の現状報告」 （単著、第 35 回川崎医療福祉学会（川崎医療福祉大学）平成 20(2008)年 11 月）
	「韓国における社会福祉教育の体系」 （単著、第 2 回福岡県ソーシャルワーカー協会定期例会（福岡医療福祉大学）平成 21(2009)年 7 月）
	「日本と韓国の介護保険制度の比較研究」 （単著、第 17 回日本介護福祉学会大会（文京学院大学）平成 21(2009)年 9 月）
	「日本における外国人介護労働者に関する一考察」 （単著、2009 亜洲産業競争力興企業経営管理国際学術検討会（台湾、日華金典酒店、南海技術大学） 平成 21 年 10 月）
	「韓国の社会福祉教育についての一考察」 （単著、2009 年度日本社会福祉教育学会第 5 回大会（鹿児島国際大学）平成 21(2009)年 11 月）
	『管理栄養士を目指す学生の「食事介助実習」に関する取り組みについて』 （単著、第 18 回日本介護福祉学会大会（岡山県立大学）平成 22(2010)年 9 月 19 日）
	「福岡県介護福祉士会平成 22 年制度政策検討委員会取り組みについて～キャリアパスモデル （共著、福岡県介護福祉士会（案）について～第 8 回日本介護学会大会平成 22(2010)年 10 月）
	「日本の障害者自立支援法の問題点」 （単著、第 33 回東北亜福祉経済共同体国際学術検討会（韓国釜山市長善綜合福祉共同体大講堂） 平成 23(2011)年 5 月）
	「社会資源マップを活用した国際環境作り」 （単著、2012 福祉ビジネスの国際連携会議（韓国釜山市長善綜合福祉共同体大講堂）平成 24(2012)年 7 月）

	「社会資源マップを活用した国際環境作り 2」 （単著、「東亜の福祉ビジネスと産業経営」国際学術検討会（韓国済州島）平成 26(2014)年 7 月）
	【投稿】
	「障害者が望む法律とは何か」 （単著、手をつなぐ育成会（ハートフルネット）平成 22(2010)年 2 月）
	「人材不足を補うために介護の未来を選び取っていく」 （単著、「ケアスル 介護 コラム」令和 6(2024)年 4 月）
主な社会活動	・介護認定審査会委員（福岡県筑紫地区）　（平成 18(2006)年 4 月～平成 21(2009)年 3 月） 判定内容として要介護(支援)状態等に該当するか否かの判定、該当する要介護状態区分、要介護状態等が特定疾患によるものか否か(第 2 号被保険者の場合)の二次判定を行う。
	・日韓研究交流会アドバイザー （社会福祉法人北九州市手をつなぐ育成会）　（平成 22(2010)年 7 月 10 日） 韓国ではすでに高齢者福祉は措置制度から契約制度に移行し、障害者福祉も後に続こうとしている。 入所施設についても大規模な施設をなくす方向性が提案されていて、福祉の市場化や脱施設化、地域生活支援、日本の障がい者総合福祉法（仮称）の動きなどについて活発な意見交換を行う。
	・ATTU（アジア卓球連合）第 31 回東アジアホープス大会（令和 4（2022）12 月 2 日～12 月 4 日） 北九州市立総合体育館において、ATTU（アジア卓球連合）第 31 回東アジアホープス大会が開催され、韓国、中国、台湾、香港、モンゴルが参加して行われた。韓国語の通訳として 3 日間参加する。
	小倉南区湯川 4 町内北明老会講師　老人福祉について講演（令和 6（2024）年 4 月 19 日） 明老会（老人会）にて、介護がすべての人にとって自分自身のことであるという認識や関心を持ち続けることについての講演と意見交換を行う。
所属学会	日本介護福祉学会　（平成 17(2005)年 4 月～現在に至る） 福岡県介護福祉学会　（平成 17(2005)年 4 月～現在に至る） 日本観光学会　（令和5(2023)年 10 月～現在に至る）
受賞歴	第 8 回ほほえみ奨励賞「園生の視聴覚能力の発達をさぐって」　（日本愛護協会） （昭和 59(1984)年 5 月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

樋口（ヒグチ） 綾子（アヤコ）　HIGUCHI Ayako　特任教授

所　　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・教育原理　・教職概論　・教育制度論 ・生徒指導の理論と方法　・教職実践演習（栄養教諭） 〔こども教育学部〕 ・学校運営と制度　・生活の中のジェンダー
専 門 分 野	■ 学校教育　■ 教員養成　■ 家庭科教育 ■ 道徳教育　■ 生徒指導　■ ジェンダー論
最 終 学 歴	九州大学大学院　人間環境学府　教育システム専攻
学　　位	修士（教育学）
職　　歴	福岡市立中学校　教諭　（昭和60(1985)年４月～平成17(2005)年３月） 福岡市教育委員会　教職員課人事主事・主任人事主事 （平成17(2005)年４月～平成19(2007)年３月） 福岡市立原北中学校　教頭　（平成19(2007)年４月～平成22(2010)年３月） 福岡市立照葉小学校・中学校　校長　（平成22(2010)年４月～平成25(2013)年３月） 福岡市立平尾中学校　校長　（平成25(2013)年４月～平成27(2015)年３月） 福岡市立筑紫丘中学校　校長　（平成27(2015)年４月～平成29(2017)年３月） 福岡市教育委員会　研究研修課　指導員　（平成29(2017)年４月～平成30(2018)年３月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科　教授　（平成30(2018)年４月～令和６年３月） 〃　特任教授　（令和６(2024)年４月～現在に至る）
教育上の業績	○福岡県教育庁「子どもが作る弁当の日」 優良事例発表　（平成27(2015)年） ○福岡市立高取中学校研究発表会　指導助言「道徳教育の推進」　（平成28(2016)年） ○キャリア教育コーディネーター養成講座　講師　（　〃　） ○福岡市中学校道徳研究会総会　基調講演「これからの道徳教育」　（平成28(2016)・29(2017)年） ○福岡市立松崎中学校研究発表会指導助言「考え議論する道徳科の指導と評価」　（平成29(2017)年） ○福岡市立和白丘中学校　研究発表会　指導助言「道徳科の評価に関する研究」　（　〃　） ○糸島市青少年育成市民会議　記念講演　（令和元(2019)年） ○福岡県青少年健全育成講演会　講演　（　〃　） ○八女市「青少年健全育成について話し合う集い」　講演　（　〃　） ○行橋南小学校　教育講演会　講演　（　〃　） ○福岡市人権研修会　講師（福岡市東若久校区人権尊重協議会）　（令和3･4(2021･22)年） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立城南中学校）　（令和４(2022)年） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立長尾中学校）　（　〃　） ○福岡市男女共応援事業　講師（大原公民館）　（　〃　） ○糸田町青少年健全育史枝後援会　講師（糸田アリーナ）　（令和５(2023年） ○福岡市男女共応援事業　講師（有田公民館）　（　〃　） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立横手中学校）　（　〃　） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立三宅中学校）　（　〃　） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立香椎第１中学校）　（　〃　） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立金武中学校）　（令和６(2024年） ○福岡市中学校女性管理職会　研修会　講師　（　〃　） ○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立多々良中学校）　（　〃　）

	○福岡市男女共応援事業　講師（平尾公民館）　（　〃　）
	○福岡市教育委員会　家庭教育支援講座講師（福岡市中央市民センター）　（　〃　）
	○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立花畑中学校）　（　〃　）
	○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立老司中学校）　（　〃　）
	○男女共同参画セミナー　講師（福岡市立宮竹中学校）　（令和７(2025 年)
	○福岡市男女共応援事業　講師（福岡市アミカス）　（　〃　）
	○福岡市私立幼稚園連盟　人権教育研修会　講師（幼稚園教育センター）　（　〃　）
研　究　活　動	【著　書】
	「校長の仕事術」（分担執筆）　（教育開発研究所　平成 24(2012)年２月　pp.44～47，116～119）
	（概要）現場の校長を対象にして，学校経営を円滑に行うためのヒントをまとめたものである。「日頃の生徒指導における心がけ」と「学習の指導と評価」の項目を担当し，効率的に職務を進めるためのアドバイスやアイディアを提案した。
	「一年間毎週使える校長講話」（分担執筆） （教育開発研究所　平成 29(2017)年２月 pp.76～77，114～119）
	（概要）集会や式で校長が講話として使えるコラムを、他の執筆者と共に１冊の本にまとめた。「アクティブラ―ニングって何？」「体育の日」「実力テストの頑張り方」「合唱コンクールを成功させよう」の４編を担当した。
	「栄養教諭をめざす人たちへ ～栄養教諭による特別活動の指導、栄養教諭による道徳の指導～」（分担執筆） （日本文教出版株式会社『栄養教諭』2019 年秋号 pp.70～71，2020 年冬号 pp.62～63）
	（概要）チーム学校が提唱され、学校における栄養教諭への期待も日々大きくなっている。そこで、特別活動と特別の教科道徳の指導内容を概観し、栄養教諭としてどのように関わり指導すればよいかを提言した。
	「決める力をもった子どもたち」（単著）　（梓書院　令和３（2021）年３月）
	（概要）子ども達は時として「決断」を迫られ、その時に、親と子で迷い考え、試行錯誤して最善の方法を見つけていく。その段階で子どもが納得しているか否か、ここに大きな意味がある。子育てに悩む保護者や教師に向けて、多くのエピソードを交えながら、逞しい子どもたちの姿を紹介した。
	「広がる不安、焦らず習得を」　（西日本新聞　令和４（2022）年２月６日朝刊） （概要）コロナ禍における実技系の学生の厳しい実態を読者に知らせ、社会全体として温かい目で成長を見守ろうと、呼びかけた。また、学生には、夢や希望を諦めずしぶとい意欲をもち続けて成長しようと伝えた。
【論　文】	1.「生活者として共に家庭生活を営む児童生徒の育成」（共著） （平成 14(2002)年２月　福岡市教育委員会研究報告 631 号）
	（概要）小学校・中学校・高校の４名の教諭による協同研究で，中学校の実践と考察を担当した。家庭科教育の中で児童・生徒に生活者としての視点をいかに持たせるかをテーマにして，小学校・中学校・高校で一貫したカリキュラムを編成した。
	2.「家庭科の基礎･基本を確かに身につける教育課程の展開」（共著） （平成 15(2003)年２月　福岡市教育委員会研究報告 651 号）
	（概要）新学習指導要領の完全実施に向け，家庭生活スキルの定着を大切にしながら，小学校・中学校の系統性を大切にした教育課程を編成した。
	3.「生きる力を育む家庭科の学習指導」（単著） （平成 16(2004)年２月　福岡市教育センター教育論文）

（概要）新学習指導要領の掲げる「生きる力」を家庭科教育の中でどのように育成するかを研究した。指導と評価の一体化を大切にして，生徒の興味関心を高める手立てを検証しながら論文にまとめ，福岡市において優秀賞を受賞した。

4.「小･中･高等学校の系統性を重視し，家庭生活スキルが身に付く新 教育課程の展開」
（平成 17(2005)年 8 月　第 56 回全国家庭科教育協会全国大会紀要）

（概要）小学校・高校の教諭と 3 名で研究し，中学校の関連部分を担当した。小学校・中学校・高校の系統性を大切にしながら，家庭生活スキルが身に付く新学習指導要領の展開を論文にまとめ，福岡県代表として紙上で発表した。

5.「生徒の意識調査から見た小中連携教育の成果と課題」
（平成 26(2014)年 3 月　九州大学大学院（修士論文）pp. 1～100）

（概要）中 1 ギャップを解消するためには小中連携の取組が欠かせない。そこで福岡市内 1,000 人の中学生を対象に量的意識調査を行い，小中連携の成果と課題を検証し，修士論文にまとめた。

6.「特別活動（学校行事）における校種間連携についての一考察」
（平成 30(2018)年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 183～194）

（概要）多くの中学校で特別活動（学校行事）として実施されている新入生説明会を取り上げ、参加前後の小学 6 年生の意識の変化をもとに、校種間連携の効果と今後の課題を明らかにした。

7.「栄養教諭を目指す学生の動機等の解明」
（令和元(2019)年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 207～216）

（概要）本学食物栄養学部栄養教諭教職課程の開設からの実績をまとめるとともに、学生対象の意識調査から履修・未履修の動機や中断の理由、履修による資質能力の伸長の実態等をまとめた。

8.「栄養教諭教職課程の学びをより良いものにするための一考察
―免許取得学生による振り返りから―」
（令和 2(2020)年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 107～115）

（概要）本学における 15 年間の栄養教諭養成を振り返り、明らかになった課題の一つである「履修学生の負担」を軽減し中断者を減らす方法、さらに積極的に学習に向かうための方策を探った。

9.「コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響：その 1
―生活面に着目して―」
（令和 3(2021)年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 71～83）

（概要）「コロナ禍」における大学生の生活や心情について調査を行い、コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与える影響について、生活面を中心に報告した。

10.「コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響：その 2
―心身の健康状態に着目して―」
（令和 3(2021)年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 85～97）

（概要）「コロナ禍」における大学生の生活や心情について調査を行い、コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与える影響について、心身の健康状態を中心に報告した。

11. 「『コロナ禍』における大学生の不安　―管理栄養士を目指す学生に焦点を当てて」
（令和 4(2022)年 6 月　九州教育経営学会研究紀要　第 28 号 pp. 69～78）

（概要）「コロナ禍」が数年にわたって進行する中、学生がどのような不安を抱えながら日々を過ごし、その不安がどう変化しているかを明らかにした。

12. 「夜間中学校の変遷と『福岡きぼう中学校』の開校について」
（令和 4(2022)年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 81～96）

（概要）H28 年に制定された「教育機会確保法」により、様々な事情で十分な義務教育が受けられなかった人たちのための公立の夜間中学校の開校が、全国で広がっている。夜間中学校の歴史を戦後混乱期からの振り返るとともに、R4 年に福岡市に開校した「きぼう中学校」の開校の経緯を記録した。

13.「大学生へのジェンダー平等教育に関する一考察」
（令和 5(2023)年 12 月　　九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 43～52）
（概要）現在の日本におけるジェンダギャップを概観し、少子化や女性の貧困などの社会問題との関連を読み取ったうえで、他大学の状況なども参考にしながら大学におけるジェンダー平等教育の必要性を明らかにした。

【学会発表】

「中学校ブロックにおける小中連携の取組と中学生の意識」（単独）
（平成 27(2015)年 1 月　第 91 回九州教育経営学会）
（概要）これまでの小中連携の取組や，修士論文研究で行った中学生の意識調査をもとに，中学校ブロックにおける効果的な連携や配慮すべき点をまとめて発表した。

「中学校における男女混合名簿の採用と生徒の意識」（単独）
（平成 28(2016)年 11 月　第 96 回九州教育経営学会）
（概要）福岡市立中学校では男女混合名簿の採用がなかなか進んでいない。その背景を調べ，混合名簿の採用は生徒の社会性とどのような相関があるのかを調査した。

「小中連携行事の効果を探る」（単独）
（平成 30(2018)年 8 月　第 33 回日本学校教育学会）
（概要）福岡市の事例をもとに、小学校と中学校が情報共有のもと学校行事を実施することで、中学入学を前にした小学生の意識がどのように変化したかを調査研究し、小中連携行事の効果を検証した。

「栄養教諭を目指す学生の動機等に関する研究」（単独）
（令和元(2019)年 11 月　第 103 回九州教育経営学会）
（概要）2005 年にスタートした栄養教諭制度を概観し、大学における栄養教諭養成における課題や、教職課程を履修する学生の動機などに関する意識調査の結果を報告した。

主な社会活動

福岡市総合図書館運営審議会委員	（平成 24 年度）
福岡県学校給食審議会委員	（平成 25 年度）
福岡県高等学校入試長期計画策定委員会委員	（平成 25～26 年度）
福岡県中学校道徳教育研究会副会長，福岡市会長	（平成 25 年度～平成 28 年度）
福岡市中学校校長会　人材育成委員会委員長	（平成 25 年度～平成 27 年度）
福岡県立筑紫丘高等学校　学校評議委員会委員	（平成 27 年度～平成 28 年度）
福岡県社会福祉協議会委員	（平成 28 年度）
福岡市人権読本「ぬくもり」検討委員	（平成 28 年度）
福岡県非行防止・ネット依存防止ミーティング 登録講師	（平成 30 年度～現在に至る）
福岡県大規模小売店舗立地審議会委員	（令和 4 年～現在に至る）
福岡市男女共同参画審議会委員	（令和 4 年～6 年度）
北九州市教員育成協議会委員	（令和 5 年度）
福岡県男女共同参画センター　アスバル　登録講師	（令和 6 年～現在に至る）

所属学会

日本学校教育学会　　日本道徳教育学会
日本カウンセラー協会　　九州教育経営学会

受賞歴

福岡市教育委員会　教育論文　優秀賞	（平成 16 年 3 月）
全国公立小・中学校女性校長会　永年勤続表彰	（平成 29 年 3 月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

林（はやし） 勝裕（かつひろ）　HAYASHI Katsuhiro　特任教授

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	[食物栄養学部　食物栄養学科] ・食品流通論 ・食と経済 [食物栄養学部　食環境データサイエンス学科] ・食と経済 [こども教育学部　こども教育学科] ・消費者行動論 [東筑紫短期大学　保育学科] ・情報処理学 [東筑紫短期大学　食物栄養学科] ・情報処理学 ・食品流通論
専門分野	■マーケティング論 ■流通論
最終学歴	九州産業大学大学院　商学研究科　商学専攻　博士課程単位取得退学
学位	修士（商学）
職歴	東和大学 工学部 経営工学科　副手　（1982年4月～1983年3月） 東和大学 工学部 経営工学科　助手　（1983年4月～1987年3月） 東和大学 工学部 経営工学科　講師　（1987年4月～2005年3月） 東和大学 工学部　情報学科　講師　（2005年4月～2008年3月） 九州産業大学 理工学部　非常勤講師（流通システム論）　（2005年9月～2023年3月） 長崎県立大学（佐世保校）非常勤講師（情報処理演習）　（2008年4月～現在に至る） 保健医療経営大学 保健医療経営学部 准教授　（2008年4月～2015年3月） 九州産業大学 商学部 非常勤講師（マーケティング論）　（2007年4月～2021年3月） 福岡カレッジオブビジネス専門学校 非常勤講師（マーケティング論）　（2009年4月～2025年3月） 九州産業大学 理工学部 非常勤講師（計画と管理）　（2009年9月～2024年3月） 東筑紫短期大学 保育学科 非常勤講師（情報処理学）　（2012年4月～2025年3月） 東筑紫短期大学 食物栄養学科 非常勤講師（情報処理学）　（2012年9月～2025年3月） 保健医療経営大学 保健医療経営学部　教授　（2015年4月～2023年3月） 保健医療経営大学 情報メディアセンター長　（2017年4月～2023年3月） 保健医療経営大学 学術研究委員長　（2018年4月～2023年3月） 保健医療経営大学 倫理審査委員長　（2018年4月～2023年3月） 学校法人ありあけ国際学園（保健医療経営大学）評議員　（2020年4月～2023年3月） 熊本県立大学　非常勤講師（現代社会と企業）　（2020年9月～2025年3月） 西日本短期大学　非常勤講師（コンピュータ演習）　（2025年4月～現在に至る） 九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科 特任教授　（2025年4月～現在に至る）
教育上の業績	○人材育成事業として、社会人対象の病院職員セミナーで講師　（2009年4月） テーマ：「医療分野におけるマーケティングの仕方について」 ○福岡商工会議所主催　福岡市の商店街の活性化について講演　（2010年10月） テーマ：「九州新幹線開業に伴う福岡市商業の動向と商店街の活性化について」
主な研究活動	【著書】 「現代マーケティング戦略論」五絃舎（2004年6月）（共著） 山本久義（編者）、林勝裕　他6名 （概要）担当部分：第6章　卸売業のマーケティング戦略（pp.132～160） 卸売業者に焦点を当て、彼らの直面する問題点を明らかにするとともに、厳しい経営環境の中で隆盛をみている卸売業者を対象にその企業行動の分析を通じて、今後の課題と展望を考察し、これか

らの彼らが存続・発展してゆくために求められるマーケティング戦略のあり方について言及する。

【文部科学省科学研究費】

「マルチエージェントモデルによる自治体病院の統合可否と
人工知能評判分析の研究」（研究分担者）
（共著）川島秀樹、林勝裕、後藤浩士
基盤研究（C）、総額442万円、2018年～2022年）

【学術論文】

1.「地方自治体におけるOA化の現状（福岡県の場合）」（単著）
（東和大学紀要　第12号　pp.35～41　1986年12月）

2.「企業のOA化推進状況及びｵﾌｨｽ環境の現状（福岡県の場合）」（単著）
（東和大学紀要　第13号　pp.41～53　1987年12月）

3.「女子短大生の就職調査に関する地域分析」
（共著）西戸富雄、林勝裕、合田利男、緒方加代子
（東和大学紀要　第20号　pp.97～121　1994年12月）

4.「仕事観モデルの主成分分析による地域別分析」
（共著）西戸富雄、林勝裕、合田利男、緒方加代子
（東和大学紀要　第20号　pp.123～147　1994年12月）

5.「農業における経営情報の研究（福岡県北九州地区の場合）」（単著）
（東和大学紀要　第21号　pp.149～161　1995年12月）

6.「九州地区中堅企業における情報化の進展（現状と今後の課題）㈱正興電機製作所」
（共著）山川典宏、林勝裕
（ｵﾌｨｽ・ｵｰﾄﾒｰｼｮﾝ学会誌September1997 Vol.18 NO.2　pp.57～61）

7.「農村MPIS」の現状とその課題」（単著）
（東和大学紀要　第23号　pp.85～94　1997年12月）

8.「地方自治体の情報ｼｽﾃﾑ部門におけるｱｳﾄｿｰｼﾝｸﾞの有効性「宮城県の事例」（単著）
（東和大学紀要　第25号　pp.183～190　1999年12月）

9.「ワン・トゥ・ワン・マーケティングに関する一研究」（単著）
（東和大学紀要　第28号　pp.63～70　2002年12月）

10.「卸売業のマーケティング戦略
－日本の卸売企業の実態と、その将来に関する展望－」（単著）
（九州産業大学大学院商学研究科　pp.1～32　2004年1月）

11.「「卸売業の課題と展望」（単著）
（東和大学紀要　第29号　pp.27～33　2004年12月）

12.「飯塚市の中心市街地にみるまちづくり3法の適用　－その実態と課題－」（単著）
（九州産業大学大学院論文集 商学研究 第7巻第1号 pp.25～45　2007年12月）

13.「飯塚市中心市街地活性化における課題」（単著）
（九州産業大学大学院論文集 商学研究 第8巻第1号 pp.17～35　2007年12月）

14.「福岡県飯塚市の中心商店街が直面する問題点と対応策」（単著）
（保健医療経営大学 紀要創刊号 pp.103～108　2009年1月）

15.「福岡県飯塚市の中心商店街における課題と展望」（単著）
（日本商業施設学会誌　第7回 研究発表論文集、pp.29～34　2009年7月）

16.「都市の中心商店街における問題点と対応策 －福岡県飯塚市の事例より－」（単著）
（九州経済学会年報 第47集（査読）pp.147～151　2009年12月）

17.「地方都市中心商店街の構造的課題」（単著）
（日本商業施設学会誌 第8回 研究発表論文集（査読）（学会賞）、pp.60～65　2010年9月）

18.「九州新幹線全線開通に向けた福岡市の市場一極集中と百貨店の取り組み」（単著）
（日本商業施設学会誌 第9回 研究発表論文集、pp.37～46　2010年9月）

19.「医療サービスにおける患者満足に関する一考察 －医療情報の非対称性を中心に－」（単著）
（日本商業施設学会誌 第10回 研究発表論文集、pp.40～49　2011年10月）

20.「伊万里の窯元におけるマーケティング戦略・事例」（単著）

（日本商業施設学会誌 第11回 研究発表論文集、pp. 57～64　2012年10月）

21. 「医療サービスの品質と顧客満足」（単著）
（日本商業施設学会誌 第12回 研究発表論文集、pp. 107～115　2013年12月）

22. 「ドラッグストア業界の現状と収益性強化への取り組みに関する一考察」（単著）
（日本商業施設学会誌 第15回 研究発表論文集、pp. 71～80　2017年8月）

23. 「マーケティング視点からみた屋台の現状と課題 ー福岡市の事例ー」（単著）
（日本商業施設学会誌 第13回 研究発表論文集、pp. 36～45　2017年12月）

24. 「ドラッグストアにおける業態革新と今後の方向性」（単著）
（日本商業施設学会誌 第16回 研究発表論文集、pp. 24～30　2017年12月）

25. 「スマホ社会における市場環境と消費者行動」（単著）
（日本商業施設学会誌 第17回 研究発表論文集、pp. 150～159　2018年12月）

26. 「自治体病院の統合可否に関する問題点について」（共著）川島秀樹、林勝裕、後藤浩士
（第69回聖マリア医学会　学術集会抄録p.39　2018年12月）

27. 「自治体病院の存在意義と医療マーケティング
ー福岡県八女・筑後医療圏を事例としてー」（単著）
（日本商業施設学会誌 第18回 研究発表論文集、pp. 36～45　2020年3月）

28. 「コンシューマライゼーションの進展に伴う消費者行動ならびに市場環境の変化」（単著）
（保健医療経営大学　紀要　第12号、pp. 17～28　2020年3月）

29. 「デジタル社会に向けたマーケティングの新たな視点」（単著）
（日本商業施設学会誌 第21回 研究発表論文集、pp. 95～104　2023年3月）

30. 「Z世代における消費行動の変化とマーケティングのあり方」（単著）
（東筑紫短期大学紀要 第54号、pp. 259～275　2023年12月）

【学会発表】

1. 「九州地区中堅企業における情報化の進展「現状と今後の課題」（10企業）
担当 企業㈱正興電機製作所　　共同：山川典宏（九州産業大学）、林勝裕（東和大学）
（オフィス・オーメーション学会九州支部研究会、1997年9月、福岡市）

2. 「ワン・トゥ・ワン・マーケティング゛に関する一考察」（単著）
（日本商業学会研究部会：2002年10月、福岡市）

3. 「ワン・トゥ・ワン・マーケティング゛の展望と課題」（単著）
（第47回　OA学会全国大会：2003年9月、姫路市）

4. 「天神商業施設の変遷と現状」（単著）
（第7回日本商業施設学会九州・沖縄部会：2005年4月、福岡市）

5. 「飯塚市の中心市街地活性化の取り組みについてー実態と課題ー」（単著）
（第14回日本商業施設学会九州・沖縄部会：2008年1月、福岡市）

6. 「福岡県飯塚市の中心商店街における課題と展望」（単著）
（第15回日本商業施設学会九州・沖縄部会：2008年6月、福岡市）

7. 「福岡県飯塚市の中心商店街における課題と展望」（単著）
（日本商業施設学会　第7回全国大会：2008年8月、東京都）

8. 「都市の中心商店街における問題点と対応策ー福岡県飯塚市の事例よりー」（単著）
（九州経済学会第58回大会：2008年8月、福岡市）

9. 「地方都市の中心市街地活性化における問題点と対応策」（単著）
（第4回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2009年2月、福岡市）

10. 「商店街の構造的課題ー福岡県飯塚市の事例よりー」（単著）
（日本商業施設学会　第8回全国大会：2009年7月、東京都）

11. 「医療機関におけるマーケティング思考」（単著）
（第5回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2009年8月、福岡市）

12. 「医療機関におけるサービス・マーケティングのあり方」（単著）
（第17回日本商業施設学会九州・沖縄部会：2009年10月、福岡市）

13. 「医療機関のマーケティングのあり方 ー民間医療機関を中心にー」（単著）

（日本商業学会研究部会：2009 年 11 月、福岡市）

14. 「地方都市中心商店街の構造的課題と
その周辺商業施設の動向ー福岡県飯塚市の事例よりー」（単著）
（第 6 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2010 年 2 月、福岡市）

15. 「福岡市商業施設の動向ー九州新幹線全線開通を迎えてー」（単著）
（第 19 回 日本商業施設学会九州・沖縄支部：2010 年 7 月、福岡市）

16. 「九州新幹線全線開通に向けた福岡市の市場一極集中と百貨店の取り組み」（単著）
（日本商業施設学会 第 9 回全国大会：2010 年 7 月、東京都）

17. 「福岡市の市場性と百貨店の取り組みについて」（単著）
（第 8 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2011 年 2 月、福岡市）

18. 「医療情報の非対称性と患者満足への取り組みに関する一考察」（単著）
（日本商業施設学会 第 10 回全国大会：2011 年 8 月、東京都）

19. 「医療機関における患者意識の顕在化とその対応策」（単著）
（第 9 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2011 年 8 月、福岡市）

20. 「医療機関の経営環境と患者満足への取組みに関する一考察」（単著）
（第 21 回 日本商業施設学会九州・沖縄部会研究会：2011 年 10 月、福岡市）

21. 「有田焼陶磁器業界の動向について–インタビュー調査（中間報告）–」（単著）
（第 10 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2012 年 2 月、福岡市）

23. 「陶磁器産業の現状と窯元の取り組みー伊万里の大川内山窯元の事例紹介ー」（単著）
（第 11 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2012 年 8 月、福岡市）

24. 「伊万里焼の窯元にみられるマーケティング戦略ーA 社の事例を中心にー」（単著）
（日本流通学会九州部会研究会：2012 年 8 月、佐賀市）

25. 「医療サービス組織の品質および信頼性に関する一考察」（単著）
（第 12 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2013 年 2 月、福岡市）

26. 「医療サービスのデリバリー・システムに関する一考察」（単著）
（第 23 回 日本商業施設学会九州・沖縄部会：2013 年 7 月、福岡（みやま市））

27. 「医療サービスの特質と品質について」（単著）
（第 13 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2013 年 7 月、福岡市）

28. 「医療サービスの品質と顧客満足」（単著）
（日本商業施設学会 第 12 回 全国大会：2013 年 9 月、東京都）

29. 「福岡市における屋台との共生のあり方」（単著）
（第 14 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2014 年 2 月、福岡市）

30. 「福岡市における屋台の変遷と存続意義」（単著）
（第 24 回日本商業施設学会九州・沖縄部会：2014 年 3 月、福岡市）

31. 「我が国におけるコーヒー文化の変遷と特質」（単著）
（第 15 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2014 年 8 月、福岡市）

32. 「マーケティング視点からみた屋台の現状と課題ー福岡市の事例ー」（単著）
（日本商業施設学会 第 13 回全国大会：2014 年 8 月、東京都）

33. 「ドラッグストア業界の現状と市場動向（中間報告）」（単著）
（第 25 回 日本商業施設学会　九州・沖縄部会：2016 年 6 月、福岡市）

34. 「ドラッグストア業界の現状と売上構成比に見る市場戦略のあり方」（単著）
（第 19 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2016 年 8 月、福岡市）

35. 「ドラッグストア業界の現状と収益性強化への取り組みに関する一考察」（単著）
（日本商業施設学会 第 15 回 全国大会：2016 年 8 月、大阪府）

36. 「ドラッグストア業態各社によるビジネスモデル構築に向けた取り組み」（単著）
（第 20 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2017 年 2 月、福岡市）

37. 「ドラッグストア業態各社のマーケティング戦略」（単著）
（第 21 回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2017 年 8 月、福岡市）

38. 「ドラッグストアにおける業態革新と今後の方向性」（単著）
（日本商業施設学会 第 16 回 全国大会：2017 年 8 月、名古屋市）

	39. 「スマホ社会における市場環境と消費者行動」（単著） （日本商業施設学会 第17回 全国大会：2018年8月、福岡市）
	40. 「自治体病院の統合可否に関する問題点について」（共著）川島秀樹、林勝裕、後藤浩士 （第69回聖マリア医学会学術集会（於：シティプラザ久留）：2018年12月、福岡市）
	41. 「地域医療圏における自治体病院の現状と課題　一般市民へのアンケート調査から」 （共著）川島秀樹、後藤浩士、林勝裕 （九州経済学会　第56回全国大会：2018年8月、下関市）
	42. 「ソーシャル・メディア普及に伴う消費者行動と流通の変革」（単著） （第22回 関西ベンチャー学会九州研究部会：2019年2月、福岡市）
	43. 「公立病院の統合問題と産業連関表による経済効果」（共著）川島秀樹、後藤浩士、林勝裕 （日本経済政策学会第76回全国大会（城西大学坂戸キャンパス3E2）：2019年6月、埼玉）
	44. 「公立病院の経営環境と医療マーケティング」（単著） （第4回中部経済研究部会・第24回九州研究部会合同研究会：2019年8月、名古屋市）
	45. 「自治体病院の存在意義と医療マーケティング ー福岡県八女・筑後医療圏を事例としてー」（単著） （日本商業施設学会 第18回 全国大会：2019年8月、東京都）
	46. 「病院経営とマーケティング・コミュニケーション」（単著） （第25回九州ベンチャー学会九州研究部会：2020年2月、神戸市）
	47. 「地域特産品によるブランディング戦略」（単著） （第28回九州研究部会・第6回中部経済研究部会合同研究会：2021年7月、Zoomで開催）
	48. 「デジタル社会のマーケティングに関する一考察」（単著） （第38回　日本商業施設学会九州・沖縄部会：2023年1月、福岡（北九州市））
	49. 「デジタル社会に向けたマーケティングの新たな視点」（単著） （第31回 関西ベンチャー学会　九州研究部会：2023年3月、福岡市）
	50. 「Z世代の思考と消費購買行動パターン」（単著） （第32回　関西ベンチャー学会　九州研究部会：2023年9月、福岡（北九州市））
	51. 「Z世代の消費行動と求められる企業のスタンス」（単著） （第40回　日本商業施設学会九州・沖縄部会：2023年11月、福岡市）
主な社会活動	・日本情報経営学会九州支部幹事（旧：OA学会）（1994年10月～2003年9月） ・日本商業施設学会九州・沖縄部会事務局長（2005年12月～2023年3月） ・日本商業学会 九州部会事務局担当（2010年5月～2013年5月） ・日本商業施設学会 九州沖縄部会 理事（2016年5月～現在に至る）
所属学会	日本商業施設学会（2003年6月～現在に至る） 九州経済学会（2007年12月～現在に至る） 関西ベンチャー学会（2007年12月～現在に至る）
受賞歴	日本商業施設学会　学会賞（優秀論文賞）受賞（2011年8月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

横山 和彦（ヨコヤマ カズヒコ）　YOKOYAMA Kazuhiko　特任教授

所　　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・コンピュータリテラシーⅠ，コンピュータリテラシーⅡ
	〔食物栄養学部 食環境データサイエンス学科〕 ・センシングと信号処理 ・先端ロボティクス論
専 門 分 野	■ 情報工学 ■ ロボット制御システム
最 終 学 歴	九州大学 工学研究科情報工学専攻 修了
学　　位	修士（工学）
職　　歴	株式会社 安川電機基礎研究所自動化技術研究室配属後，産業用ロボット，サービスロボットの研究開発に従事．経産省および文科省の国家プロジェクトにて事業副責任者，企業責任者を担当．（1982 年 4 月～2024 年 3 月） 株式会社安川電機 つくば研究所 所長（2008 年 4 月～2017 年 3 月） 佐世保工業高等専門学校電子制御工学科 教授（2020 年 4 月～2024 年 3 月） 九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科 特任教授（2025 年 4 月～現在に至る）
教育上の業績	○ 佐世保高専にてパーソナルコンピューターによる産業用ロボットのリアルタイム制御システムに関する卒業研究を指導（2020 年 4 月～2024 年 3 月）
	○ 佐世保高専にてロボットの研究開発の歴史，ロボットシステムの仕組み，産業用ロボットのアプリケーション等に関する授業を実施（2021 年 4 月～2024 年 3 月）
	○佐世保高専にてベイズ確率の応用に関する授業を実施（2022 年 4 月～2024 年 3 月）
主な研究活動	【研究開発】下記のロボット研究開発等に従事
	1. 産業ロボットシステムの研究開発 ロボットアームの軌跡制御，アーク溶接ロボット用センサ，配電線保守作業ロボットシステム，半導体ウェハ搬送ロボット制御装置，金型磨きロボットシステム，三次元計測ユニット 2. サービスロボットの研究開発 ヒューマノイドロボット（HRP：NEDO プロジェクト）， 搬送ロボット（Helpmate，食事搬送ロボット）， リハビリテーションロボット（下肢運動療法装置 TEM）， 教育用ロボットシステム（RTLab），多指ハンド
	【学会発表】
	1． ヒューマノイドの屋外共同作業への応用 <主　　催> 第 20 回日本ロボット学会学術講演会 <開 催 場 所> 豊中市 <開催年月日> 2002 年 10 月
	(概要) 横山和彦，安田賢一，深瀬勇太郎，河井良浩，赤地一彦，五十棲隆勝，金広文男，金子健二，比留川博久 産業技術総合研究所（産総研），川田工業，清水建設，安川電機による共同研究（NEDO ヒューマノイド・ロボティクス・プロジェクト．HRP）に関する報告．本研究開発では、二足歩行運動制御装置，ステレオビジョン，音声指示インターフェースや双腕協調制御を搭載した二足歩行型ロボット HRP-2P を開発し，オペレーターと HRP-2P が協調して物を搬送する実証実験を実施．所属企業は双腕協調制御，音声指示インターフェースを担当．
	2． Cooperative works by a human and a humanoid robot. <主　　催> 2003 IEEE International Conference on Robotics and Automation <開 催 場 所> 台北市（台湾） <開催年月日> 2003 年 9 月
	(概要) 横山和彦，半田博幸，五十棲隆勝，深瀬勇太郎，金子健二，金広文男，河井良浩，富田文明，比留川博久

産総研，川田工業，清水建設，安川電機による共同研究（NEDO　ヒューマノイド・ロボティクス・プロジェクト．HRP）に関する報告．本研究開発ではオペレーターの音声指示に従って HRP-2P が作業対象物(家屋の外壁板)の置かれている位置を検出して，そこまで移動し，さらにオペレーターと協調して設置場所まで搬送して建付けの準備をするという一連の作業を実証実験として実施．所属企業は双腕協調制御，音声指示インターフェースを担当.

３．７自由度双腕移動型ロボット SmartPal の開発
<主　　催> 第 23 回日本ロボット学会学術講演会
<開 催 場 所> 横浜市
<開催年月日> 2005 年 9 月

(概要) 河野大，松熊研司，半田博幸，横山和彦
双腕移動型ロボット SmartPal の機能を実証するために愛知万博で実施したデモンストレーション(RoboCafe）に関する報告．SmartPal は，2 本の 7 自由度アーム，全方向移動機構，音声インターフェース機能や環境認識機等を搭載したロボットシステム．RoboCafe は喫茶店で客が注文した飲食物をロボットが提供する一連の作業で構成されたデモンストレーション.

４．施設内生活支援ロボット知能の研究開発 ―移動ユニットとアームユニットの RTC 化―
<主　　催> 第 26 回日本ロボット学会学術講演会
<開 催 場 所> 神戸市
<開催年月日> 2008 年 9 月

(概要) 足立勝，亀井泉寿，中村高幸，横山和彦
双腕移動型ロボット SmartPal で使用している 7 自由度アームと全方向移動機構の RT コンポーネント化に関する報告．RT コンポーネントとは，移動機構，アーム機構，音声認識，環境認識などを RT ミドルウェアに対応させて様々なロボットの開発で活用できるようにした部品である。

５．施設内生活支援ロボット知能の研究開発 －作業知能モジュール群の有効性検証－
<主　　催> 第 27 回日本ロボット学会学術講演会
<開 催 場 所> 横浜市
<開催年月日> 2009 年 9 月

(概要) 包原孝英，中村高幸，亀井泉寿，足立勝，横山和彦
産総研，九大，九工大，安川電機による共同研究(NEDO 次世代ロボット知能化技術開発プロジェクト）で取り組んだ研究開発テーマ(施設内生活支援ロボットの作業)に関する報告．本研開発では，病院や介護施設において日常的に発生する日用品の取り寄せなどを想定し，作業内容，作業対象及び作業環境の多様性に対応できる作業知能モジュールを開発した. 所属企業は双腕移動型ロボット SmartPal を用いた作業（物品ハンドリング等）の開発を担当.

６．施設内生活支援ロボット知能の研究開発－作業知能モジュール群の有効性検証(第３報)－
<主　　催> 第 29 回日本ロボット学会学術講演会
<開 催 場 所> 東京
<開催年月日> 2011 年 9 月

(概要) 足立勝，横山和彦，辻徳生，長谷川勉，大橋健，林久志，田村雄介，山口 亨，川端 聡，松坂要佐
産総研，九大，九工大，東大，首都大学東京，東芝，安川電機による共同研究(NEDO 次世代ロボット知能化技術開発プロジェクト)で取り組んだ研究開発テーマ(施設内生活支援ロボットの作業)に関する報告．本テーマでは実際の介護施設を模擬した実証環境において各組織の開発成果を統合した実証実験を行った．所属企業は双腕移動型ロボット SmartPal による日用品の搬送および実証環境構築を担当.

７．The role of joint stiffness enhancing collision reaction performance of collaborative robot manipulators.
<主　　催> 2012 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems
<開 催 場 所> ヴィラマウラ（ポルトガル）
<開催年月日> 2012 年 10 月

(概要) 岸泰生，山田陽滋，横山和彦
ロボットと人間の接触事故を模擬した実験及びシミュレーションに関する報告．ロボットの慣性，速度，ロボットのソフトカバーの厚さ，関節の硬さを変化させ、実験システムにいくつかの衝突検知・

	反応手段を実装して，人間の安全性への寄与を評価した．関節合成が衝突反応性能に大きく影響し，安全性に重要な役割を果たすことがわかった．
	８． 産業用ロボットMOTOMAN用RTコンポーネントの開発 <主　　催> ロボティクス・メカトロニクス講演会 2015 <開 催 場 所> 京都 <開催年月日> 2015年5月
	(概要) 中村高幸，足立勝，横山和彦 産業用ロボットMOTOMANのRTコンポーネント化に関する報告。RTコンポーネント化することによりRTミドルウェアを介して作業環境の変化に応じてプランニングなどを行う知能型RTコンポーネントとの連携を可能とした．
主な社会活動	○ 一般社団法人日本ロボット学会 庶務理事 (2010年4月～2012年3月) ○ 一般社団法人日本ロボット学会 代議員 (2012年6月～2016年5月) ○ 第6回ものづくり日本大賞青少年部門審査委員（文科省） (2015年4月～2015年9月) ○ World Robot Summit 競技会準備委員会委員（経産省） (2016年4月～2017年3月) ○ 第7回ものづくり日本大賞青少年部門審査委員（文科省） (2017年4月～2017年9月) ○ 第8回ものづくり日本大賞青少年部門審査委員（文科省） (2018年4月～2018年9月)
所 属 学 会	一般社団法人日本ロボット学会 (1983年1月～現在に至る)
受　賞　歴	一般社団法人日本ロボット工業会 正会員従業員功労表彰 (2013年5月) 一般社団法人日本ロボット学会 フェロー (2014年9月)

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

梅﨑（ウメザキ） 義雄（ヨシオ） UMEZAKI Yoshio 〔職位〕准教授

所　　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ ・実用英語Ⅰ、実用英語Ⅱ ・国際理解（海外研修） 〔食物栄養学部 食環境データサイエンス学科〕 ・実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ ・実用英語Ⅰ ・国際理解（海外研修） 〔こども教育学部 こども教育学科〕 ・国際理解（海外研修） 〔リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科〕 ・実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ 〔東筑紫短期大学 食物栄養学科〕 ・英語Ⅰ、英語Ⅱ ・国際理解（海外研修） 〔東筑紫短期大学 保育学科〕 ・国際理解（海外研修）
専門分野	■機械工学 ■粉体力学分野
最終学歴	九州工業大学　工学部機械工学科　卒業
学　　位	学士（機械工学）
職　　歴	泉台学習教室経営（1983年4月～1986年3月） 福岡市東区の晴明美術館でマネージャーとして勤務。（1986年4月～1990年4月） 渡米 Shinkenko America Inc. NY 及び LA 支部長として勤務。（1990年5月～2012年11月） 同団体　財務取締役、そして、その後、秘書取締役を歴任。（1997年9月～2012年11月） 帰国、英会話及び TOEIC 講師として働く。（2013年5月～2017年3月） トライグループ（2013年8月～2017年3月） ECC（2013年8月～2017年3月） Berlitz（2014年8月～2017年3月） アルク教育社（2016年8月～2017年3月） 九州栄養福祉大学　食物栄養学部食物栄養学科講師（2017年4月～2018年3月） 九州栄養福祉大学　食物栄養学部食物栄養学科准教授（2018年4月～現在に至る） 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学　指導主事（2019年4月～2020年3月） 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学　学生指導課長（2020年4月～現在に至る） 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学　学生部次長（2024年4月～現在に至る）
教育上の業績	○2019年11月、米国ベルビューカレッジとの協力提携の調印をまとめる ○2023年10月、フィリピン国ラプラプセブ国際大学との協力提携の調印をまとめる ○2023年度より、9月にアメリカ西海岸、3月にフィリピン・セブ島で、英語圏での海外研修を行っている。
主な研究活動	**1.　日本人が出せない英語音の習得** （概要）日本人が英会話を苦手とする根本的な理由は、日本語の音や抑揚で発話する、いわゆるカタカナ英語にある。英会話習得の基本は、聞きなれない英語の音の一つ一つを発声する能力を日本語では使われない口や舌周りの筋肉を繰り返しトレーニングすることによりマスターすることである。そして、その習得に伴いリスニング力は自然と強化されていく。シンプルに出せる音は聞こえるのである。 **2. 九州栄養福祉大学研究紀要　第20号** 「英語でコミュニケーション　-英語の音作りからリスニングスキル向上へ①-」

	（概要）英語の発話で頻繁にあらわれる、口を縦に大きく開けて出す音、口角を横に強く引いてだす音、唇を突き出して出す音等々は、日本語の通常の発話ではない。ところがそういった基礎的な音作りが、日本人が英語でコミュニケーションをとる際、必須となる。まず、意識して行い、無意識に出せるまで、訓練することが必要である。 **3.　九州栄養福祉大学研究紀要　第 21 号** 「英語でコミュニケーション　-英語の音作りからリスニングスキル向上へ②」 （概要）「なぜ、最初に英語を伝えた日本人は、英語の音を正確に真似てそのまま伝えなかったのだろう。」と、素朴な疑問が起こった。結論は、単純にできなかったのである。では、どうすれば良いのだろうかと実地経験をもとに考察した。

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

小野　要　　ONO　Kaname　　准教授

所　　属	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部学部　　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・食品学総論 ・食品学各論 ・食品基礎実験 ・食品学実験Ⅰ（集中実験） ・食品学実験Ⅱ ・栄養福祉論（分担） ・食品バイオテクノロジー ・食品の官能評価・鑑別演習 ・管理栄養士演習ⅠA ・管理栄養士演習ⅠB ・管理栄養士演習Ⅱ ・専門ゼミナール ・卒業論文
専 門 分 野	■食品科学 ■水族毒性学
最 終 学 歴	鹿児島大学大学院　連合農学研究科博士課程修了
学　　位	博士（水産学）
職　　歴	鹿児島大学教育センター共通教育 非常勤講師　（平成 14 年 5 月～平成 22 年 3 月） 尚絅大学短期大学部 食物栄養学科 准教授　（平成 22 年 4 月～令和 2 年 3 月） 熊本市医師会看護専門学校 非常勤講師　（平成 24 年 4 月～令和 2 年 3 月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 准教授　（令和　2 年 4 月～現在に至る）
教育上の業績	**○ものづくり商品開発等への取組み**（平成 26 年 5 月～令和 2 年 3 月） 栄養士養成課程において専門知識、専門技術の習得を目指している学生に対し、ものづくり体験・食育体験を通じ、食に関して更なる興味を抱いてもらうと同時に献立作成アイデアの向上などを目的とした取組みを行ってきた。これまでに平成 26 年の『TKU の日オリジナル弁当 米平燕(マイピーエン)』、平成 26 年度長島町水産加工グループ受託研究費における『オリジナルさつま揚げのレシピ開発』、平成 28 年度西田精麦株式会社及び尚絅食育研究センター共同開発による『大麦を用いたスイーツ開発』などに参画した。 **○海のお掃除プラントロボット発案への取り組み**（令和 3 年 4 月～令和 3 年 12 月） 海洋ゴミの問題は世界的な問題となり問題解決に向けての対策が急がれる中、「海を綺麗にする」「汚染が進んだ海水の浄化をすること」「プラスチック・釣り具などの海洋ゴミを処理すること」を課題とした。北九州の海洋環境を調べた結果、海水の浄化は、北九州市の問題解決策の効果で改善の方向に進んでおり、海洋ゴミに対する対策は進んでなかった。また、海洋ゴミが生態系に与える影響は絶大であることから海洋ゴミを回収、さらに藻場を作ることによる生物の住処や富栄養化を改善することができる生態系に影響を与えないプラントロボットを考案し、Horasis アジアミーティング北九州「海のお掃除プラントロボット夢コンテスト」に応募した。 **○猪による農作物被害対策および猪肉普及・商品開発等への取組み**（令和 5 年 9 月～令和 5 年 12 月） 北九州市では、近年野生動物による農作物への獣害が問題となっており、猟友会の狩猟した猪をそのまま放置しているのが現状であり、その猪肉を一般的に普及させるため猪肉の特性実験やそれを活用したレシピ開発を行い、11 月中旬開催予定の農林水産祭での市民へ向けた発表や試食提供など普及活動を行った。 【作成した教材等】 **「食べ物と健康　食品の安全」南江堂（2013.4）（共著）**

有薗幸司（編集）、小野 要 他 18 名
（概要）
動植物が保有している有害物質を誤飲して引き起こる食中毒について、管理栄養士・栄養士が知っておく必要がある項目をまとめている。
担当：第 4 章 食中毒 d-自然食中毒（pp.83-91.）（総頁数 243 頁）

○「食べ物と健康　食品の安全」改訂第二版 南江堂（2018.12）（共著）
有薗幸司（編集）、小野要 他 18 名
（概要）
動植物が保有している有害物質を誤飲して引き起こる食中毒について、管理栄養士・栄養士が知っておく必要がある項目をまとめている。
担当：第 4 章 食中毒 F-自然食中毒（pp.102-107.）（総頁数 286 頁）

主な研究活動

【著書等】【学術論文】

【著書等】
○「食べ物と健康　食品の安全」南江堂（2013.4）（共著）（再掲）
有薗幸司（編集）、小野要 他 18 名
（概要）
動植物が保有している有害物質を誤飲して引き起こる食中毒について、管理栄養士・栄養士が知っておく必要がある項目をまとめている。
担当：第 4 章 食中毒 d-自然食中毒（pp.83-91.）（総頁数 243 頁）

○「食べ物と健康　食品の安全」改訂第二版 南江堂（2018.12）（共著）（再掲）
有薗幸司（編集）、小野要 他 18 名
（概要）
動植物が保有している有害物質を誤飲して引き起こる食中毒について、管理栄養士・栄養士が知っておく必要がある項目をまとめている。
担当：第 4 章 食中毒 F-自然食中毒（pp.102-107.）（総頁数 286 頁）

（概要）有毒ラフィド藻に対して有効な防除剤を開発するために、各種高級脂肪酸(C_{12}- C_{18})をモル数の異なるポリエチレンオキサイドと反応させてポリオキシエチレンアルキルエステルを合成し、その防除剤効果と魚毒性について調べた。
担当部分：ほぼ全ての本文を執筆

3. 沖縄県沿岸に分布する腐肉食性および肉性巻貝の毒性と毒成分」（共著）
谷山茂人, 高谷智裕, 反町太樹, 相良剛史, 久保弘文, 大城直雅, 小野　要, 肖　寧, 橘　勝康, 荒川　修
日本食品衛生学会誌, 54(1):49-55（2011）

（概要）水産食品としての巻貝類の安全性確保に資するため、沖縄県沿岸に分布する腐肉食性及び肉性巻貝の 8 科 15 種を対象に毒性スクリーニングを実施し、有毒種の毒性と毒成分を検討した結果、5 種が有毒であり、今後も警戒を続ける必要があると結論づけた。
担当部分：試料採集等

4. 熊本県漁業士会との地域連携学習活動による人材育成について」（共著）
水本恵子、秋吉澄子、小野 要
熊本県生活科・総合学習教育学会誌 生活と総合, 47-53（2013）

（概要）食文化や食材としての水産物が生活に密着しており、魚介類の栄養成分は、生活習慣病予防効果や健康機能成文など注目されているにもかかわらず魚食離れが進んでいる。この現象をふまえ、将来栄養士として活躍が期待される尚絅大学短期大学部学生を対象に熊本県漁業士会と協力し、魚食普及に取組める人材育成を目的に特別セミナーを行った。また、学生に対して魚食に対するアンケートを行い、その結

果について報告した。
担当部分：地域連携学習活動の責任者、アンケート実施及びデータ解析

5. ビタミンD・カルシウム強化牛乳が思春期小児の骨密度に与える影響の検討」（共著）
酒井一樹、西山宗六、小野 要、鈴木光幸、成高中之
小児科臨床 68(5), 1051-1058（2013）

（概要）熊本近郊に在住する思春期前後の女子16例、男子4例に対しビタミンD・カルシウム強化牛乳が骨密度増加に及ぼす影響、尿中カルシウム排泄量による教科牛乳負荷の安全性について検討した。思春期前後の小児の強化牛乳負荷の骨密度の増強に有効で尿路結石を考慮した安全性も高いと考えられた。
担当部分：データ解析及び文献検索

6. 「栄養士養成課程学生における炊き出しボランティア活動経験の効果と今後の課題」（共著）
小野 要、秋吉澄子
熊本県生活科・総合学習教育学会誌 生活と総合, 41-48（2015）

（概要）平成28年熊本地震において認定特定非営利活動法人キャンパーが実施した益城町での炊き出し活動に、尚絅大学短期大学部食物栄養学科の学生53名と教職員8名が参加し、その活動内容と、被災者及び参加した学生に行ったアンケート結果について報告した。
担当部分：論文作成、アンケート実施及びデータ解析を担当

7. 乾燥ナマコの投与がラットの実験的肝再生に及ぼす影響」（共著）
小野 要、川合若菜、宮崎里帆、平坂勝也、谷山茂人、橘 勝康
日本食品化学学会 24(2), 44-49（2017）

（概要）乾燥ナマコ粉末1%及び5%含有飼料を摂取させたラットに対して、実験的に70%部分肝切除手術を行い、実験的肝再生を行った。乾燥ナマコ粉末含有飼料を与えたラットの再生後の肝臓総タンパク質量は対照群で1.27±0.16、5%ナマコ群1.53±0.16と5%ナマコ群が有意に高く、また、肝臓の組織観察においても対照群と比較して 5%ナマコ群に変化が確認できたことからラットの実験的肝再生に乾燥ナマコの投与は有用である可能性が示唆された。
担当部分：論文作成、組織観察及びデータ解析を担当

【研究紀要】
8. 「平成28年熊本地震における益城町での炊き出し活動に参加して」（共著）
秋吉澄子、小野 要
尚絅大学研究紀要, 127-140（2017）

（概要）平成28年熊本地震において認定特定非営利活動法人キャンパーが実施した益城町での炊き出し活動に、尚絅大学短期大学部食物栄養学科の学生53名と教職員8名が参加し、その活動内容を報告した。
担当部分：炊き出し活動の実施と活動内容のまとめ

【学会発表】

1. 「アオリイカ外套筋の氷蔵中における微細構造の変化」（共著）
田中幹大、梁 佳、肖 寧、水谷麻衣子、川口夕貴、小野 要、谷山茂人、橘 勝康
〈主　　催〉日本水産学会
〈開 催 場 所〉長崎大学
〈開催年月日〉2011年

2. 「一本釣り漁獲したカツオの血合筋の肉質と鮮度に及ぼす保存条件の影響」（共著）
梁 佳、槌本六秀、小野 要、黒坂浩平、山下秀幸、小河道生、谷山茂人、橘 勝康
〈主　　催〉日本水産学会

〈開 催 場 所〉長崎大学
〈開催年月日〉2011 年

3. 「養殖プロトロポミオシン特異抗体の作製とヤケ肉発生に伴うトロポミオシンの変化」（共著）
宮崎里帆、肖 寧、小野 要、谷山茂人、橘 勝康
〈主　　催〉日本水産学会
〈開 催 場 所〉長崎大学
〈開催年月日〉2011 年

4. 「コイ氷蔵中における筋タイプ別の生鮮度低下に伴う微細構造の変化」（共著）
梁 佳、槌本六秀、肖 寧、川口夕貴、小野 要、濱田友貴、谷山茂人、橘 勝康
〈主　　催〉日本水産学会
〈開 催 場 所〉長崎大学
〈開催年月日〉2011 年

5. 「東シナ海産アカムツの可食部における一般成分組成とおいしさの関係」（共著）
藤丸達也、梁 佳、小野 要、岡本 昭、森 奈保美、谷山茂人、橘 勝康
〈主　　催〉日本水産学会
〈開 催 場 所〉長崎大学
〈開催年月日〉2011 年

6. 「熊本県漁業士会との地域連携学習活動による人材育成について」（共著）
水本恵子、秋吉澄子、小野 要
〈主　　催〉熊本県生活科・総合学習教育学会
〈開催年月日〉2013 年

7. 栄養士養成課程学生における炊き出しボランティア活動経験の効果と今後の課題」（共著）
小野 要、秋吉澄子
〈主　　催〉熊本県生活科・総合学習教育学会
〈開催年月日〉2017 年

【その他論文等】
8. Groundwater in Ryukyu archipelago is adequate to tear kuruma shrimp *Marsupenaeus japonicas* LARVAE（共著）
Saichiro Yokoyama, Kaname Ono, Yumiko Kimura.
〈主　　催〉養殖業者対象の研究会等
〈開催年月日〉2010 年

主な社会活動

・尚絅公開講座講師　（平成 23 年 9 月）
「キッチンサイエンス」というテーマにて尚絅公開講座の講師を務めた。
・尚絅大学短期大学部夏季研修会講師
例年 9 月に開催される学内研修会において、「人体の構造と機能および疾病の成り立ち・基礎栄養（生化学・栄養学）について講義を担当した。
・菊陽町健康フェア講演会講師　（平成 28 年 2 月）
菊陽町健康フェア（菊陽町健康づくり講演会）「キッチンサイエンス～健康は食事が大事～」というテーマで約 120 名の菊陽町市民に対して講演を行った。
・周望学舎シニアカレッジ「元気にシニアライフを愉しもう 2022」講師　（令和 4 年 10 月）
周望学舎シニアカレッジにおいて「私たちにできること～SDGs から学ぶ～」というテーマで「自然災害や気温上昇による食糧危機」、「食品ロス」について講演を行った。

所 属 学 会

日本水産学会 正会員　（平成 7 年 4 月～現在に至る）

	日本増殖学会 正会員 （平成 7 年 4 月～現在に至る） マリントキシン研究会 正会員 （平成 10 年 4 月～現在に至る） マリントキシン研究会 役員（会計監事） （平成 23 年 4 月～現在に至る） 日本食品衛生学会 正会員 （平成 22 年 9 月～現在に至る） 日本食品化学学会 正会員 （平成 29 年 4 月～現在に至る） 日本食品衛生学会第 116 回学術講演会実行委員会委員 （令和元年 3 月～令和 2 年 5 月）
受　賞　歴	北里大学同窓会若手研究者研究奨励賞 （有毒ラフィド藻 *Heterosigma akashiwo* の出現と二枚貝の毒化に関する研究） （平成 14 年 5 月） Horasis アジアミーティング北九州「海のお掃除プラントロボット夢コンテスト」 審査員特別賞受賞 （令和 3 年 11 月 3 日）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

室井（ムロイ） 由起子（ユキコ） MUROI Yukiko 准教授

所　　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・調理学実習Ⅲ ・栄養士のための農園演習 ・スポーツ栄養学　・管理栄養士演習 〔リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科〕 ・食と農園
専 門 分 野	■　管理栄養士養成 ■　スポーツ栄養学
最 終 学 歴	鹿児島大学　応用生命科学専攻
学　　位	博士（農学）
職　　歴	医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 管理栄養士 （平成 20(2008)年 4 月～平成 22(2010)年 3 月） 学校法人 タイケン学園 日本ウェルネス専門学校北九州校非常勤講師 （「スポーツ栄養学」担当） （平成 23(2011)年 10 月～現在に至る） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 （平成 24(2012)年 4 月～平成 27(2015)年 3 月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助教 （平成 27(2015)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 （平成 29(2017)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科　准教授　（令和 3(2021)年 4 月～現在に至る）
主な研究活動	【学会発表】 「摂食パターンからみた乳製品の栄養生理学的研究 ―運動時の血清クレアチンホスホキナーゼ活性に及ぼす影響を中心として―」 （概要） 牛乳の栄養効果の効果的発現にむけて食物摂取行動としての摂食パターンをとりあげ、CPK をメルクマークとして運動時の筋損傷の修復に及ぼす影響について検討を行った。（第 59 回日本栄養改善学会発表） 「トマト酢」レシピ作りプログラムが管理栄養士養成課程学生の「ライフスキル」に及ぼす影響 （概要） 「トマト酢」の有効性試験を行うための「トマト酢」を用いたレシピ作成プログラムが、発達段階の心身ともに最終段階を迎える年齢期の学生にどのような影響を及ぼすかということに焦点をあて、日常生活スキル尺度（大学生版）を用いて評価・検討をすることを目的とし事前平均値(標準偏差)57.18±6.59 点、事後 63.06±6.51 点と有意に得点が増加した($p<.01$)。管理栄養士として育っていく本学学生に、このような小さな実学体験を通して地についた主体性・創造力を養成できればと思われる。（第 22 回日本健康教育学会発表） 「管理栄養士養成課程学生における自己管理能力育成プログラムの実践」 （概要） 自らの体型に悩みがあり、管理栄養士となる学生が、自己管理能力育成プログラムを実践することで自らの行動変容の難しさを実感し、対象者の気持ちを享受し、質の高い栄養指導に繋げられることを目的とした。対象者は、本学寮生（18.4±0.52 歳）、毎朝身体測定を行い、月に数回の自己管理能力育成プログラムを行い、プログラム前後に食生活アンケートを実施した。プログラム前後において、体重の平均値を検討した結果、10 月 1 週目と 11 月 1 週目において有意に減少した（$p<.05$）。毎朝の身体測定、目標設定の記録を行うことで、自己管理能力が身に付き、また集団で実施することが意識を高めることに繋がり行動変容をし、持続することを促した。（第 22 回日本健康教育学会発表）

「成熟トマト・未成熟トマトの機能性評価」

（概要）

トマトを栽培する場合は、栽培途中に、間引きという作業を行うため、未成熟の青トマトや葉・茎等も廃棄物となる。成熟(赤)トマトおよび未成熟(青)トマトの各部位(蔕・果肉・外皮・葉・枝・根)の水抽出物、EtOH 抽出物における機能性を評価し、廃棄物となる部分を有効活用する方法を探索することで、付加価値の高い新たな利用法を見出すことを目的とした。サンプルの抽出にあたっては、EtOH 抽出物、水抽出物 を調製し、抗酸化活性の測定には、 ORAC 法で行い、メラニン生成抑制活性の測定には、MTT 法による細胞生存率、メラニン量の測定を行った。未使用、廃棄物である葉や青トマトに、抗酸化活性作用・メラニン生合成抑制作用が検出されたため、今後，当該部分を用い、化粧水・美白化粧水等の付加価値の高い利用法の開発が期待される。（第 60 回栄養改善学会発表）

「トマトの部位別におけるリパーゼ阻害活性の検討」

（概要）

成熟（赤）トマト、未成熟（青）トマトを部位別に分類しリパーゼ阻害活性試験を行うことで網羅的にトマトの未利用部分も含めた機能性評価を行った。成熟（赤）トマト、未成熟（青）トマトの各抽出物がリパーゼの活性へ与える影響を検討した結果、トマト(葉)の EtOH 抽出物、トマト(茎)の水抽出物、青トマト(外皮)の水抽出物にリパーゼ活性が確認された（p＜．01）。リパーゼ活性が阻害されるような物質は、摂取エネルギーを低下させ、抗肥満効果を発揮する有効なアプローチの一つとして考えられ、トマトの未利用部位を含めた新規活用法の開発が期待される。（第 60 回日本栄養改善学会発表）

「世界の一体化」をめぐる歴史叙述の試み
―教科に関する科目(大学院)「スポーツ史演習」の教育実践―

本学学生の食意識及び運動習慣

食生活については、国民健康・栄養調査の 18～29 歳の同世代と比較すると
有意な差は認められなかったが、日本人の食事摂取基準と比較すると、推奨量並びに、目標量に達しておらず、管理栄養士、理学療法士、作業療法士を目指し国民の健康増進に携わる専門家としては、まず自らの食行動の見直しが課題となる。特に、心身ともに成熟期を迎える年齢時の「食と運動」の基本姿勢の「確立」はその後のライフスタイルに大きな影響を及ぼすことが考えられることから、この時期での正しい食習慣の形成を重要視しなければならない。

Repression effects　of hydrolysates from hen-egg proteins on amyloid fibril formation
Volume 25, Issue 59, 2022, Pages 384–391,
The Journal of Poultry Science
Yukiko Muroi,Izumi Aburaya, Takuro Shima, Mitsuharu Matsumoto, Ryo Sasahara, Takahisa Suzuki, Keiichi Watanabe, Koji Wada, Yasushi Sugimoto
概要：
鶏卵タンパク質のプロテアーゼ消化物つまりペプチドにアミロイド線維抑制効果があるかを調べ、アミロイド線維形成タンパク質である HEWL に対してペプチドに効果を観察した結果、卵白（EW-ペプチド）およびカラザペプチド（C-ペプチド）に強い抑制効果を認めた。また、ヒトリゾチーム（h-Lz）およびヒトアミロイドβペプチド 1-42（Aβ1-42）の線維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド線維形成を促進する 2 価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。

Stability of hen egg-white lysozyme during embryonic development
Volume 86, Issue 10, October 2022, Pages 1353–1361
Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry
Muroi, Yukiko，Abraya, Izumi，Kiyokawa, Yuki，Watanabe, Keiichi
WADA, Koji，ABE, Yoshito，Sugimoto, Yasushi
概要：
発生過程で卵白タンパク質の機能が維持されているかを検討し、発生過程において、精製されたリゾチームタンパク質は、Micrococcus lysodeikticus に対する酵素活性および溶菌活性、ならびに Staphylococcus aureus に対する増殖阻害能を有することが認められ、胚発生が進行するにつれて、精製されたリゾチームは、Km と Vmax の変化、変性温度のわずかな低下、および表面疎水性の増加を示した。また、トリプトファンの環境にも変化が認められた。リゾチームが発生後期まで、酵素活性および抗菌活性を維持しながら、

多少の構造変化が起きていることが確認された。

豆腐の微細構造とゲル強度に及ぼすトリグリセリドの脂肪酸組成の影響(農芸化学会、2024 年 3 月)
（概要）大豆油の脂肪酸組成は、通常リノール酸約 50%、オレイン酸約 20%であるが、高オレイン酸系統大豆は、オレイン酸含量が 80%以上で著しく高い。
我々は、分離大豆タンパク質（SPI）に通常の大豆油（SO）または高オレイン酸大豆油（HOSO）を添加して豆乳を調製後、凝固剤として CaSO4 を加え、脂質組成の異なる２種の豆腐を作成した。走査型電子顕微鏡で観察した結果、HOSO 豆腐は、SO 豆腐より、密度の高い均一な微細構造をしていることを見出した。さらに、豆腐のゲル強度に及ぼす脂肪酸組成の影響を調べるために、SPI に SO または 80%オレイン酸を含むオリーブオイル（OO）を添加して豆腐を作成し、破断強度試験を行った。その結果、OO 豆腐は、SO 豆腐よりゲル強度が高く、弾力があることが分った。この OO 豆腐の物性は、HOSO 豆腐がより密度の高い微細構造を有していたという結果と一致しており、トリグリセリド中の高いオレイン酸含量に起因するものと考えられる。

分離大豆タンパク質エマルジョンゲルの構造と物性に及ぼす油脂中の脂肪酸組成の影響
（概要） 豆乳から豆腐の形成機構は、粒子タンパク質や可溶性タンパク質の凝集と油滴球との結合が関わっており、食品加工学のみならず、相分離生物学とも関連して、非常に興味深い研究テーマである。大豆油の脂肪酸組成は、通常リノール酸約 50%、オレイン酸約 20%であるが、高オレイン酸系統（高オレ）大豆は、オレイン酸含量が 80%以上で著しく高い。これまで、高オレ大豆豆腐とフクユタカ豆腐を走査型電顕で観察した結果、高オレ大豆豆腐は、フクユタカ豆腐より密度の高い均一な微細構造をしているという興味深い知見を得ている。本研究では、分離大豆タンパク質エマルジョンゲルの構造と物性に及ぼす油脂中の脂肪酸組成の影響を明らかにすることを目的とし、フクユタカ由来の分離大豆タンパク質（SPI）にフクユタカ大豆油、高オレ大豆油、両者を１：１で混合した大豆油を添加して豆乳・豆腐を作成し、構造と物性を比較した。
（第 71 回日本栄養改善学会発表）

環境未来都市北九州における地域連携実践報告～規格外野菜を通じた子どもの居場所支援～
（概要） 北九州市は環境未来都市であり、地域でエネルギーを創り効率的に使うまち・子育てしやすいまち・環境ビジネスの拠点となるまちの実現を目指している[1]。北九州市若松区にある響灘菜園では年間 3100 ㌧のトマトが収穫されており、そのうち、傷ができて出荷できないような C 級品の規格外トマトは年間 100 ㌧あり、廃棄されている。規格外トマトは年間総生産量の 3.2%ではあるが、廃棄にもコストがかかってしまう。持続可能な社会の実現に向けた活動（課題解決）及び子育て支援の在り方を検討した。
(商品化にむけて)できるだけ多くの規格外トマトが使用できることや子どもたちが喜ぶ商品にすることを考えた時、カレーはおいしさだけでなく、トマトの 94%が水分でできているため、無水でカレーができ、栄養的な側面からも効果があるということを謳えるのではないかと、トマト使用のカレーの検討を行った。また、ネーミングやパッケージについても、他大学と連携を進めた。
(規格外野菜の北九州モデル化に向けて)規格外トマトをトマトのおんがえしカレーとして商品化し、その売り上げの一部を子どもたちの居場所づくりにという北九州市オリジナルモデルとして構築した。トマトのおんがえしカレーに使用できるトマトは年間約１㌧のため、今後、地元の企業と連携し、規格外トマトの有効活用の提案を継続していきたい。(大学地域連携学会第４回大会)

【九州栄養福祉大学農園便りの編集】

・「九州栄養福祉大学　農園便り」春季　第一号
・「九州栄養福祉大学　農園便り」秋季　第二号
・「九州栄養福祉大学　農園便り」冬季　特別号三号
・「九州栄養福祉大学　農園便り」春季　第四号
・「九州栄養福祉大学　農園便り」秋季　第五号
・「九州栄養福祉大学　農園便り」冬季　第六号

主な社会活動
(講師依頼)

子育て支援事業講師	平成 25 年～現在
北九州市食育推進委員	平成 29 年～平成 31 年
北九州市農事センター食育講師	平成 29 年～平成 30 年
「(公財)日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会」講師	平成 30 年～現在
福岡県栄養士会スポーツ栄養講師	

	保育所(園)調理研修)講師	令和２年９月
	令和４年度　男二代子育て講座講師	令和４年１月
	大谷市民センター食育講座の講師	令和４年６月
	地域の多面的健康づくり教室講師	令和４年６月
	上毛町立上毛中学校食育講師	令和５年１月
	葛原市民センタースポーツ栄養講師	令和５年６月
	大原医療スポーツ製菓専門学校北九州	令和５年７月
	「教育課程編成委員会」委員	令和５年～
	大谷市民センタ食育講座講師	令和７年
	福岡県幼稚園連盟「食育・アレルギー」講師	令和５年10月
	北九州市保育園連盟　乳幼児期食育講座講師	令和５年11月
		令和５年11月
(地域連携活動)	・世界体操･世界新体操北九州　丸ふじコラボ　スポーツ弁当	令和３年年９月
	・「出張子ども食堂」戸畑区子ども食堂イベントでのトマトカレー提供	令和４年年５月
	・第１回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当	令和４年10月
	・世界水泳福岡2023で、丸ふじとコラボ弁当販売 スポーツ弁当ベジタリアン、最強×西京弁当	令和５年９月
	・北九州市立高校とコラボして、第36回竜王戦でチョウチンジャー弁当作成・販売	令和５年10月
	・第２回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当	令和５年10月
	・トマトのおんがえしサブレシンポジウム開催	令和５年１Ｉ月
	･市長と語ろう！みらいミーティングで､北九州市立高校との取り組みや、九州栄養福祉大学の取り組みを発表	令和５年11月
		令和６年２月
	・地球の歩き方北九州出版イベント、丸ふじ、北九州市立高校コラボ「恵方巻チョウチンジャーバージョンお披露目」	令和６年２月
	・北九州マラソンの給食で、トマトのおんがえしサブレをゆめマートと一緒に配布	令和６年３月
	・北九州市放課後児童クラブのお弁当献立作成 松浦ファームから規格外野菜をいただき、丸ふじが手作りお弁当を作成し子どもたちへ提供	令和６年５月
	・門司みなと祭2024でB&Wとコラボして「九栄大トマトの焼きカレー」販売	令和６年６月
	・井筒屋サステナマルシェでトマトおんがえしカレー、サブレ販	令和６年６月
	・ギラヴァンツ北九州の戸畑・若松・門司区市民感謝デーでトマトサブレ販売	令和６年８月
	･公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）の「1.5℃ライフスタイルワークショップin北九州」でトマトのおんがえし取り組み発表	令和６年７月
	・社会福祉法人聖導会川﨑学舎の無農薬野菜を使用しカフェメニュー考案	令和６年10月
	･Z世代はみ出せコンテスト出場	令和６年10月
	・片野子ども食堂アッシュで手作りトマトのおんがえしカレーを提供	令和６年10月
	・ルンルンマルシェでトマトのおんがえしカレー、サブレ販売北九州空港まつりでトマトのおんがえしカレー、	令和６年10月

	サブレ販売 ・blueStar もりもち交流会にてトマトのおんがえしカレー、サブレ販売 ・JCOM 大学生と考える SDGs アクション支援プロジェクト応募、ベストアクション受賞（北九州市の課題を食で解決！竹炭かりんとう） ・サンタウォーク実施（1086 人の参加者を到津の森へ）サンタ ・サンタウォークについて、片山副市長表敬訪問 ・北九州市立高校とコラボして、「こどもの居場所作りプロジェクト」子ども食堂を開催 ・規格外トマト番外編！マルゲリータピザ井筒屋で販売（B&W さん、佐佐井株式会社、敬愛高校さんとコラボ） ・農林水産省九州農政局　トマトのおんがえし取り組み取材	令和６年 11 月 令和６年 11 月 令和６年 12 月 令和７年１月 令和７年１月 令和７年３月
所　属　学　会	日本栄養改善学会 日本栄養士会 日本スポーツ栄養学会 日本リハビリテーション研究会 日本健康教育学会 大学地域連携学会	(平成 23(2011)年１月～現在に至る) (平成 23(2011)年４月～現在に至る) (平成 25(2013)年４月～現在に至る) (平成 24(2012)年４月～現在に至る) (平成 25(2013)年４月～現在に至る) (令和６(2024)年４月～現在に至る)

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

中野（ナカノ） 眞弓（マユミ）　NAKANO Mayumi　准教授

所　　属	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部　食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・給食経営管理論 ・給食管理 ・応用栄養学実習 ・給食管理実習 ・臨地実習Ⅲ（特定給食施設）／臨地実習指導（演習） ・管理栄養士演習ＩＡ、ＩＢ、管理栄養士演習Ⅱ、専門ゼミナール ・栄養福祉論　専門ゼミナール
専 門 分 野	■ 給食経営管理学
最 終 学 歴	中村学園大学大学院 流通科学研究科 修士課程修了
学　　位	修士（流通科学）
職　　歴	学校法人中村学園　事業部　（昭和59(1984)年４月～昭和 60(1985)年８月） 同　給食課 副主任　（昭和60(1985)年９月～昭和 61(1986)年10月） 同　給食課 主任　（昭和61(1986)年10月～平成9(1997)年３月） 同　給食課 支配人　（平成9(1997)年４月～平成16(2004)年４月） 同　給食課 係長　（平成16(2004)年４月～平成26(2014)年５月） 同　給食課 課長代理　（平成26(2014)年６月～平成28(2016)年６月） 株式会社 真慈会　（平成30(2018)年７月～令和3(2021)年９月） 株式会社 リスマイル　（令和3(2021)年10月～令和4(2022)年３月） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授　（令和7(2025)年５月～現在に至る）
教育上の業績	教育方法の実践例 ○中村学園大学短期大学部「栄養士総合講座」　（平成25(2013)年11月） （平成26(2014)年　９月） （平成27(2015)年７月） ○中村学園大学短期大学部「中村学」 ○(株)東京教学者　イラスト給食経営管理論　（令和７（2025）年４月） 共著
主な研究活動	【学術論文】 1.　特集「給食事業の新たなるビジネスモデルの構築」（単著） （中村学園大学院流通科学研究科修士論文集　平成29(2017)年３月） (概要) 給食事業における課題のうち２点の解決に向けて取り組んだ。 第一に、労働力不足を改善するために毎日の食事を安全で安心に提供できる食材の入手方法について検討した。 第二には、増加傾向にあるインバウンドへの対応として、日本食の良さについて発信した。 特にハラール市場への発信を中心として検討をおこなった。 九州内の大規模法人を経営する３つの優良事例を中心に、給食事業の新たなビジネスモデル構築に向けて調査研究をおこなった。
	【学会発表】 1.　「学生食堂における食育推進活動の取り組み―第１報―」（共著） 城田知子、寺澤洋子、近江雅代、岩本昌子、三好恵美子、内田和宏、松隈美紀、中野眞弓、松永美歩 〈主 催 等〉第59回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉愛知県 〈開催年月〉平成24(2012)年９月 2.　「学生食堂における食育推進活動の取り組み―第２報―」（共著） 内田和宏、寺澤洋子、近江雅代、岩本昌子、三好恵美子、松隈美紀、中野眞弓、松永美歩、城田知子 〈主 催 等〉第59回 日本栄養改善学会

	〈開催場所〉愛知県 〈開催年月〉平成 24(2012)年 9 月
	3. 「学生食堂における食育推進活動の取り組み―第 3 報―」（共著） 松永美歩、中野眞弓、岩本昌子、三好恵美子、内田和宏、松隈美紀、城田知子、寺澤洋子 〈主 催 等〉第 59 回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉愛知県 〈開催年月〉平成 25(2013)年 9 月
	4. 「事業所における食育推進活動の実施状況と評価―第 1 報―」（共著） 高橋清美、中野眞弓、城田知子 〈主 催 等〉第 61 回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉神奈川県 〈開催年月〉平成 26(2014)年 8 月
	5. 「事業所における食育推進活動の実施状況と評価―第 2 報―」（共著） 高橋清美、中野眞弓、城田知子 〈主 催 等〉第 62 回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉福岡県 〈開催年月〉平成 27(2015)年 9 月
主な社会活動	・「九電工スポーツ寮における栄養管理等参画」 （スポーツ選手寮における献立作成及び喫食状況の確認等通じて食事面からのサポートを実施した） （平成 19(2007)年 12 月～平成 22(2010)年 2 月）
	・「中村学園三陽中学校における学校給食の献立作成と運営サポート」 （福岡県内の私立中学校における初の試みとして学校給食を導入した） （平成 22(2010)年 4 月～平成 28(2016)年 5 月）
	・「セミナーハウスのアレルギー食対応マニュアル」 （研修施設のセミナーハウスにおける個別対応用のアレルギーマニュアルを作成した） （平成25(2013)年7月）
	・「高齢者施設における食事形態別対応の整理」 （高齢者施設における栄養士の負担軽減のために、 利用者の食事形態を電子化するなど運営業務を整理した）（平成 25(2013)年 11 月～12 月）
所 属 学 会	日本栄養改善学会（平成 24(2012)年 8 月～平成 28(2016)年 5 月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

青佐（アオサ） 泰志（タイシ）　AOSA　Taishi　講師

所属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕
	・臨床栄養学Ⅱ ・臨床栄養学Ⅲ ・臨床栄養学実習Ⅰ ・臨床栄養学実習Ⅱ ・臨地実習Ⅰ ・キャリアデザイン ・臨地実習指導（演習）
専門分野	■臨床栄養学分野 ■医科学分野
最終学歴	大分大学・大学院博士課程前期／後期　医学系研究科／医学専攻　卒業／修了／単位取得満期退学
学位	博士（医学）／修士（医科学）／学士（栄養学）／準学士（）／専門士
職歴	九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科　（令和６年４月～現在に至る）
教育上の業績	○マルチメディア機器を活用し、オンライン配信として市民公開講座として、口腔ケアの意義と食事との相互作用について講演を行なった。
	○臨床栄養学に関する複数の動画をインターネット上にアップロードし公開した。
	○栄養食事指導 500 症例以上。NST/嚥下/褥瘡委員会、(NST:120 症例/年、嚥下造影検査：300 症例/年、褥瘡：60 症例/年)。院内感染予防委員会、新人管理栄養士の教育接遇指導を実施した。
	○特定保健指導(80 症例/年)、口腔ケア事業(50 症例/年)および高齢者の介護予防と一体的な事業(100 件/年)を担当した。
	○Swift：これまでに iOS 用のアプリケーションの開発としてこれまでに管理栄養士養成用（科目：臨床栄養学）の教材を作成した。
	○マイクロソフト VBA：マクロを用い、行政と大学機関、歯科医師会との情報を連携するシステムを開発した。
	○栄養食事指導 500 症例以上。NST・嚥下褥瘡委員会、(NST:120 症例/年、嚥下造影検査：300 症例/年、
	褥瘡：60 症例/年)。院内感染予防委員会、新人管理栄養士の教育接遇指導
	○特定保健指導(80 症例/年)、口腔ケア事業(50 症例/年)および高齢者の介護予防と一体的な事業(100 件/年)を担当。
	現在は、口腔ケア事業を中心として、在宅患者さまの栄養アセスメントや栄養食事指導に従事
	＜資格＞ 栄養士免許証、管理栄養士免許証、栄養教諭第一種免許、アメリカ心臓協会 BLS プロバイダー
主な研究活動	【学術論文】 1.仮想式ランチバイキング法を用いた行動療法の実践 肥満研究 Vol.17(3)，216-23　平成23年12月 青佐泰志、千葉政一、石川真奈美、湯浅玲子、嶋田知生、中塚和夫、加隈哲也、吉松博信 （概要）特定健診対象者 44 名に対してランチバイキング(仮想式食品選択訓練)法を行い、支援前後における臨床診査値を比較した。さらに積極的支援６名は腹囲、糖脂質代謝、循環動態を指標とする血液検査値を比較した。食品選択内容についてロジスティック回帰分析を行った。その結果、保健指導のランチバイキング法の導入は、保健指導の維持および体重の減量、BMI の是正効果が認められ、積極的支援者においては収縮期、拡張期血圧、中性脂肪の改善が認められた。食品選択の特性は、飽和脂肪酸の摂取比率の増加が病態悪化のリスクを高めることが示唆された。 ［全頁担当］
	2. 糖尿病外来における HbA1c の季節変動解析と食事栄養指導介入による影響 日本病態栄養学会誌 Vol.17(4), 459-64　平成26年8月 青佐泰志、千葉政一、家原麻理、甲斐愛祐美、魏会興、浅井祥子、村上由希子、三橋由美子、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、柴田洋孝、井野辺純一

	（概要）2 型糖尿病患者における HbA1c を時系列的に解析した。次に栄養指導の介入が糖尿病患者の HbA1c の季節変動に及ぼす影響について検討した。対象は I 病院の 2 型糖尿病外来患者 122 名とした。非介入群の HbA1c は夏季から秋季にかけて有意な減少、冬季から春季にかけて有意な増加が認められた。一方、介入群では、冬季から春季における HbA1c 上昇の有意な抑制が認められた。季節 ARIMA 解析により、両群の HbA1c の変動パターンが有意に異なった。栄養指導により、HbA1c の季節変動において有意な改善が認められ、2 型糖尿病患者の糖代謝の改善への有効性が示唆された。 ［全頁担当］
	3. A clinical approach to brown adipose tissue in the para-aortic area of the human thorax PLoS One 10(4):e0122594. Huixing Wei, Seiichi Chiba, Chinatsu Moriwaki, Hirokazu Kitamura, Keisuke Ina, Taishi Aosa, Kenichiro Tomonari, Koro Gotoh, Takayuki Masaki, Isao Katsuragi, Hitoshi Noguchi, Tetsuya Kakuma, Kazuyuki Hamaguchi, Tatsuo Shimada, Yoshihisa Fujikura, Hirotaka Shibata （概要）We analyzed 1550 healthy adults who underwent medical check-ups by positron-emission tomography and computed tomography (PET-CT) imaging, 8 cadavers, and 78 autopsy cases in an observational study. We first characterized the difference between the mediastinum and the supraclavicular areas using counts of BAT detection and conditions based on PET-CT outcomes. Para-aortic area (paBAT) may be one of the essential sites for clinical application in BAT study because of its visible anatomy with feeding vessels and sympathetic/parasympathetic innervation functionally affected by outer condition and senescence. Overview of BATs and cwlls. P11、Determinants of BAT morphology. P12
	4. Distribution of histaminergic neuronal cluster in the rat and mouse hypothalamus J Chem Neuroanat 68:1-13:10.1016 Chinatsu Moriwaki, Seiichi Chiba, Huixing Wei, Taishi Aosa, Hirokazu Kitamura, Keisuke Ina, Hirotaka Shibata, Yoshihisa Fujikura （概要）We examine stereological distributions of hypothalamic HDCi neuronal clusters of rats and mice by the Inagaki's nomenclature. We reveal the characteristic patterns of the distributions of HDCi clusters especially in E4 and E5. The precise identification of the HDCi clustering may provide useful information for further investigations. HDCi neuronal clusters of the hypothalamus of rats. P4,5、HDCi neuronal clusters of the hypothalamus of mice. P7,8,9
	5. Pore alterations of the endothelial lining of rat fenestrated intestinal capillaries exposed to acute stress Histol Histopathol(7):807-17. Taishi Aosa, Seiichi Chiba, Hirokazu Kitamura, Keisuke Ina, Shuji Tatsukawa, Chinatsu Moriwaki, Huixing Wei, Koro Gotoh, Takayuki Masaki, Tetsuya Kakuma, Hirotaka Shibata, Yoshihisa Fujikura （概要）We evaluated changes in the diameter and density of endothelial pores of the lamina propria of intestinal villi induced by continuous light (CL) exposure for 48 h and the correlation between these changes and serum IL-6 concentration in the portal vein in a rat model. We found significant increases in both the pore diameter and density, accompanied by a significant increase in portal IL-6 concentration. In contrast, intravenous noradrenaline administration mimicked CL-induced modifications of the diameter and density of pores and the elevation of portal vein IL-6 concentration. These findings suggested that stress-induced inflammatory responses in the portal system may be a part of the modifications of the endothelial pores triggered by sympathetic activation. ALL

	6. Dietary education suppresses the seasonal exacerbation of HbA1c with type 2 diabetes mellitus patients in Japan 別府大学大学院紀要 24. 117-125. Taishi Aosa （概要）Type 2 diabetes mellitus patients show seasonal variation in their hemoglobin A1c levels. Seasonal variation in hemoglobin A1c levels was able to observe in type 2 diabetes mellitus patients; it decreased between summer and autumn and increased in winter to spring. HbA1c in diet-educated type 2 diabetic mellitus patients decreased independently of seasonal variation. Furthermore, early intervention improved blood glucose levels effectively; this may prove to be important in regulating carbohydrate ALL **7.** 豊前市口腔ケアプロジェクトにおける栄養評価の取り組みとその成果. 栄養学雑誌. Vol.81 No.1 40-49 岡田圭子、濱嵜朋子、角田聡子、朴祇佑、茂山博代、片岡正太、山田志麻、酒井理恵、芹田千穂、白木光、星野行孝、相良献、廣島屋貴俊、岩嵜正則、青佐泰志、松本研一、石田昌嗣、出水幹夫、平良祥、大津ナツミ、倉富慶太郎、金光真由美、末永公恵、川端真純、田利ひさみ、辻元利美、園田まち子、夕田光、鳥井寛子、伊藤美保子、亀甲真奈美、中野渚、筒井修一、安細敏弘. （概要）口腔ケア実施後には，ベースライン時と比較して骨格筋指数、骨格筋量が有意に高くなっていた。口腔ケア実施後に、栄養状態良好な者の割合が高くなっていたことに着目し、再評価時の簡易栄養状態評価表を目的変数とした多変量のロジスティック回帰分析を行った。その結果ベースライン時の骨格筋指数と食品摂取の多様性評価票の点数が有意に低栄養評価と関連していた。口腔のみならず栄養や全身健康状態の改善がみられたことは、有意義で実践的な取り組みであるといえる。 データ抽出、栄養食事指導を担当。 **8.** Influence of Age on Associations of Occlusal Status and Number of Present Teeth with Dementia in Community-Dwelling Older People in Japan: Cross-Sectional Study Int J Environ Res Public Health. 1;20(9):5695. doi: 10.3390/ijerph20095695. Hikaru Shiraki, Satoko Kakuta, Ji-Woo Park, Taishi Aosa, Toshihiro Ansai （概要）The present study examined the associations of tooth loss and occlusal status with dementia in the older people, as well as the effects of age on those relationships. A total of 196 older participants were enrolled. Occlusal status was assessed using functional tooth units (FTU), calculated based on the number of paired natural or artificial teeth. The results showed that higher FTU was associated with lower risk of dementia. Furthermore, when stratified by median age, the association was greater for those aged less than 84 years. On the other hand, there was no significant association of number of present teeth with dementia. データ抽出、栄養アセスメント、栄養食事指導を担当

	【学会発表】
	1. 特定保健指導におけるランチバイキングを用いた行動療法の実践 〈主　　催〉第31回日本肥満学会 〈開 催 場 所〉前橋市 〈開催年月日〉平成22年10月 （概要）S 病院における特定保健指導において、ランチバイキング法を用いた食品選択の特性を解析した。 青佐泰志、石川真奈美、湯浅玲子、千葉政一、嶋田知生、吉松博信
	2. 仮想形式ライチバイキング法を用いた行動療法の実践 〈主　　催〉第32回日本肥満学会 〈開 催 場 所〉姫路市 〈開催年月日〉平成23年11月 （概要）ランチバイキング法を用いた食品選択の特性をロジスティック回帰分析にて解析し行動療法の有用性を示した。 青佐泰志、千葉政一、石川真奈美、魏会興、嶋田知生、加隈哲也、吉松博信
	3. ランチバイキング法を用いた行動療法 〈主　　催〉第17回日本病態栄養学会 〈開 催 場 所〉京都市 〈開催年月日〉平成24年1月 （概要）保健指導のランチバイキング法の導入は、保健指導の維持および体重の減量、BMI の是正効果が認められ、積極的支援者においては収縮期、拡張期血圧、中性脂肪の改善が認められた。 青佐泰志、千葉政一、石川真奈美、魏会興、嶋田知生、加隈哲也、吉松博信
	4. 交感神経活性化による腸管有窓性毛細血管の微細構造の検討 〈主　　催〉第22回日本病態生理学会 〈開催場所　〉由布市 〈開催年月日〉平成24年8月 （概要）Wistar 系雄性ラットの尾静脈にNoradrenaline を投与し、腸管の有窓性毛細血管の小孔を電子顕微鏡にて観察した。 青佐泰志、千葉政一、北村祐和、加隈哲也、伊奈啓輔、藤倉義久、原政英
	5. ヒト後縦隔褐色脂肪組織の生物学的特性 〈主　　催〉PEC－CT を用いてヒト褐色脂肪組織の電子顕微鏡像を観察した。 〈開 催 場 所〉京都市 〈開催年月日〉平成24年10月 （概要）PEC－CT を用いてヒト褐色脂肪組織の電子顕微鏡像を観察した。 魏会興、千葉政一、北村裕和、伊奈啓輔、森脇千夏、青佐泰志、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、浜口和之、原正英、藤倉義久
	6. 交感神経活性化に伴う腸管微細構造の検討 〈主　　催〉 〈開催場所　〉京都市 〈開催年月日〉平成24年10月 （概要）istar 系雄性ラットの尾静脈にNoradrenaline を投与し、腸管の有窓性毛細血管の小孔を電子顕微鏡にて観察した。 青佐泰志、千葉政一、北村祐和、魏会興、森脇千夏、加隈哲也、伊奈啓輔、藤倉義久、原政英

	7. 高コレステロール食慢性投与による脳コレステロール合成とヒスタミン神経細胞への影響（i） 〈主　　催〉第16回日本ヒスタミン学会 〈開催場所　〉岡山市 〈開催年月日〉平成24年10月 （概要）C57BL/6 雄性マウスに 4 週間のコレステロール添加食を摂取さえると脳内にタウタンパク陽性反応を示した。 森脇千夏、千葉政一、北村裕和、魏会興、青佐泰志、伊奈啓輔、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、浜口和之、藤倉義久、原政英
	8. ヒスチジン投与による骨格筋量の検討 〈主　　催〉第56回日本糖尿病学会 〈開催場所　〉熊本市 〈開催年月日〉平成25年5月 （概要）C57BL/6 雄性マウスにヒスチジン添加食を投与すると骨格筋量の増加と糖代謝改善機能が認めらえた。 青佐泰志、千葉政一、魏会興、正木孝幸、後藤孔郎、加隈哲也
	9. 持続的な照明ストレスが及ぼす生体応答と毛細血管構造の動態変化 〈主　　催〉第34回日本肥満学会 〈開催場所　〉東京 〈開催年月日〉平成25年10月 （概要）Wistar 系雄性ラットの概日リズムを変調されるとストレス応答に応じて、体重増加傾向、耐糖能異常および循環動態の増悪を認めた。 青佐泰志、千葉政一、北村祐和、魏会興、森脇千夏、加隈哲也、伊奈啓輔、藤倉義久、柴田洋孝
	10. 地域糖尿病予防教室におけるインスリン抵抗性改善のための目標減量体重の設定 〈主　　催〉第35回日本肥満学会 〈開催場所　〉宮崎市 〈開催年月日〉平成26年10月 （概要）F 市における 2 型糖尿病教室の開催においてインスリン抵抗性改善のための減量目標値を示した。 川原愛弓、森脇千夏、吉村加奈、矢野義記、青佐泰志
	11. 飢餓における H1 受容体を介した視床下部ヒスタミン機能 〈主　　催〉第18回日本ヒスタミン学会 〈開催場所　〉尼崎市 〈開催年月日〉平成26年10月 （概要）飢餓状態の H1KO マウスは大動脈周囲の褐色脂肪細胞における UCP1 の活性を認めた。 魏会興、千葉政一、青佐泰志、森脇千夏、伊奈啓輔、正木孝幸、後藤孔郎、加隈哲也、柴田洋孝、藤倉義久
	12. 持続照明を用いた慢性ストレスにおけるラットの生体応答の解析 〈主　　催〉第36回日本肥満学会 〈開催場所　〉名古屋市 〈開催年月日〉平成27年10月 （概要）Wistar 系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した場合、耐糖能異常、炎症反応を認めた。 青佐泰志、千葉政一、北村裕和、森脇千夏、立川修二、伊奈啓輔、藤倉義久
	13. Wistar 系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した結果、門脈中の IL-6 濃度の上昇を認めた。 〈主　　催〉第18回日本病態栄養学会 〈開催場所　〉京都市 〈開催年月日〉平成27年1月 （概要）Wistar 系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した結果、門脈中の IL-6 濃度の上昇を認めた。 青佐泰志、魏会興、森脇千夏、千葉政一、伊奈啓輔、藤倉義久

	14. 2型糖尿病患者のHbA1cの季節変動解析と栄養指導介入による影響 〈主　　催〉第18回日本病態栄養学会 〈開催場所　〉京都市 〈開催年月日〉平成27年1月 （概要）2型糖尿病患者に栄養指導を継続的に行うとHbA1cの季節変動値が改善を認めた。 青佐泰志、魏会興、森脇千夏、千葉政一、伊奈啓輔、藤倉義久
	15. A profiling of food selection of patients of lifestyle related disease 〈主　　催〉12th Asian Congress of Nutrition 〈開催場所　〉横浜 〈開催年月日〉平成27年5月 （概要）ランチバイキング法を用いた生活習慣病患者の食品選択のプロファイリングを行った結果、飽和脂肪酸に有意な差を認めた。 重永雅美、千葉政一、青佐泰志、森脇千夏、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、柴田洋孝
	16. 慢性ストレスを負荷したラットの脂肪分布解析 〈主　　催〉第37回日本肥満学会 〈開催場所　〉横浜 〈開催年月日〉平成28年10月 （概要）Wistar系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した場合、肩甲骨下の褐色脂肪組織中のUCP-1の活性は低下した。 青佐泰志、千葉政一、北村裕和、　森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久
	17. Wistar系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育し高脂肪食を与えると肝組織中に大型脂肪滴の沈着と炎症反応を認めた。 〈主　　催〉第20回日本病態栄養学会 〈開 催 場 所〉京都市 〈開催年月日〉平成29年1月 （概要）Wistar系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育し高脂肪食を与えると肝組織中に大型脂肪滴の沈着と炎症反応を認めた。 青佐泰志、千葉政一、北村裕和、森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久
	18. 高齢者における日本版地中海食スコア（jMDS）と生命予後との関連性 〈主　　催〉第70回日本口腔衛生学会 〈開 催 場 所〉沖縄 〈開催年月日〉令和3年5月 （概要）日本版地中海食スコアが高い者は、現在歯数が多く、食生活の質が維持されている可能性があることから死亡のリスクが低いことが考えられた。 朴祇佑、角田聡子、濱嵜朋子、岡田圭子、青佐泰志、酒井理恵、芹田千穂、茂山博代、片岡正太、筒井修一、岩嵜正則、安細敏弘
	19. 地域在住女性高齢者における認知症と食事パターンとの関連 〈主　　催〉第72回日本航空衛生学会 〈開 催 場 所〉大阪 〈開催年月日〉令和5年5月 （概要）F市における高齢女性の認知症発症と食事のパターンを解析した。その結果、脂肪酸の摂取量が認知症の有無と関係していることがわかった。 白木 光、角田聡子、朴 祇佑、遠藤景子、青佐泰志、筒井修一、安細敏弘

主な社会活動	・福岡県豊前市　在宅歯科訪問事業における栄養アセスメントおよび栄養食事指導 ・福岡県豊前市立小学校における口腔ケア事業
所　属　学　会	日本栄養士会学会（平成28年～） 日本臨床栄養学会（令和３年～） 日本健康栄養・システム学会（令和６年～）
受　　賞　　歴	大分大学 学業成績表彰（第３条第１号）授与　（平成24年 ３月）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

林田（はやしだ） 智子（さとこ） HAYASHIDA Satoko 講師

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・栄養教育論Ⅰ ・栄養教育論Ⅱ ・栄養教育論Ⅲ ・栄養教育論実習Ⅰ ・調理学実習Ⅲ
	・キャリアガイダンスⅡ
	・専門ゼミナール
	〔リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科〕 ・健康と栄養 ・
専門分野	■栄養教育
最終学歴	福岡県立福岡女子大学 家政学部／食物学専攻 卒業／
学位	家政学士
職歴	中村学園大学 食物栄養学部 食物栄養学科 副手 (1992年4月～1993年3月) 株式会社 建設技術研究所 福岡支社 設計アシスタント (1993年5月～1994年12月) 福岡県立福岡女子大学 家政学部 家政学科 早渕研究室 助手 (1995年1月～1995年3月) 岡垣町役場 健康対策課 健康対策係 栄養士 (1995年4月～2001年5月) 岡垣町役場 健康福祉課 健康づくり係 栄養士 (2001年5月～2010年9月) 岡垣町役場 健康づくり課 健康増進係 栄養士 (2010年10月～2016年3月) 岡垣町役場 健康づくり課 健康増進係 統括主査 (2016年3月～2024年10月) 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 (2025年4月～現在に至る)
教育上の業績	【大学における講義】
	○西南女学院大学 「行政栄養士の業務について」(2000年10月)
	○福岡県立福岡女子大学 「行政栄養士の業務について」(2002年10月)
	【岡垣町役場における住民に対する栄養指導】(1995年4月～2024年10月)
	○ライフステージごとの栄養指導
	・妊婦栄養指導：集団・個人栄養指導
	・乳幼児栄養指導：乳幼児健診における集団・個人栄養指導、子育て相談
	・にこにこクッキング（離乳食・幼児食教室）
	・親子クッキング：幼児や学童期の子どもとその保護者に対する調理・栄養指導
	・高齢者栄養指導：いきいき長生き講座・おでかけ！ヘルシークッキング（一般高齢者栄養教室）
	○病態別栄養教室の開催における栄養指導
	・糖尿病予防教室：集団・個人栄養指導
	・高血圧予防教室：集団・個人栄養指導
	○特定健診結果説明会
	○糖尿病性腎症重症化予防プログラム
	○訪問指導
	○ニコッ糖チャレンジ教室（特定健診受診者運動教室）
	○各教室の企画・実施・評価
	○食生活相談：個人栄養相談
	○各種依頼事業全般
	・出前講座（中央公民館主催）
	・ライフスタイル講座（中央公民館主催）
	・若潮学級（中央公民館主催）

	・キッズ体験教室（中央公民館主催）
	・ホームヘルパー対象料理教室（社会福祉協議会主催）
	・介護者対象料理教室（社会福祉協議会主催）
	・岡垣町婦人会料理講習
	・町老連女性リーダー研修会（岡垣町老人クラブ連合会女性部）
	〈ボランティアの養成及び活動支援〉
	○元気の“わ”広め隊養成講座（食生活改善推進員・運動普及推進員・保健推進員養成講座）の開催
	○食生活改善推進員・保健推進員の活動支援
	〈学生実習〉
	○学生実習の指導
	〈広報活動〉
	○広報誌・ホームページによる食生活改善普及啓発
	・広報おかがき「健康づくり info」
	・広報おかがき特集記事 2019 年 12 月号「糖尿病を知る」 2021 年 12 月号「食と体を知る」 2023 年 1 月号「私のカラダをつくるもの」
	〈乳幼児の栄養管理〉
	○母子栄養関係とりまとめ
	○母子栄養関係企画・実施・評価 ・にこにこクッキング（離乳食・幼児食教室）の立ち上げ
	〈栄養管理業務統括〉
	○栄養改善事業の企画立案
	・生活習慣病予防対策事業の立ち上げ 糖尿病予防・高血圧予防教室、イベント等の企画・実施
	○介護予防事業の新規取組
	・高齢者の低栄養予防事業の企画・実施
	〈岡垣町健康増進計画の推進〉
	○健康増進計画の周知活動
	・健康増進イベント「みんなで楽しく広げよう　元気の“わ”」の開催
	○広報誌における「健康づくり 10 カ条」の普及啓発
	〈ボランティア団体との連携〉
	○保健推進員会立ち上げに関する業務
	・保健推進員自主活動組織立ち上げに関する会議の開催
	・先進地視察 町長随行（長野県保健補導員制度）
	・保健推進員自主活動組織準備委員会発足
	・保健推進員会設立（2013 年 3 月）
	【作成した教材等】
	・岡垣町食生活改善推進会設立 20 周年記念誌「普段着の料理集」（1999 年 10 月）
	・乳幼児健診時配布冊子「育児のおたすけブック」（2011 年 4 月）
	・保健推進員会「おかがき楽しく歩こうマップ」（2014 年 7 月）
	・食生活改善推進会「健康レシピ～美味しく健康づくり～」（2014 年 8 月）
	・第２次健康増進計画普及啓発冊子「健康づくりことばあそび集」（2016 年 3 月）
	・「岡垣町業務継続計画（新型インフルエンザ等編）」（2020 年 9 月）
	・保健推進員会「おかがき楽しく歩こうマップ２」（2023 年 3 月）
主な研究活動	【学会発表】
	「健康増進計画における住民組織のちから」 〈主催〉 第 62 回福岡県公衆衛生学会（2015 年 5 月）
	〈開催年月〉 2015 年 5 月

	（概要） 岡垣町第２次健康増進計画の基本理念である「みんなで楽しく 広げよう 元気の“わ”」の実現のために、健康づくり関係団体（食生活改善推進会、運動普及推進会、保健推進員会）と協働で、健康づくりの取り組みをすすめていくことの重要性について

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

油屋（アブラヤ） 和（イズミ） ABURAYA Izumi 助手

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	・調理学実習Ⅲ ・料理特別実習Ⅲ（中華料理） ・栄養教育論実習Ⅰ ・食品加工学実習Ⅲ ・栄養士のための農園演習
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 修了
学位	修士（健康科学）
職歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科助手 （令和２年４月～現在に至る）
主な研究活動	【学術論文】
	1.鶏卵ペプチドのアミロイド線維形成抑制効果 （概要）鶏卵タンパク質のプロテアーゼ消化物つまりペプチドにアミロイド線維加制効果があるかを調べ、アミロイド線維形成タンパク質である HEWL に対してペプチドに効果を観察した結果、卵白（EW-ペプチド）およびカラザペプチド （C-ペプチド）に強い抑制効果を認めた。また、ヒトリゾチーム（h-Lz）およびヒトアミロイドＢペプチド 1-42（Aβ1-42）の線維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド線維形成を促進する２価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。
	【学会発表】
	1. 鶏卵ペプチドのアミロイド線維形成制効果 〈主 催〉第 69 回 日本食品科学工学会 〈開 催 場 所〉オンライン開催 〈開催年月日〉2022 年 8 月 25 日
	（概要）アミロイド繊維形成における鶏卵タンパク質加水分解物の抑制効果 ヒトリゾチーム（h-Lz）およびヒトアミロイドＢペプチド 1-42（Aβ1-42）の線維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド線維形成を促進する２価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。
	2.豆腐の微細構造とゲル強度に及ぼすトリグリセリドの脂肪酸組成の影響 〈主 催〉日本農芸化学会 〈開 催 場 所〉東京農業大学 〈開催年月日〉2024 年 3 月 25 日
	（概要）大豆油の脂肪酸組成は、通常リノール酸約 50%、オレイン酸約 20%であるが、高オレイン酸系統大豆は、オレイン酸含量が 80%以上で著しく高い。 我々は、分離大豆タンパク質（SPI）に通常の大豆油（SO）または高オレイン酸大豆油（HOSO）を添加して豆乳を調製後、凝固剤として CaSO4 を加え、脂質組成の異なる２種の豆腐を作成した。走査型電子顕微鏡で観察した結果、HOSO 豆腐は、SO 豆腐より、密度の高い均一な微細構造をしていることを見出した。さらに、豆腐のゲル強度に及ぼす脂肪酸組成の影響を調べるために、SPI に SO または 80%オレイン酸を含むオリーブオイル（OO）を添加して豆腐を作成し、破断強度試験を行った。その結果、OO 豆腐は、SO 豆腐よりゲル強度が高く、弾力があることが分った。この OO 豆腐の物性は、HOSO 豆腐がより密度の高い微細構造を有していたという結果と一致しており、トリグリセリド中の高いオレイン酸含量に起因するものと考えられる。
	３分離大豆タンパク質エマルジョンゲルの構造と物性に及ぼす油脂中の脂肪酸組成の影響
	〈主 催〉日本栄養改善学会 〈開 催 場 所〉大阪公立大学 杉本キャンパス 〈開催年月日〉2024 年 9 月 6～8 日
	豆乳から豆腐の形成機構は、粒子タンパク質や可溶性タンパク質の凝集と油滴球との結合が関わっており、食品加工学のみならず、相分離生物学とも関連して、非常に興味深い研究テーマである。大豆油の脂肪酸組成は、通常リノール酸約 50%、オレイン酸約 20%であるが、高オレイン酸系統（高オレ）大豆は、オレイン酸含量が 80%以上で著しく高い。これまで、高オレ大豆豆腐と

フクユタカ豆腐を走査型電顕で観察した結果、高オレ大豆豆腐は、フクユタカ豆腐より密度の高い均一な微細構造をしているという興味深い知見を得ている。本研究では、分離大豆タンパク質エマルジョンゲルの構造と物性に及ぼす油脂中の脂肪酸組成の影響を明らかにすることを目的とし、フクユタカ由来の分離大豆タンパク質（SPI）にフクユタカ大豆油、高オレ大豆油、両者を1：1で混合した大豆油を添加して豆乳・豆腐を作成し、構造と物性を比較した。

4 環境未来都市北九州における地域連携実践報告
～規格外野菜を通じた子どもの居場所支援～

〈主　　催〉大学地域連携学会
〈開 催 場 所〉茨城県水戸市民会館
〈開催年月日〉2024 年 11 月 16～17 日

(はじめに)北九州市は環境未来都市であり、地域でエネルギーを創り効率的に使うまち・子育てしやすいまち・環境ビジネスの拠点となるまちの実現を目指している[1]。北九州市若松区にある響灘菜園では年間 3100 ﾄﾝのトマトが収穫されており、そのうち、傷ができて出荷できないような C 級品の規格外トマトは年間 100 ﾄﾝあり、廃棄されている。規格外トマトは年間総生産量の3.2%ではあるが、廃棄にもコストがかかってしまう。持続可能な社会の実現に向けた活動（課題解決）及び子育て支援の在り方を検討した。
(商品化にむけて)できるだけ多くの規格外トマトが使用できることや子どもたちが喜ぶ商品にすることを考えた時、カレーはおいしさだけでなく、トマトの 94%が水分でできているため、無水でカレーができ、栄養的な側面からも効果があるということを謳えるのではないかと、トマト使用のカレーの検討を行った。また、ネーミングやパッケージについても、他大学と連携を進めた。
(規格外野菜の北九州モデル化に向けて)規格外トマトをトマトのおんがえしカレーとして商品化し、その売り上げの一部を子どもたちの居場所づくりにという北九州市オリジナルモデルとして構築した。トマトのおんがえしカレーに使用できるトマトは年間約１ﾄﾝのため、今後、地元の企業と連携し、規格外トマトの有効活用の提案を継続していきたい。

所　属　学　会	・公益社団法人　福岡県栄養士会	（２０２０年４月～現在に至る）
	・日本健康・栄養システム学会	（２０２２年６月～現在に至る）
	・特定非営利活動法人　日本栄養改善学会	（２０２３年６月～現在に至る）
	・公益社団法人　農芸化学会	（２０２３年１１月～現在に至る）
	・大学地域連携学会	（２０２４年４月～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

ヤマモト　アカネ
山本　茜　　YAMAMOTO　Akane　助手

所　　属	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部　　食物栄養学科
担当科目 〔講義補助〕	**〔食物栄養学部 食物栄養学科〕** ・〔食物栄養学科〕臨床栄養学実習Ⅰ ・〔食物栄養学科〕料理特別実習Ⅰ ・〔食物栄養学科〕臨床栄養学実習Ⅱ ・〔食物栄養学科〕応用栄養学実習
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部　食物栄養学科　　卒業
学　　位	学士（食物栄養学）
職　　歴	株式会社ケアリング　管理栄養士　　（2022年4月～2022年8月） 九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　助手　　（2023年4月～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

大野（おおの）　優菜（ゆうな）　ONO　Yuna　助手

所　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目 〔講義補助〕	**〔食物栄養学部 食物栄養学科〕** ・〔食物栄養学科〕解剖生理学実験 ・〔食物栄養学科〕公衆栄養学実習 ・〔食物栄養学科〕専門ゼミナール ・〔食物栄養学科〕解剖生理学実習
	・〔食物栄養学科〕食品衛生学実験
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　卒業
学　位	学士（食物栄養学）
職　歴	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　助手　（2023 年 4 月～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

安東（アンドウ）　穂香（ホノカ）　ANDOU Honoka　助手

所　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目 〔講義補助〕	**〔食物栄養学部 食物栄養学科〕** ・〔食物栄養学科〕給食管理実習 ・〔食物栄養学科〕臨地実習指導演習 ・〔食物栄養学科〕キャリアデザイン
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	別府大学　食物栄養科学部　食物栄養学科　卒業
学　位	学士（食物栄養学）
職　歴	株式会社サンドラッグ　香月店　（2024 年 4 月～2025 年 3 月） 九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　助手　（2025 年 4 月～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

岡本（オカモト）　未来（ミク）　Okamoto　Miku　助手

所　属	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科
担当科目 〔講義補助〕	**〔食物栄養学部 食物栄養学科〕** ・〔食物栄養学科〕調理学実習Ⅰ ・〔食物栄養学科〕料理特別実習Ⅱ ・〔食物栄養学科〕キャリアガイダンスⅠ
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　卒業
学　位	学士（食物栄養学）
職　歴	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　助手　（2025 年 4 月～現在に至る）

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

前田（マエダ） 真澄（マスミ）　　MAEDA MASUMI　　助手

所　　属	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部　　食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	**〔食物栄養学部 食物栄養学科〕** ・〔食物栄養学科〕食品基礎実験 ・〔食物栄養学科〕基礎栄養学実験 ・〔食物栄養学科〕キャリアガイダンスⅡ
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学　　食物栄養学部　食物栄養学科　　卒業
学　　位	学士（食物栄養学）
職　　歴	九州栄養福祉大学　食物栄養学部　食物栄養学科　助手　　（2025 年 4 月～現在に至る）